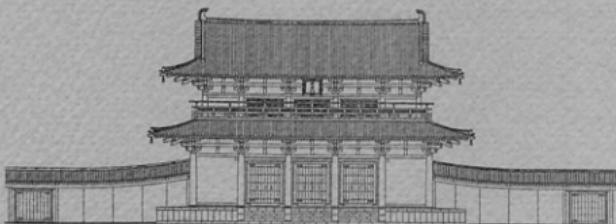


奈良国立文化財研究所年報

1996



奈良国立文化財研究所



藤原京 本隆院寺西塔（南東から）撮影 井上直夫



平城京 金堂（北東から）撮影 佐 駒雄

水落追跡第8次 調査区全景（西から） 撮影 井上直夫

水落追跡第8次 石組斜行溝と石敷帯（東から）

撮影 井上直夫

本願寺1995-1次調査区と
東塔・金堂基壇（南西から）
撮影 井上直夫

本願寺 西塔基壇（南から） 撮影 井上直夫



藤原宮第78次 東方官衙調査区（南から）撮影 井上直夫



藤原宮第79次 西方官衙調査区（南西から）撮影 井上直夫



藤原宮第80次 西方官衙調査区（東から）撮影 井上直夫



藤原宮第79次調査出土 祝符木簡
撮影 井上直夫



平城宮第251次 第二次朝堂院東第六堂（北西から）撮影 牛嶋 茂



平城宮第259次 造酒司南門と宮内道路（南から）
撮影 倪 幹雄



平城宮第265次 第二次朝金院南門と柱列（南から）
撮影 牛嶋 茂



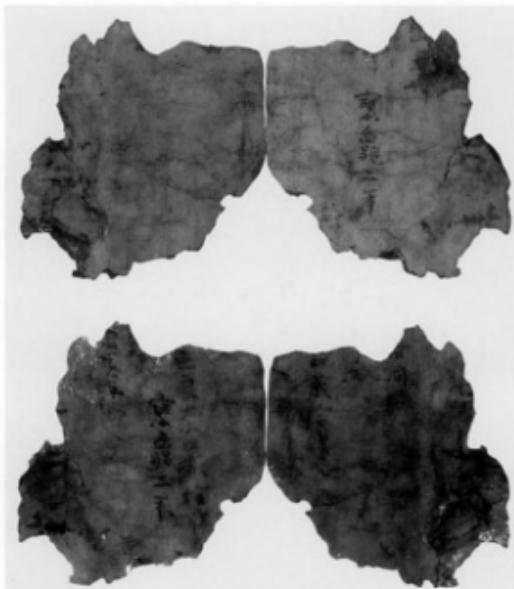
平城宮第265次 第二次朝堂院南門（南から）撮影 牛嶋 茂

平城京薬師寺伽藍と講堂跡査区（東から） 撮影 伝 紗羅

平城京第263号 薬師寺講堂（西から） 撮影 伝 紗羅

薬師寺 講堂基壇の断面（北から） 撮影 伝 紗羅

薬師寺 講堂基壇北辺の石敷通路（東から）
撮影 伝 紗羅



平城宮第58次調査出土 漆紙文書②の赤外写真
上段：表面 下段：漆付裏面（裏紙）



平城宮第259次調査出土 漆紙文書



薬師寺講堂須弥壇出土 江戸時代鉢壇具



本薬師寺西塔出土 金銅製龕木先金具

目 次

口絵	1 藤原京本薬師寺西塔	4 平城宮第二次朝堂院東第六堂
	平城京薬師寺講堂	平城宮造酒司南門と宮内道路
2	水落遺跡	平城宮第二次朝堂院南門
	水落遺跡石組斜行溝	5 平城京薬師寺伽藍
	本薬師寺西塔と東塔	平城京薬師寺講堂
	本薬師寺西塔基壇	薬師寺講堂基壇の版築
3	藤原宮東方官衙	講堂基壇北辺の石敷通路
	藤原宮西方官衙	6 平城宮出土漆紙文書
	藤原宮西方官衙	薬師寺講堂出土鎮具
	藤原宮出土呪符木簡	本薬師寺西塔出土垂木先金具

飛鳥地域の発掘調査	1
藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査	5
平城宮跡・平城京跡の発掘調査	12
山田寺創建軒平瓦の製作技法	24
藤原京六条大路の幅員について	26
本薬師寺出土建築部材	28
飛鳥藤原地域で出土した銅、青銅、金銅製品	30
1995年度平城宮跡・平城京跡出土木簡	32
平城宮跡・平城京跡出土漆紙文書	34
法隆寺所蔵金属製容器の調査(3)	36
櫛描流水紋土器の新例	38
興福寺文書の神鹿記事から	39
第一次大極殿復原基本設計	43
岡山市近世寺社建築調査(2)	44
古代建築における部材の面取について	46
中国黒龍江省における朝鮮族住居・集落の調査	48
滋賀県近世民家調査(1)	50
飛鳥資料館の特別展示	51
年輪年代学(13)	52
動物道存体の調査(12)	53
赤外分光分析(FT-IR法)による出土有機質遺物の同定	54
出土木材の劣化と収縮挙動	55
石材同定のための基礎資料の作成(2)	56
地中レーダーによる探査(2)	58
情報システムの整備	60
平城宮跡の整備	62
ロシア・バシリク古墳群出土遺物の保存科学共同研究	66
アンコール文化遺産保護共同研究	67
在外研修報告	68
イクロム国際建築修復コース	69
国際交流彙報	70
公開講演会	72
研究集会	73
調査研究彙報	76
奈良国立文化財研究所要綱	77

奈良国立文化財研究所年報 1996

発行日 1997年3月15日

編集・発行 奈良国立文化財研究所 担当 松村恵司・内田昭人

印刷 真陽社

表紙カット 平城宮朱雀門復原図

飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥地域調査一覧

1995年度に飛鳥地域では、次の8件の調査を実施した。それぞれの調査成果は下の一覧の概要欄に略記したが、このうち水落遺跡の調査（第8次）と奥山久米寺の調査（1995-1次）については項を改めて報告する。

調査次数	調査地区	面積	調査期間	概要
水落遺跡 第8次	5AME-Q	510m ²	95.7.3 ～10.16	(本文記載)
水落遺跡 1995-1次	5AMD-N,U 5AME-P	34m ²	96.3.18 ～3.27	飛鳥寺北限の溝、水落遺跡全体に及ぶ掘り込み地業の北端と南端、土坑などを検出。
飛鳥寺 1995-1次	5BAS-K	21m ²	95.7.7 ～7.13	飛鳥寺講堂の東北。土坑3基などを検出。飛鳥寺III型式の軒丸瓦など出土。
飛鳥寺 1995-2次	5BAS-P	10m ²	95.7.13 ～7.18	飛鳥寺講堂の北方。16世紀以前の東西溝を検出。飛鳥寺IIIおよびXIV型式の軒丸瓦など出土。
橘寺 1995-1次	5BTB-B	91m ²	96.1.9 ～2.14	川原寺南参道～橘寺北門間。7世紀後半の橘寺北限の堀と溝、奈良時代の橘寺参道側溝を検出。川原寺の縁軸水波文塗出土。
奥山久米寺 1995-1次	5BOQ-H,J,K	298m ²	95.9.11 ～11.10	(本文記載)
坂田寺 1995-1次	5BST-A,E,F	58m ²	95.11.27 ～12.15	(本文記載)
川原寺 1995-1次	5BKH-E,F	37m ²	96.3.4 ～3.14	西波廊の基壇南辺縁石、西金堂の約50m西で棟門と推定される礎石などを検出。前者は創建時、後者は鎌倉期か。

飛鳥地域調査一覧

水落遺跡の調査（第8次調査）

当調査部では水落遺跡の範囲と周辺の遺構、飛鳥寺西方に広がる遺跡の構造と水落遺跡との関係を解明すべく、1994年から3ヶ年の計画で史跡指定地東南部の調査を進めることになった。第8次調査は、その2年目で、前年度の第7次調査区の南側部分を対象に実施した。第7次調査では、水落遺跡の南限・東限に関する遺構は検出されず、遺跡の範囲は更に調査区外に広がること、調査区内は水路計に水を供給したと推測される大規模な石組斜行溝SD3410や木樋暗渠等の水路はあるが、漏刻台と関連する建物ではなく石敷広場になっていること、等を明らかにした。

遺構 検出した遺構は、7世紀と平安時代に大別できる。

7世紀の遺構 後世の搅乱部分を除き調査区のはば全面に石敷痕跡とみられる不整形な小さいくぼみが確認され、本来は全面が石敷であったと考えられる。SX3492などの石列はそのごとである。こうした石敷・石列のほかに石組溝（SD3490・3400・3560）、木樋暗渠SD3370、池状遺構SG3480などがある。

SD3490は調査区北辺を東南東から西北西に向って流れ、西で北に約5度偏する方位をもつ。南側に幅約0.8mの玉石の石敷帶SX3489を伴う。溝は9世紀に改修を受けている。第7次調査で検出したSD3400は、7世紀代では最も古い遺構であるが、後世の削平のため極めて残りが悪く、部分的に検出したにすぎない。調査区東南部で検出したSG3480は、自然石12個を弧状に配したもので、石列は南側に面をそろえる。この石列の南1.7mから始まる浅い掘り込みがあり、更に南へと広がり、両者一体で池と考えている。この池に接続する石組溝がSD3560である。



水落遺跡第7・8次調査遺構図

平安時代の遺構 素掘り溝(SD3360・3420など)、大小の土坑(SK3510・3520など)、掘立柱壙(SA3555)等がある。調査区中央東寄りにある小土坑SK3510は径0.5m程の円形の掘形で中に、次に述べるような状態で土器が一括投棄されていた。底に須恵器の甕腹片を敷き、その上に丹波窯産の須恵器の鉢を正位の状態で据え、中に土師器小皿8枚以上、杯3点、銅釜片、黒色土器A類の大小の椀各2点を納め、それらの上に石を2個置いていた。土師器の杯・皿・黒色土器の椀は、完形品であるが、須恵器の鉢はもともと体部の一部を欠損したものを使っている。出土土器類は、天禄四(973)年に焼亡した薬師寺西僧

房の床面に残されていた土器類（『薬師寺発掘調査報告』pp.149～155、pp.256～267）と共に通する。

遺物 土器・瓦・金属製品・錢貨・石製品等がある。北に隣接する石神遺跡では7世紀代の土器が大量に出土しているが、水落遺跡ではこの時期の土器は極めて小量である。遺跡の性格の違いを反映するのであろう。土器の大半は、再びこの地に開発の手が入った平安時代のものであり、9世紀後半代から10世紀後半代に属する。

小 結 今回の調査でも、水落遺跡の南及び東を画す施設は検出されず、遺跡は更に南と東に広がることが明らかになった。

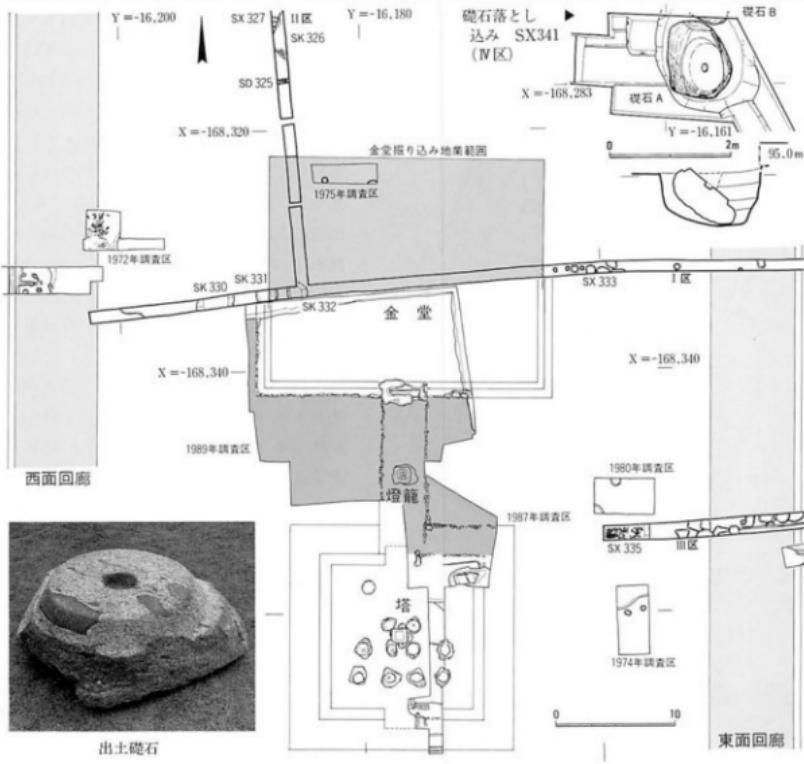
一方、新たに石組斜行溝SD3490、池状遺構SG3480、およびSG3480の余水を流したとみられる石組溝SD3560などを検出した。二条の溝は、水落遺跡中心区画よりも古い南北石組溝SD3400（石神遺跡A-3期併行期）を切って造られており、中心区画と同時期もしくはそれ以降の時期と考えられる。また第7次調査でも中心区画と同時期と考えた石組斜行溝SD3410・木樋暗渠SD3370を検出したが、今回の溝とは方位を異にし、調査区外で重複する位置関係にある。いずれも年代を決定できる遺物の出土が乏しく、これらの遺構の先後関係は今後の調査にゆだねる。また池状遺構SG3480も調査区の南へ広がっており、その範囲と性格付けについても次年度以降の調査を待つ。

奥山久米寺の調査（1995-1次）

この調査は、公共下水道本管理設にともなう事前調柶である。奥山久米寺（奥山庵寺）についてはこれまでの調査によって、7世紀前半に造営された四天王寺式伽藍配置の古代寺院であることが推測されている。今回の調査はI区からV区まで幅の狭いトレンチ調柶ではあるが、中心伽藍各所に及んだ。以下、主要なものに限って述べる。

I・II区 金堂跡にかかる調柶区である。I・II区の交点付近を中心として、金堂の掘り込み地業を検出し、地業の北・東・西の端を確認した。地業は、東西22.9m・南北19.1mに及ぶ。版築層は残りの良い所で厚さ70cm残っており、厚さ8cmほどの層を12層識別できた。しかし、基壇外堀や基壇周囲の化粧は全く残っていない。1989年の調柶によって、金堂基壇の東西幅を23.4m（80尺）、南北幅を約18m（60尺）と推定してきたが、今回の調柶によって、東西幅についてはそれがほぼ確実となつた。南北幅については、掘り込み地業の南北幅が19.1mと判明し、推定値より広くなる。そうすると、基壇の規模は、川原寺中金堂の東西約24m、南北19.2mとはほとんど同じに復元できよう。

V区 東面回廊北端推定地から講堂推定地の北側にかけての調柶区である。東面回廊と北面回廊推定地は近世以降の土坑や削平のため、その痕跡は見いだせなかつたが、講堂推定地に隣接して講堂所用



と見られる礎石を発見した。SX341は、講堂推定地の東北角に位置する礎石落とし込み穴である。東西1.7m・南北1.6m以上の南北に長い楕円形の穴で、検出面からの深さは約1mある。中に花崗岩製の礎石2個が落とし込まれていた。うち1点(礎石A)を取り上げた。礎石Aは、直径1.2m、厚さ0.5m、中心からやや外れたところに下径96cm・上径78cm・高さ12cmの円形柱座をつくる。柱座の中央には径20cm・深さ7cmの円孔がある。柱座の上面の直径60cmほどの範囲には敲打痕が残り、柱径に対応するのであろう。礎石BはAに比べてやや小型であるが、やはり柱座の中央に円孔がある。礎石Aは身専用、Bは庇用の可能性がある。

これまで、講堂の存在については地割り痕跡だけが推定の手かりだったが、礎石の発見はその存在を裏付け、IV区の南側に講堂を想定して四天王寺式伽藍配置とみることは、さらに妥当性を増したと言えよう。

坂田寺の調査(1995-1次)

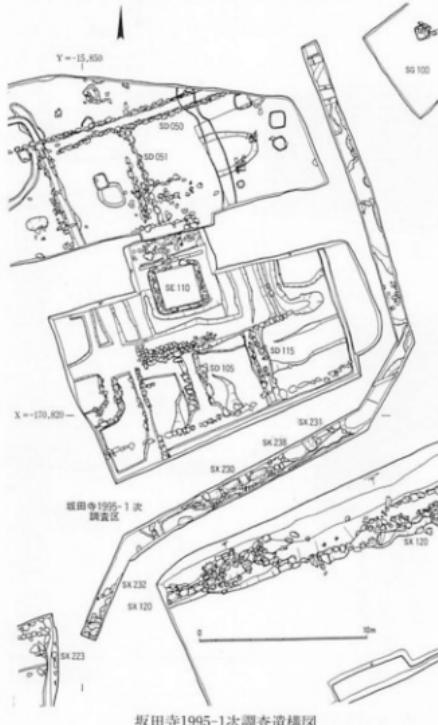
下水道敷設とともになう事前調柶で、かつて実施した第1・2次調柶区の中間にあたる。これまでの調柶によって、奈良時代の遺構として、西面する礎石建ちの仏堂とそれに取り付く東面回廊、南面回廊が確認され、回廊は一辺58mほどで方形に巡ると推定されている。今次調柶はその回廊で囲まれた一郭の北側にある。今回検出した遺構は、石垣SX120・230・231、石列SX232である。石垣SX120

は、第2次調柶南区で検出した西延長部で、人頭大から一抱えほどの花崗岩玉石を積み上げている。SX230・231はこれと平行する石垣で、長さ1m以上の花崗岩の巨石を並べている。石列SX232はSX120の北1.5mのところにあり、径50cmほどの花崗岩自然石を南側に面を揃えて並べている。SX120北側の石組溝側石の可能性がある。

遺物は大量の瓦のほか、土器、金属製品、凝灰岩切石片などが出土した。

文献史料によれば坂田寺は司馬達止の高市郡坂田原の草堂に由来し(『扶桑略記』欽明13年10月13日条)、創建は6世紀末と推定され、平安時代まで存続が確認できる。坂田寺は傾斜地に立地し、旧地形を平坦にして伽藍を造成している。今回検出した石垣SX120・230・231は、奈良時代の伽藍中心部北側の斜面に設けられたもので、整地土の土留めの役割ももっていたのであろう。SX230と231はともに裏込め土に瓦を含んでおり、南側に7世紀の瓦葺き建物の存在を予想させるが、しかし今のところ創建時に遡る坂田寺の遺構は未確認であり、今後の課題である。

(寺崎保広)



藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1 藤原宮跡の調査

はじめに 発掘調査の進展とともに藤原宮の官衙は、先行条坊大路を踏襲した宮内道路によって区画されていることが明らかになってきた。

これまで、内裏・大極殿・朝堂院の中央区画を標準にして、東西の官衙を漠然と東方官衙・西方官衙と称してきたが、前述した発掘調査成果を受けて、本年度より新たな官衙地区区分を実施することにした。

東西の官衙を各6区画、内裏北方の一区画を加え合計13地区に区分し、右図に示すような仮の名称を付してそれぞれの官衙地区を表示することにする。あくまでも、場所をより限定的に表示する仮の措置であり、官衙名が判明すれば都度名称を変更していくことになる。



藤原宮の地区区分図

内裏東方官衙地区・東方官衙北地区の調査（第78次調査・第78-7次調査）

これまでの調査の結果、この地区には掘立柱塀で区画された同規模の官衙が南北に少なくとも3ブロック配置されていたこと、そして官衙は宮期中に造替があり前後2時期に分れることが判明している。北から官衙A～Cと仮称しているが、第78次調査は官衙Bの全容解明を目的に東辺の未調査地を対象に実施した。第78-7次調査は第78次の北側を東西に横断する市道拡幅工事に伴う調査であり、両調査によって官衙Bの構造と変遷が明らかになった。弥生時代から藤原宮期の遺構を地表下0.4～0.5mの淡黄褐色微砂面で検出したが、ここでは7世紀から藤原宮期の遺構と明らかになった官衙Bの構造と変遷について述べることにする。

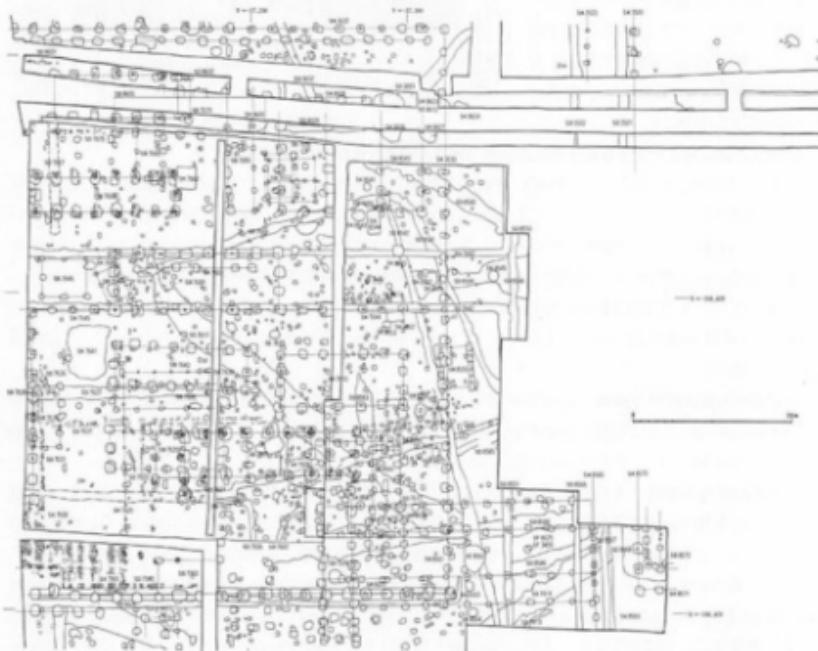
7世紀から宮直前期の遺構 北で若干西にふれる方位をもつ小規模な掘立柱建物SB8556・8560と導水路SD8568を伴う沼状遺構SX8569等がある。両建物は重複関係があり、更に細分可能である。SD8568とSX8569からは7世紀前半の土器が出土している。

藤原宮期直前の遺構 先行条坊が施行された時期から官造営時までの時期に当たる。検出した遺構には、先行条坊の四条条間路SF1731、同南北両側溝SD7642・7643、東一坊大路SF3499、同西側溝SD8550・8551、同東側溝SD8565、建物2棟SB7935・8561、塀SA8566、同塀雨落溝SD8567、井戸SE8562・8512、土壙等がある。東一坊大路は溝心々間距離で8.8m、四条条間路は路面幅は6m、溝心々間距離で6.9mを測る。条間路側溝は東一坊大路との交差点では、それぞれ大路西側溝SD8550・8551とL字状に連結する。SB7935は2×8間の南北棟で柱間は7尺等間である。SB8561は桁行13間・梁行2間の身舎に南北に庇をもつ桁行總長34.5mの長大な東西棟建物である。桁行は9尺等間、梁行は9.5

尺等間、庇の出は各12尺。規模が大きな割には柱掘形は小さく、柱筋も不揃いで、かつ先行条坊側溝の埋土を掘り込んでいることから、官衙区画建設に係わる仮設的な建物と考えられる。井戸SE8562は、楕円形の掘形で長軸径3.5m、短軸径2.8m、深さ1.9m。南半部の底面近くに折敷の側板と底板を板杭で固定した井戸枠を設け、北半部を玉石敷の水汲み場とする。飛鳥宮の土器とともに木製横樋や砥石が出土した。第78-7次調査検出の井戸SE8612は、官衙Bの東区画塀と重複し、それより古い。一部のみの検出にとどまるが、径5m程の掘形規模をもつ、隅に角柱を立て横板を落し込む形式の井戸で最下段のみ遺存した。

官衙B前半期の建物配置 新たに検出した建物は第78-7次調査区の塙SA8608のみである。四隅の区画塀の設定にあたっては、東一坊大路の心から西40尺を東辺とし、条坊地割基準値である900小尺の4分の1(225尺)を東西幅とし、南北幅は条間南側溝を基準に南北に各120小尺をふり分け240小尺としたことが明らかになった。

3×7間の東西棟の正殿SB7600は、区画の中央、南側柱列を南北2等分線に揃えて配され、南側柱列の東西に柱筋を揃えた東西塙SA7645・7644が取り付き、東西の区画塀まで延び官衙Bを北と南の2つの区画に分ける。北区画には正殿の西妻柱筋を揃え、北限塙SA3630の南30尺の位置に北側柱筋を置く2×7間の東西棟SB7670を配し、その東側にはSB7670の北側柱筋に柱筋を揃えた東西塙SA8608を配す。南区画には中央寄りに2×6間の東西棟SB7620を、東北には西妻柱筋を正殿の東妻柱筋に揃え、官衙Bを南北に2分する塙SA7644から20尺南の位置に北側柱筋を置く3×6間の東西棟



藤原宮第78・78-7次調査遺構図 1:650

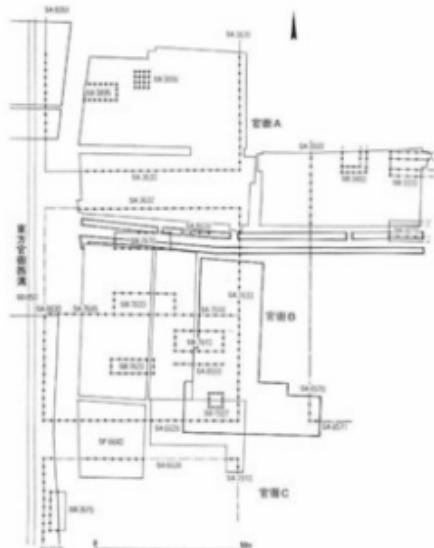
SB7610とその南に目隠堀SA8559を、南東隅部には3×3間の小規模な建物を配し、極めて企画性の高い建物配置をとる。

官衙B後半期の建物配置 四周の区画は前半期のそれを踏襲する。後世に削平を受けてほとんど遺存しないが、区画内に石敷を施し、異なった建物配置の官衙に改修する。中央部は空間地とし、西北部には2棟の東西棟SB8600・7660並列し、東北部には甫妻柱筋を互いに揃えた3棟の南北棟SB7655・7650・7640を並置する。西南部には梁間は不明であるが、桁行9間の南北棟SB7630を、南半中央には2×6間の身舎の東西に庇が付く東西棟SB7605を、南限塀の中央に取り付く1×3間の門SB7960を配す。主要な建物周囲には石組の雨落溝が伴う。

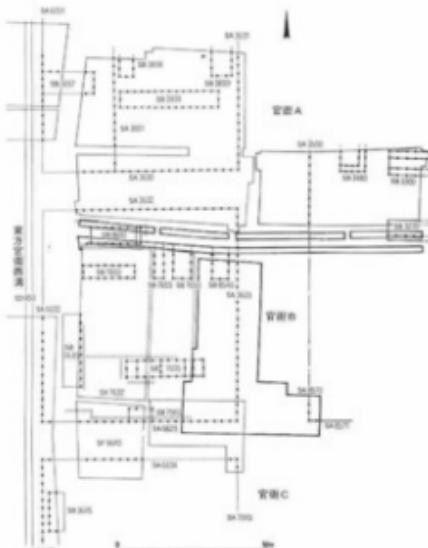
東方官衙北地区の遺構 発掘区東辺において東方官衙北地区の西限塀SA8570と南限塀SA8571を第78-7次調査では東西棟SB3270の身舎部分4間分を検出している。SA8571は官衙Bの南限塀と柱筋を揃え、SA8570は第38次調査検出の塀SA3500に連なり、官衙Bの東限塀との間が宮内道路となる。

遺物 宮直前期・宮期の遺構から土器を中心とする大量の遺物が出土した。特に東一坊大路西側溝から飛鳥IVに属する土器類の他、円面鏡・漆付着土器・灯明器・鍛冶関係遺物が出土していて、宮直前期のこの地区的性格を考える上で貴重な資料となる。その他、前半期の官衙B内に掘られた土塙SK-8545の埋土から2点の木簡が出土している。1点は、「丁酉年□月」と判読できる。丁酉年は文武元年、西暦697年にあたる。瓦類は少なく、軒丸瓦6281Aが4点、丸平瓦も少なく、総量や出土分布からみて瓦葺建物の存在する可能性は薄い。

西方官衙南地区の調査（第79・80次調査）両調査地は先行条坊区画で言えば、右京五条二坊東南坪の東南隅にあたる。これまでの調査で東南坪には、(1)先行条坊区画に規制された掘立柱塀で囲う大型区画（区画A）があり、宮造営時にはそれが廢され、五条二坊全体を敷地とし、長大な掘立柱建物四



藤原宮御前中の遺稿

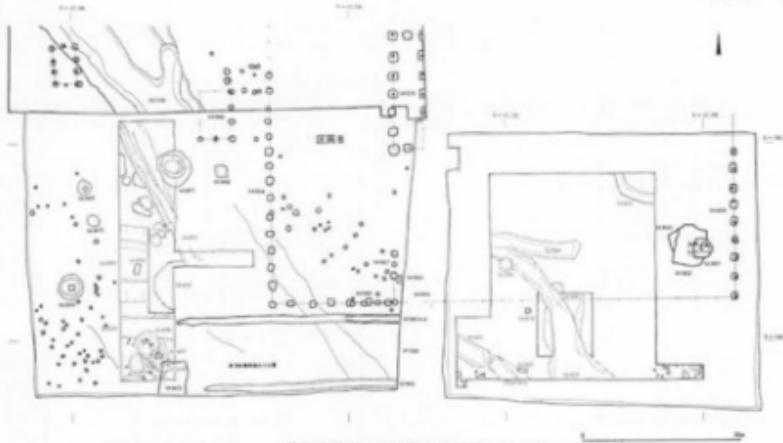


藤原宮跡後半の遺構

棟をコの字形に配す官衙が造営されること、(2)これらの下層には四分遺跡として名高い弥生時代の遺跡、古墳時代の流路などの存在することが判明している。

宮造営直前期の遺構 第79次調査区は後世の削平を大きく受け、遺構は床土下の弥生時代の包含層（黒灰色土）の面で、第80次調査では、床土下の古墳時代の包含層（淡灰褐色土・淡褐色砂質土）の面で検出した。宮直前期の遺構で注目されるのは、北側の区画Aに取り付く区画Bである。区画Bは、東を区画Aの東限塀に連なる南北塀SA8430（柱間約8尺）で、南を先行条坊五条大路の北側溝に沿う東西塀SA8466（柱間2.5m）で、西を南北塀SA8464（柱間2~2.5m）で限る。北の限りは、西限塀SA8464が区画Aの南限塀SA7000に取り付く東の部分を共有する。区画Bの規模は東西58.8m（200小尺）・南北60.5m（205尺）に復原できる。区画B内に検出した遺構は、第76次調査検出の南北棟SB8200（2×6間・桁行2.4m・梁間2m）と区画南東隅で井戸SE8431にすぎない。これは、削平によるもので本来これ以外にも建物が立っていたものと思われる。区画外の西では、西限塀SA8464に近接して2×3間の南北塀SB8460（柱間2m）・井戸SE8470・土壙SK8471等がある。区画内の井戸SE8431は、隅柱を打ち込み横板を挟み込む方式の井戸枠で、上面で一辺1.5m程の方形で深さ1.8m。井戸枠内の埋土から、飛鳥Nの土器とともに国内初見の「羅城丸星」の付耳を描いた呪符木簡が出土した（別項参照）。尚、SE8431とは同じ位置に2基の井戸SE8432・8433と重複し、造替が行われたことが知れる。区画外の井戸SE8470は、掘形は長軸径2.5m、短軸径2.2mの橢円形を呈し、一辺約75cmの蒸籠紐の井戸枠で3段分が遺存していた。井戸枠内からは完形土器3点、完形の軒丸瓦6278D1点他が出土した。井戸枠はヒノキであり、3cm程の刃材部が残存していたので年輪年代測定を行い、682年（天武11年）に伐採されたことが判明している。この他、先行条坊より新しい時期の遺構としては、南限塀SA8465と重複するL字形の塀SA8466・8467や曲物を埋めた土坑SK8413等があるが、確密な時期は不明である。先行条坊の北側溝SD8461は掘り直しが認められることから、宮期に五条大路SF6360の規模をそのまま踏襲した宮内道路が付設された可能性が高い。尚、五条大路路面からは小型海獸葡萄鏡（儀鏡）が1面出土している。また、下層遺構の調査では弥生中期の環濠・人骨が遺存する土壙墓2基、中期中葉から後期の木道SX8495を伴う井戸SE8496等を検出した。

（異 勤一郎）



幕原宮第79・80次調査遺構図 1:650

2 藤原京跡の調査

藤原京調査一覧

1995年度に藤原京では、次の8件の調査を実施した。それぞれの調査成果は下の一覧の概要欄に略記したが、本薬師寺の調査（1995-1次）及び第78-9次調査については項を改めて報告する。

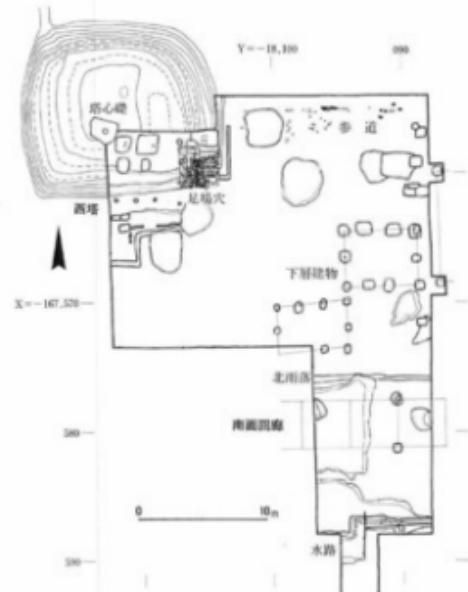
調査次数	調査地区	面積	調査期間	概要
78-2次	5AWH-Q	400m ²	95.5.8 ~6.20	右京七条一坊西南坪。第75-15次調査区の南。飛鳥川の氾濫により、藤原宮期の遺構は残らず。
78-3次	5BNG-F	15m ²	95.5.9 ~5.10	左京八条四坊西南坪。推定日向寺跡の東方。南北溝と穴を検出するが、年代などは不明。
78-6次	5AJQ-E	90m ²	95.10.17 ~10.24	右京二条二坊西北坪。7世紀後半の掘立柱列と中世の掘立柱建物などを検出。藤原京期の遺構は検出せず。
78-8次	5AMH-J	102m ²	95.12.18 ~96.1.11	雷丘北方第6次。掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条などを検出。7ないし8世紀だが、細かい時期は不明。
78-9次	5AJH-R,S	460m ²	96.1.8 ~2.9	(本文記載)
本薬師寺 1995-1次	5BMY-N	609m ²	96.2.1 ~6.6	(本文記載)
本薬師寺 1995-2次	5BMY-M	24m ²	96.2.13 ~2.15	寺城西辺で、藤原宮期の南北溝2条を検出。西三坊大路両側溝の可能性もあるが、心々間6.5mと狭く、今後に課題を残す。
本薬師寺 1995-3次	5BMY-H	211m ²	96.3.18 ~4.9	右京八条三坊、寺城南辺。創建時の整地層を一部確認。軒瓦など多量の瓦を含む箇所あり。

藤原京調査一覧

本薬師寺の調査（1995-1次）

1991年度以来継続して行っている計画調査で、今年度は、昨年度発掘区の西側で、西塔跡の土壇の東南四分の一を含む範囲について実施した。主な目的は、西塔と南面回廊の規模・構造を明らかにすることである。

遺構 西塔は心礎のみが残り、他の礎石は抜き取られている。心礎は一辺約2mの不整形で厚さ約94cm、上面は平坦に整え、中央に径40cm、高さ10cmの出はざを作る。心礎の南に抜き取り状の土坑があるが、石はほぼ原位置を保っている。他の礎石については、東南の四天柱と側柱の据え付け穴を確認した。柱間約2.4mである。基壇上の東辺および南辺に計7個の足場穴も検出した。基壇外装は花崗岩地覆石と凝灰岩羽目石からなる壇正積基壇で、その外に玉石敷の犬走り、玉石組の雨落溝がめぐる。階段は東面と南面で確認した。雨落溝の外には石敷が広



本薬師寺1995-1次調査遺構図 1:400

がるが、その縁辺は不明確である。東塔と西塔をむすぶ幅約3.4mの石敷参道が想定されたが、縁石と敷石の痕跡をわずかに残すのみである。

南面回廊では、基壇築成土の一部が残っており、2箇所で礎石位置を確認した。中門取り付きから2列目の柱位置にあたる。回廊北側の柱から約1.5m北で幅約50cmの雨落溝があり、側石と底石は抜き取られている。

遺物 多量の瓦のほか、土器、金属製品などが出土した。軒瓦は大半が創建時のもので、本屋根用のセットと、小型の裳階用のセットがある。瓦の特徴などから新田二時期のものがあり、東塔周辺と比べると新しい時期のものが多い。

小結 西塔の規模が明らかとなった。建物規模は、本薬師寺東塔や平城薬師寺西塔とはほぼ同じである。基壇周囲の大きさが若干異なっている。出土瓦からみて、西塔の造営は他の主要堂塔に比べて、時期が下る可能性があり、今後の検討課題となるであろう。

	基壇長	基壇高	雨落幅	大走幅	階段幅	階段出	石敷規模	参道幅
本薬師寺 西塔	約12.7	1.65	約0.6	約0.75	約3.8	1.7	不明	約3.4
〃 東塔	約14.2	1.45	約0.6	約0.6	約4.1	1.65	約21.8	約3.4
平城薬師寺西塔	13.65	1.4	約0.6	約0.6	約2.9	1.8	約20.8	-

塔の規模の比較（単位：m）

第78-9次調査

調査は、歩道及び宅地造成に伴う事前調査で、藤原宮南面西門の南、六条大路と西一坊大路の交差点付近にあたる。北と南に発掘区を設定して調査を実施した。

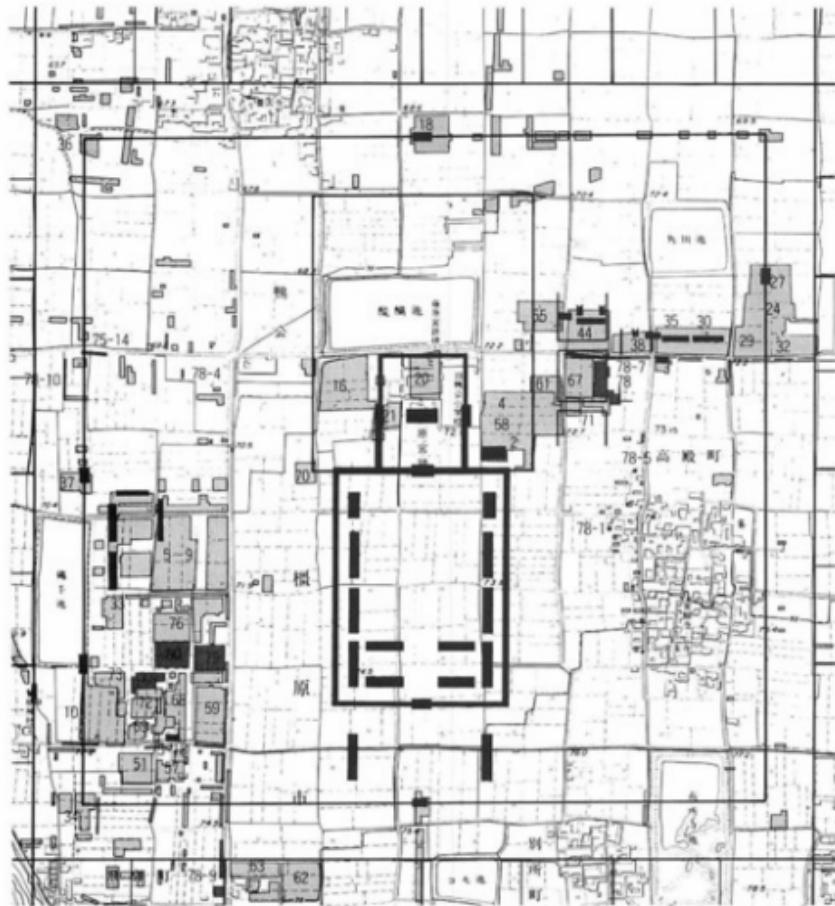


藤原宮期の道路と側溝を検出し、一部掘り下げたところでは弥生時代の土坑・小穴を多数検出した。ここでは藤原宮期の造構についてのみ言及・図示する。北区にある東西溝SD2915・2909がそれぞれ六条大路の北と南の側溝で、南北溝SD7758（北区）とSD8511（北・南区）が西一坊大路の西側溝にあたる。SD2915は幅0.9m、深さ0.3m、SD2909は幅1.0m、深さ0.2mで、この間が六条大路（SF2910）となる。大路の幅は南北側溝の心々間で16mとなる。SD7758は西脇のみの検出で幅は未確認、深さは0.3m。SD8511は幅1.2-1.5m、深さ0.2mである。六条大路の側溝とは、ともにL字形に接続する。南区で期待された右京七条二坊の宅地に関わる造構は確認できなかった。

今回の調査によって、二条の道路の交差点の様相が判明したが、注目すべきは六条大路の幅である。従来は、幅21mとする見解が有力であり、西側で以前に実施された第29-7次調査ではSD2916を六条大路北側溝と推定していたが、その後のSD2915が北側溝となり、ここでは大路の幅が16mであったことが確定となった。宮の南面にあたる部分だけが狭く作られたのか、六条大路全体に及ぶのかが次の課題となる。この点の詳細は本年報の「藤原宮六条大路の幅員について」で評論する。

（寺崎保広）

藤原宮第78-9次調査造構図 1:800



藤原宮およびその周辺の調査位置図 1:7000

調査次数	調査地区	面積	調査期間	概要
78	5AJF-C,D	1668m ²	95.3.22~7.19	内裏東官衙地区・東方官衙北地区における計画調査（記載）。
78-1	5AJG-A	25m ²	95.4.23~4.29	東方官衙南地区・納屋改修に伴う調査で曲面東門と北面東門を結ぶ宮内道路面下に7世紀中頃から藤原宮直前まで4層にわたる柱穴群を検出。
78-4	5AJF-R	21m ²	95.6.26~6.28	西方官衙北地区・住宅建設に伴う調査。先行条坊四条条間路の想定位箇にあたるが、後世の削平で遺構は検出されなかった。
78-5	5AJF-E	16m ²	95.8.8~8.29	東方官衙南地区・農業用倉庫建設に伴う調査。宮直前期・宮期の遺構は検出されず、因金大路の路面に当ると考えられる。
78-7	5AJF-C,B	400m ²	95.11.13~12.15	市道拡幅工事に伴う調査。内裏東官衙地区・東方官衙地区（記載）。
78-10	5AJK-C,D		96.3.27~3.28	本路改修に伴う宮西南大臣周辺の調査。先行条坊（四条条間路・南北両側溝を平面復元）。
79	5AJG-S	1329m ²	95.6.26~10.12	保育所建設に伴う西方官衙地区的調査（記載）。
80	5AJG-S,R	1789m ²	95.10.16~96.2.5	宅地造成に伴う西方官衙南地区的調査（記載）。

藤原宮調査一覧

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

1995年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査は、平城宮跡6件、平城京跡11件、京内寺院・その他6件である。以下に主要な調査の概要を報告する。

1 平城宮跡の調査

造酒司地区の調査（第250・259次）

駐車場造成に伴う事前調査。調査区は、第241次調査区の南、第154次調査区の東にあたり、造酒司の南西部、その南方の宮内道路・道路側溝等が存在すると推定されていた。調査はこれらの様相の解明を目的として行った。調査の結果、掘立柱建物15棟、門2棟、築地塀2条、掘立柱塀9条、溝14条、足場穴列1条、道路1条、土坑2基、小穴多数を検出した。

造酒司 道構の配置、切り合い関係、整地土から道構の次のような変遷を識別できる。

A期（奈良時代前半） I期・II期に細分される。A I期：南・西を築地塀SA16702・15814で区画、南面築地には棟門SB16700を開いて南門とする。敷地西部に井戸からの排水路SD3035を設け、木樋による暗渠で敷地外へ排水する。棟門の北西に大型東西棟建物SB16726を置き、その南に雑舎群SB16712・16714・16717・16723・16716を配する。A II期：門・築地塀・主要建物に変化はない。敷地北部での井戸の増設に伴い、排水路SD15818を新設する。敷地南部の雑舎群は、南北棟SB16713・16718・16722に建て替える。

B期（奈良時代後半） 南門を礎石建ちの八脚門SB16701に変える。この際、前身のSB16700よりも心

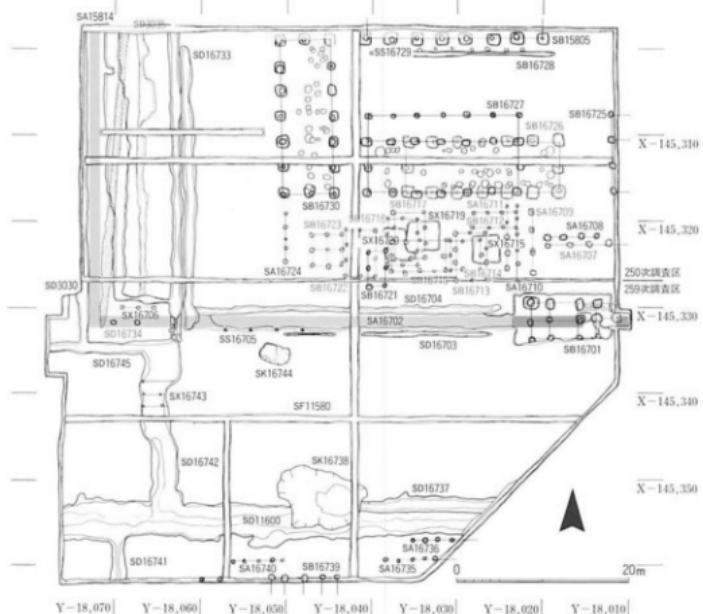


1995年度 平城宮発掘調査位置図 1:10000

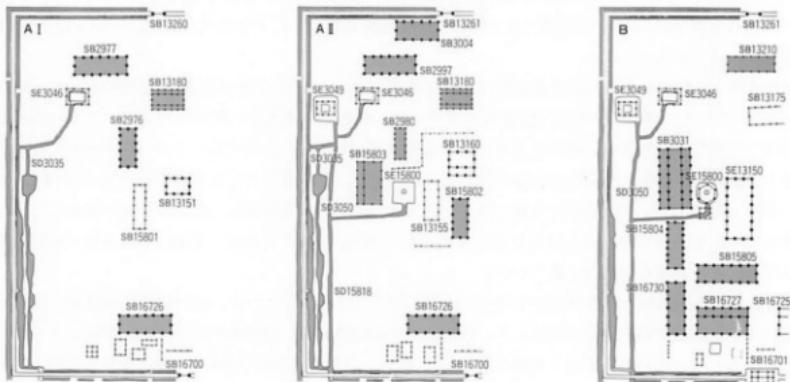
をやや西にずらす。大型建物を南北棟SB16730、東西棟SB15805、北庭付東西棟SB16727に増・改築する。雑舎群があった敷地南部には、種類の保存施設と想定される竪穴状施設SX16715・16720、南北棟SB16721が設けられる。

宮内道路・東院北方地区 造酒司の南には、法華寺方面から東西に伸びる道幅約15mの宮内道路SF11580がはしる。道路南側溝SD11600は残幅5mで、造酒司の雨落溝・排水路からの水をSF11580を横断して流す溝SD16742、東院北方地区からの排水路SD16741が合流する。このうちのSD16742には橋SX16743がかかる。SD11600の南の東院北方地区では、主な遺構として東西両庭付南北棟SB10739の北庭を検出した。SD11600からは、木簡・削り屑2812点、木器233点、土器類多数が出土した。延暦年間の紀年木簡や平城宮土器Vなど奈良時代末の遺物が多数を占める。木簡には春宮坊・皇后宮職に関連する一群のものが含まれていた。

まとめ 今回の調査で造酒司西半を完掘したことになった。これにより、造酒司の南北長は、北門・南門の心々距離で約125m(420尺)と、西に隣接する塙積官衙と同規模になることが判明した。また、西面築地と南門の心々距離は、A期：約59m(200尺)、B期：約55m(185尺)、西面築地と北門の心々距離は約51m(170尺)であり、南北いずれかの門が敷地の中軸線に乗ると仮定すると、その東西長も約100mを超える規模であったと推定できることになった。明らかになった造酒司西半の遺構についてみると、全体として建物の増加と建物規模の拡大という変遷傾向がみられる。建物の多くは酒甕の据え付け穴を持っており、この傾向は造酒司における生産体制の整備・拡大を反映していると考えられる。南門が棟門から八脚門に格上げして建て替えられるのもこの傾向と連動するものだろう。さらに、他の官衙のような正殿を中心とする整然とした建物配置をみせず、空閑地が多い点も特徴的で



平城宮第250・259次調査遺構平面図 1:600



造酒司遺構変遷図 線目は酒窯を作う建物

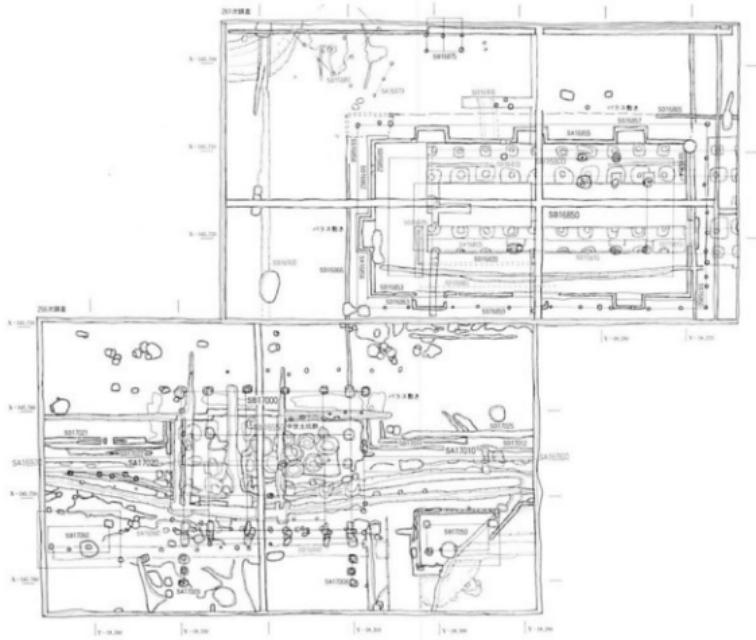
ある。造酒司がもつ酒の製造・管理機能やそれに必要な作業場の確保といったことと関連すると考えられる。

このほか、宮内道路南側溝から出土した木簡群には、奈良時代末頃の春宮坊・皇后宮職関連の木簡がまとまって含まれており、近辺にこうした機関が存在していた可能性を示している。

東区朝堂院の調査（第261・265次調査）

今回の一連の調査は、東第六堂（第261次調査）と南門および朝堂院南限施設（第265次）の様相を解明するとともに、過去の調査結果からの想定を確認することにあった。第261次調査では、奈良時代の遺構として、奈良時代前半・後半の第六堂各1棟、地覆石据付溝・抜取溝・足場穴5条、地割り溝1条、掘立柱建物1棟、礫敷の舗装3ヶ所、暗渠2条、土坑数基、古墳時代の遺構として、掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条、溝4条、土坑3基、円墳周溝1条がそれぞれ検出された。第265次調査では、奈良時代の遺構として、奈良時代前半・後半の朝堂院南門各1棟・朝堂南限施設としての塀各2条・雨落溝6条、基壇建物1棟、掘立柱塀1条、立柱列2条、溝1条を検出したほか、古墳時代の溝1条、中・近世の土坑群も発掘した。

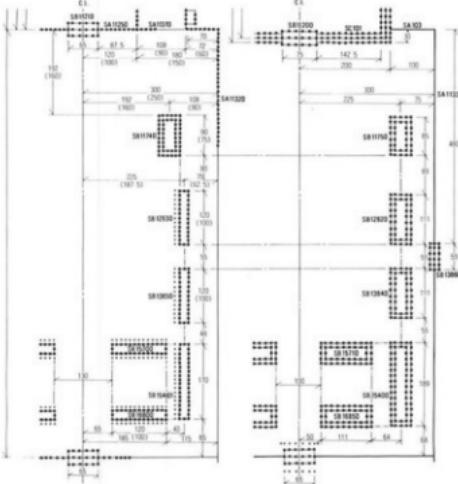
第六堂 遺構の切り合い、上下2層の整地土層で識別される奈良時代前半・後半の遺構変遷がある。奈良時代前半 東第六堂下層建物SB16800は、桁行12間、梁間4間の南北庇付掘立柱東西棟建物。柱間は桁行・梁間ともに10尺等間で、全長は桁行120尺、梁間40尺となる。この規模・構造は、東第五堂下層建物SB15700と等しい。身舎には最大残高20cmの基壇があるが、底部には無く、南底部では礫敷きの舗装SX16805がみられる。配置は、東西の妻をSB15700の東西の妻に、南内側柱を東第四堂の下層建物SB15041の南妻柱にそれぞれ揃える。SB15700との間隔は110尺、SB15041とは20尺である。柱穴の断ち割り調査で、身舎部の柱穴が庇の柱穴より古いことが判明した。また、庇にともなう雨落溝SD16825に身舎周縁をめぐる溝SD16810・16815が切られるが、この2条の溝はその位置から身舎にともなう雨落溝と考えられる。これらから、東第二堂～第六堂にみられる庇の付加は建設時の工程差でなく、当初身舎だけであった建物に庇を増設したという時期差であることが確定した。さらに、平城宮土器Iの須恵器が柱穴掘形・下層整地土から、藤原宮式軒平瓦6561Aが下層整地土から出土し、下層朝堂の建設時期が平城宮遷都時まで遡ることが明確になった。



平城宮第261・265次調査構造平面図 1:600

このほかの主な遺構としては、調査区西部で検出した第二次朝堂院の南北中軸線上に乗る南北溝SD16900がある。これはその位置と人工的に埋められた状況、土層観察の結果から、平城宮造営時の朝堂院建設に用いられた計画線を示す地割り溝と考えられる。

奈良時代後半 東第六堂上層建物SB16850は東西37.1m、南北17.1mの基壇をもつ、桁行9間、梁間4間の四面庇付き礎石建東西棟建物。柱間は身舎が桁行・梁間ともに13尺等間、底部部分が10尺、全長は桁行111尺、梁間46尺となる。配置では、第五堂SB15719との関係は下層と同じだが^d、第四堂SB15400の南妻に南側柱を揃えるようになる。SB16850は保存状態が悪く、以上の推定は、わずかに残された



第2次朝堂院地域の建物配置図（左：下層、右：上層）

柱穴や基壇の地覆石の抜取溝SD16851～16854および据付溝SD16861～16864や第五堂上層建物SB15710との比較による。また、SB15710と同様、南・北面に3ヶ所、東・西面に1ヶ所づつ5尺の出の階段が付くが、東・西面のものはSB15710とは異なり、梁間4間のうち南から2間目に付いている。基壇周辺での出土軒瓦の組合せは、6225C-6663Cを主体とする。このほか、基壇周辺で砾・小砂利による舗装SX16855・16856、足場穴S S 16857～16860などを検出。

南門・南限区画施設 道構の切り合い、3層の整地土層で識別される次のような道構変遷がある。

奈良時代前半 下層南門SB16950の東西に朝堂院南限を画する掘立柱東西塀SA16960・16970が取り付く。この東区朝堂院の南限は中央区朝堂院南限と揃い、東区朝堂院の南北長は960小尺（800大尺）と確定した。SB16950は桁行5間、梁間2間の掘立柱東西棟総柱建物。高さ約70cmの基壇をもつ。柱間は桁行が両端の間10尺、中央3間15尺、梁間が10尺等間である。SA16960・16970は掘立柱を立てた後、高さ約50cm、北半で出が約1mの基壇を造成したものである。柱間はSB16950の妻柱からSA16970が西へ11.5尺・11.5尺・15尺・10尺、SA16960が東へ39尺（12尺・12尺・15尺？）・9.5尺・9.5尺・9.5尺と不揃いであるが、東西の柱間15尺の部分には脇門が開いていた可能性がある。塀心から北へ1.5mの位置には北雨落溝SD16965・16975の溝心がくる。SD16965・16975は幅約80cm。南門の南側柱の南15尺の位置には、南門南面の閉塞施設と考えられる柱間10尺等間の東西塀SA16980がある。このほか、朝堂院北端には平城宮造営当初の整地直後に開墾され、短期間に埋め戻された東西溝SD16940がはしる。

奈良時代後半 基本的な道構配置は前段階と同じで、上層南門SB17000に築地塀SA17010・17020が取り付く。SB17000は桁行5間、梁間2間の礎石建身舎の南北に土庇が付いた建物。東西22.3m、南北10.7mで南北6尺・東西5尺の出をもつ凝灰岩壇正積基壇上に建つ。北庇は17尺の軒の出で東西両端に庇の隅の軒先の垂れ下がりを防ぐ支柱が付く。北庇の建設と同時に施工されたバラス舗装がSA17020の北雨落溝SD17021を覆うことから、北庇はSB17000建設当初には無く、後に付加されたものであることがわかる。南庇は軒の出を14尺から17尺へと改装される。SA17010・17020は築地基底幅6尺である。築地塀北雨落溝は当初、溝心が築地基底北端から約6尺の位置にあるSD17011・17021であったが、南門に北庇が付く時期に、これより約1m南のSD17012・17022に替えられる。南門や塀付近で出土した軒瓦は6311A・B-6664D・Fの組合せのものが主体を占める。南門南土庇の南には門の両妻の真南の位置に、儀式用の旗竿を立てた穴と考えられる柱間5尺の東西柱穴列SA17008・17009が対称している。さらに、南の朝集院内には、南門の東西両脇の20尺離れた位置に基壇北端の線を南門基壇のそれにそろえる基壇建物SB17050・17060が建てられている。SB17050・17060は同規模で、保存状態のよいSB17050では凝灰岩の地覆石をもつ東西約9.6m、南北約6.6mの基壇に掘立柱・礎石併用の桁行3間程度、梁間1間で柱間が桁行8尺、梁間10尺の東西棟建物が建ち、屋根には6225A・C-6721の組合せの軒瓦が葺かれていたと想定できる。

まとめ 本年度の調査で、東区朝堂院の東半の主要建物の調査がほぼ終了した。過去の調査結果に今回の結果を加えて復元した東区大極殿院・朝堂院の建物配置を図に示す。細部では第六堂・南門の構造や変遷を詳細に把握するにいたった。特に、第六堂下層建物については、平城宮の建物に関して重要な一例を提供したばかりでなく、議論があった朝堂院下層建物の構造や庇の増設時期をめぐる問題を解決することができた。また、第261次調査で検出した朝堂院建設時の地割り溝や第265次調査で検出した奈良時代後半の朝堂院南門南面の左右に建てられた基壇建物など新たな知見を得た。その一方、上層の建物では、朝堂とその周囲の区画施設とでは葺かれていた瓦が違うことが再確認された。これにより、上層の朝堂と区画施設間で建設時期が異なる可能性も出てきており、新たな検討が必要となった。

（加藤真二）

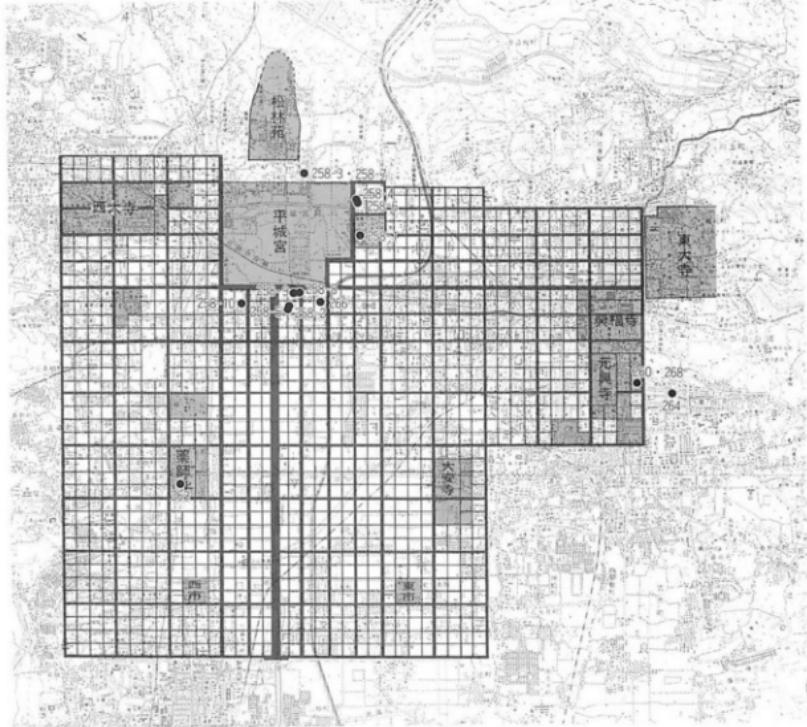
2 平城京跡の調査

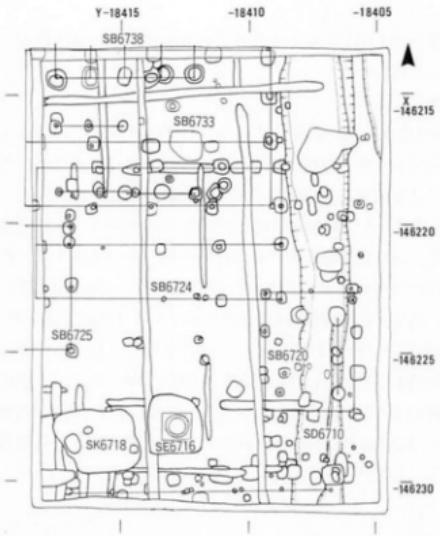
平城京跡では、左京城の一条二坊十坪、三条一坊七坪・八坪・十五坪、右京城の三条一坊十坪などで発掘調査を行った。このうち主な調査について報告する。

左京三条一坊七坪の調査（第258-2・258-5次）

左京三条一坊七坪は、先に第231次調査で坪中央部を広く調査しており、奈良時代後半に坪全体を一区画としたことが知られる。遺構・遺物の状況から宮外官衙が想定され、京内での位置や史料との対比により大学寮が推測されている坪である。（『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993）。

第258-2次調査 駐車場造成に伴う事前発掘調査である。調査区は坪のはば中央部西寄りで、現地表下約30cmで遺構を検出した。主な遺構は溝1条、掘立柱建物4棟、礎石建物1棟、塙状遺構4条、井戸1基などである。南北溝SD6710は調査区北端で幅約2.5m、南端で約2m、深さ5~20cmで北ほど深く、古墳時代・奈良時代前半の土器を含む。掘立柱南北棟建物SB6720は桁行3間（柱間寸法5尺）、梁行2間（6尺）である。掘立柱東西棟建物SB6724は桁行4間（8尺）、梁行2間（5尺）の身舎に南廂がつく（廂の出7尺）。掘立柱東西棟建物SB6733も桁行4間（8尺）、梁行2間（6尺）で南廂がつく（廂の出8尺）。掘立柱建物SB6725は調査区西端で南北2間（8尺）を検出、西へ伸びる建物であろう。調査区北端で東西4間分を検出した東西棟SB6738は柱の抜取が大きく浅いことから礎石である。





平城京第258-2次調査遺構平面図 1:200



平城京第258-5次調査遺構平面図 1:200

脚など一部を欠くがほぼ完形である。土坑からの出土は稀で、土馬祭祀のあり方に貴重な例を加えた。
左京三条一坊十五坪の調査（第266次）

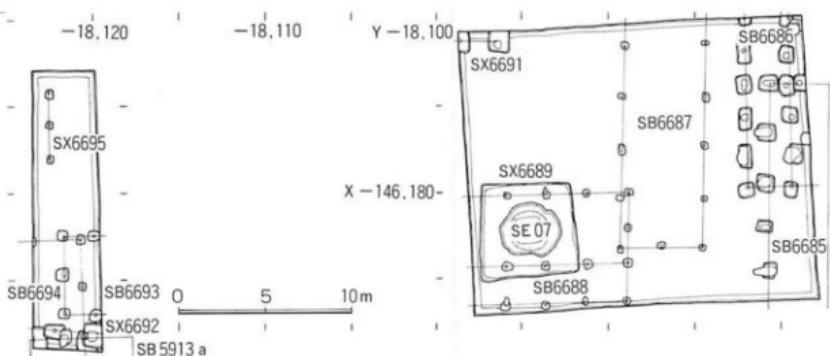
ホテル建設に伴う事前調査で、調査区は十五坪の東北部にある。この坪では既に数次の発掘調査があり、奈良時代を通じて十五・十六坪は一体として利用され、公的施設の可能性が指摘されている。

盛土・水田耕土・床土・遺物包含層を除去した面で奈良時代の遺構を検出した。主な遺構は古墳時代の竪穴住居1棟、奈良時代の掘立柱建物6棟、井戸1基などである。竪穴住居は一辺5.2~5.9mの

の抜取と判断した。礎石据付掘形は径70cm程度、柱間は4.5尺と小さく倉庫と考えられる。これらの建物は平面規模・柱穴とも小さく、第231次調査の知見と共に通する。

第258-5次調査 ガソリンスタンド建設に伴う事前発掘調査 調査区は坪の西南隅に近い。水田耕土・床土の下は自然堆積層で、その上面で遺構を検出した。主な遺構は掘立柱建物6棟、掘立柱塀9条などである。

調査区の北端で南妻を検出した掘立柱南北棟建物SB6755は梁行2間（8尺）で、坪の中心とは反対の側に西廂（出10尺）がつくことが注目される。SB6756は東西4間分の柱穴を確認、これを南側柱とする東西棟建物であろう。調査区東端の東西棟建物SB6757は西妻から1間分を検出（桁行・梁行とも8尺）。SB6758は調査区南西部の南北棟建物で桁行3間（7尺）、梁行2間（7尺）である。SB6759は調査区東南隅の南北棟建物で梁行2間（7尺）、桁行1間分（7尺）を検出。調査区東北部の南北棟建物SB6760は桁行2間（6尺）、梁行1間分（6尺）で、北妻に東西塀SA6761が取り付く。またL字形に接続する東西・南北塀が4組ある。SA6762~SA6763, SA6764~SA6765, SA6766~SA6767, SA6768~SA6769~SA6770である。小規模な目隠し塀だが狭い範囲で作り替えている。大規模建物が少なく、建物密度が低いとされる坪であるが、この部分では比較的大型の建物を含めて、建物がかなり密に存在している。坪の西南隅に近いことと合わせて、坪内の利用形態を検討する必要があるだろう。土坑SK6771出土の土馬2点は、ほぼ同形同大で、



平城京第266次調査構造平面図 1:300

方形で、床面深さ20~30cmのSX6689aと床を15cm上げたSX6689bの2時期があるが、中央を奈良時代の井戸SE6690で破壊されている。

十五坪の中心建物群のうち東脇殿SB5913は、桁行8間(10尺)で北妻が正殿SB5915の北廂に揃うことが確認された。SB5913の北に同時期の大型建物ではなく、正殿SB5915・南殿SB5914、脇殿SB5913・5917を口字形に配し、北に北殿SB5916を独立させる配置であったことがわかる。これら中心建物群は基本的な配置は変えず掘立柱から礎石建へ造り替えたことが判明しているが、本調査ではSB5913の礎石建への造り替えは確認できなかった。

坪の東半部は中心部と様相が異なる。東区東端の掘立柱南北棟建物SB6685は桁行5間以上(柱間寸法9尺)、梁行2間以上(6尺)で北4間分を検出した。これより古い南北棟建物SB6686は桁行5間以上(6.5尺)、梁行2間以上(8.5尺)で総柱または西廂付建物である。また井戸SE6690は抜取痕跡から平城宮土器IIと和銅4年の年紀木簡が出土しており、奈良時代初期に設けられ間もなく廃絶したことがわかる。このほか柱掘形の小さな建物がいくつかある。東区中央の南北棟建物SB6687は桁行5間以上(10尺)、梁行2間(8尺)で柱間の割に柱掘形が小さい。東区南西部の東西棟建物SB6688は桁行4間以上(8尺)、梁行2間(7尺)で南廂(出7.5尺)がつく。西区南半部のSB6693はおそらく東西棟で西1間分を検出したが、桁行3間以上(6尺)、梁行2間(7.5尺)と推定する。南側柱はSB6688の南廂と、棟通りは同南側柱と柱筋を揃え、同時期の可能性がある。西区南西部のSB6694はおそらく南北棟で桁行3間以上(9.5尺)、梁行2間(9.5尺)と推定される。

このように坪の東半部では建物は中小規模で、配置も整齊でなく、位置や規模を変えての建て替えが認められた。大型の井戸も検出されており、厨など付属施設群が想定される。中心建物群を東1坊大路に面した坪の東半でなく小路側の西半に置くことは、敷地内の利用形態を考える上で興味深い。



平城京第266次調査位置図 1:2000

3 京内寺院等の調査

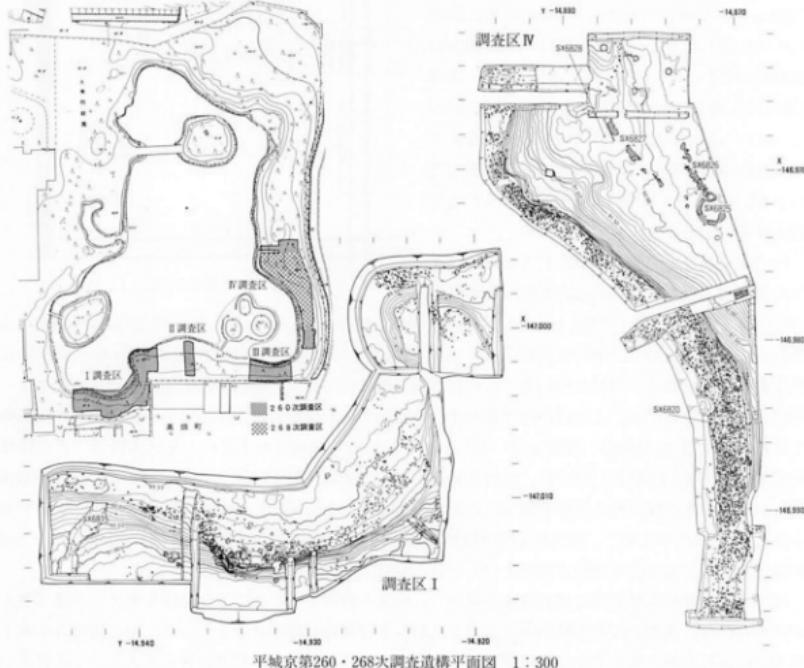
大乗院庭園の調査（第260・268次）

大乗院庭園の史跡整備のための調査である。園池南岸西端から東岸中央まで4調査区を設けた。

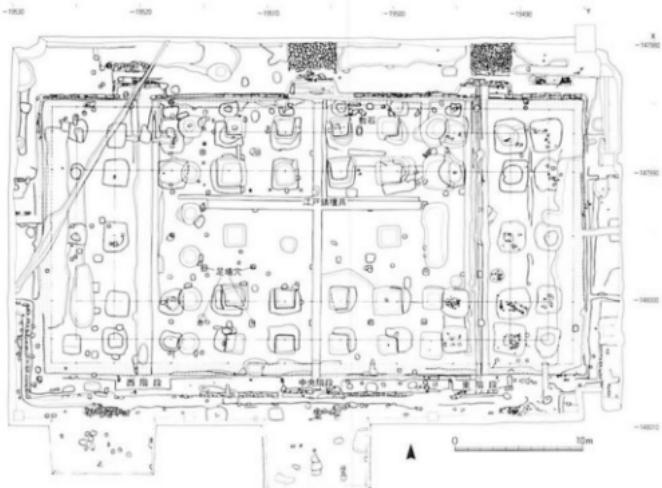
調査区Ⅰ 南岸西端のⅠ区では中世と近世の2時期の池岸を確認した。中世の池岸SG6805は陸部が急勾配で落ち込む。汀線付近は近世の池岸に擾乱されるが、礫を用いた仕上げであった可能性が大きい。近世の池岸SG6810は、中世の陸部上に造成された陸部が急に落ち込み池岸となるが、汀線付近で勾配を緩くする。南端の入江では裏込石を伴う護岸石積みSX6811も確認された。Ⅰ区東端の出島について森蘿は室町時代の南中島に由来するとみていたが（『中世庭園文化史』）、近世遺物を含むSG6810の堆積土に造成されたことが確認された。

調査区Ⅱ・Ⅲ 南岸中央のⅡ区は全域がSG6805とSG6810の池底である。南岸東のⅢ区には5~10cmの大石を貼付けた斜面があるがSG6810の堆積土上で、近代の施工と考えられる。

調査区Ⅳ 池東岸南半のⅣ区では中世の池SG6805に伴うと推定される洲浜石敷SX6820がある。汀線から池底へ向かって緩やかに幅2mほどを検出した。石は形も大きさも不揃いである。断面観察によると当初は、さらに陸部側へ広がっていたらしい。園池の成立年代は不確定だが、洲浜石敷上面から10世紀末~11世紀前半の土器が出土しており、大乗院以前の彈定院の時期に遡るのかもしれない。池から東に登った陸部では叩き漆喰の園路遺構が検出された。SX6825は外径約2mのドーナツ形。これから北北西に伸びる約3m、幅50cmの帯状のSX6826。その西に断続するSX6827である。SX6827西側にガス灯の基礎があり、近代の園路と考えられるが、園路の成立は近世に遡る可能性もある。



平城京第260・268次調査遺構平面図 1:300



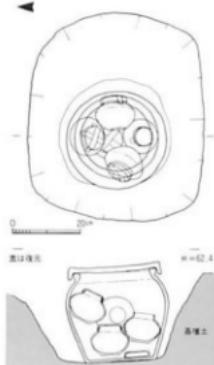
平城京第263次調査遺構平面図 1:400

薬師寺講堂の調査（第263次）

薬師寺の伽藍復興に伴う講堂再建予定地の事前調査である。薬師寺講堂については江戸末再建の講堂を避けて、北面廻廊・講堂東端部（第218次）、北面廻廊・講堂西端部（第233次）の発掘を実施しているが、再建講堂が解体された後、既発掘区を含め創建講堂の全域について発掘調査を行った。

創建講堂 講堂周辺の地山は灰白色・淡灰茶色砂質土で、講堂北辺から東辺には奈良時代以前の流路埋土がある。この上に厚20~30cmの整地を行い、基壇を版築する。版築は約30層、高さ1.2mに及ぶが、1.0mに達した段階で礎石を据え付け、さらに版築する。基壇上面近くに厚さ約2cmのベンガラ層と凝灰岩粉層があり、版築の途中で何らかの祭祀が行われた可能性がある。基壇外装は東石なしの塙正積で、凝灰岩製の地覆石と羽目石の一部が残る。地覆石は上面幅30cm前後、長さ55~110cm、厚さ25cm前後である。上面に深さ1cmほどの欠き込みを設け羽目石との仕口とする。地覆石下には平瓦2~3枚を厚さ約10cmに敷くが、中に本薬師寺所用の軒平瓦6641Hが含まれる。地覆石に改装の痕跡はない。基壇規模は東西43.3m、南北22.2mで、薬師寺の想定造営尺（1尺=29.6cm）では東西146尺、南北75尺となる。また基壇上面の北端中央に残る凝灰岩は当初の敷石と考えられる。基壇高は敷石上端と地覆石下端で約1.0mである。基壇は版築の後に長方形に整形し、南北各3か所の階段下を含めて全周に地覆石を据える。特に南面東階段では磨滅のない基壇地覆石を確認した。北面には凝灰岩製の階段地覆が残り、北面中央では耳石も検出した。

当初礎石の据付穴および抜取穴は49か所で検出した。礎石位置が再建講堂と重複し、原位置に残る礎石はない。課題とされていた姿階の存在は北面6か所の礎石跡で裏付けられた。身舎と廂の礎石据付掘形は一辺



江戸鎮壇具出土状況 1:15

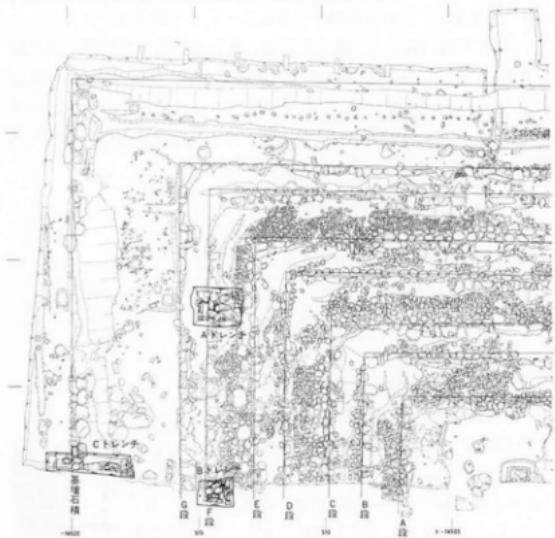
2.5m前後の隅丸方形で、版築の途中から深さ55cmを掘込む。蓑階の礎石据付掘形は直径1.3cmの円形で、基壇上面から掘込み、深さは65cmある。礎石抜取穴の埋土は再建講堂基壇土と同じで、江戸末まで原位置をとどめていたと推定される。

創建講堂の平面は四面廂に蓑階がつく形である。身舎は桁行7間（柱間寸法15尺）、梁行2間（17尺）、廂の出10尺である。蓑階の出は6.25尺と想定されていたが6.5尺とみるべきで、建物総長は桁行138尺、梁行67尺、基壇の出は4尺となる。基壇周囲には玉石組雨落溝がめぐるが、北側階段の地覆石より上層で、時期が下ると考えられる。また北面階段から北へ延びる石敷通路が検出されたが、玉石組雨落溝と同時期であろう。

江戸末期再建講堂 再建講堂は創建以来の礎石を抜き取り、当初基壇の東、西辺を削平し、基壇上には厚さ10cmほど土を積み足す。礎石は創建講堂など複数の建物の礎石を再加工して用いている。礎石据付掘形は一辺約1.8mの方形、深さ約60cmであるが、西側柱のみ円形で直径1.8m、深さ1.1mと深い。中央北寄りには薬師三尊を安置する須弥壇を築く。須弥壇下には鎮壇具が埋納する。鎮壇具は高さ26.5cmの甕中に高さ9cmの小壺5個を中心と東西南北に配す。すべて赤膚焼で、小壺蓋に「赤膚山」の印が残り、寛政年間以前の製品と推定される。各小壺には稻穀と金箔で包んだ水晶・カリウム鉛がラス片を入れ、紙片で十文字に封をする。南側の子壺のみ、封を開け蓋を開けて内容物を甕内にばらまいたのち、点火した木炭を投入して甕の蓋をしている。鎮壇具の土器製作年代から、須弥壇は講堂再建以前、安永年間に仮堂を設けて薬師三尊を安置した時に造られたと推測される。

頭塔の調査（第264次）

頭塔では1991年度から整備工事が続けられているが、本年度は北半部西面の基壇および塔本体石積みB～G段を解体修理した。これに伴い塔本体石積に2か所、基壇に1か所の小トレンチを設け、下層頭塔の石積、基壇構築の状況などを調査した。



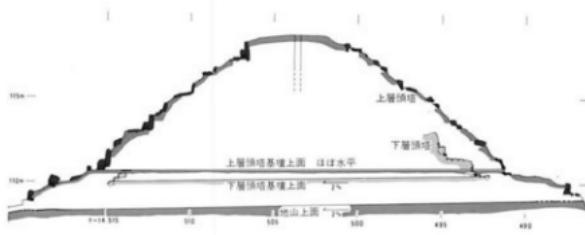
平城京第264次調査区位置図 1:200

Aトレンチ 上層最下段のG段上からえ段石積にかけて設けた。下層頭塔の第一段が上層G段から約1.5m内側で検出された。下層第一段には東面と同様、前面に2段の階段状石積を持つ。基壇上面石敷の確認にはいたらなかった。

Bトレンチ 西面上層G段中央の石仏裏側の小トレンチ。下層頭塔と考えられる石積を検出したが、東面中央石仏裏側が仏龕状であるのに対し、垂直壁となっていた。また石積下端はAトレンチで想定される基壇上面高より約1m高い。この石積は下層頭塔石積ではな

く、上層頭塔の築成過程で築かれた土止めの可能性が高い。

Cトレンチ 西面基壇中央に設けた。西面基壇石積が階段状であることは、第199次調査で明らかになっていたが、上層に伴うか下層まで遡るかは不



頭塔東西断面図 1:300

明であった。石積基底石は地山から得た赤褐色砂礫土の約25cm厚の整地土上にのる。残存石から復原される基壇上面の標高からみて下層頭塔に遡ると判断した。基壇最下層石積の裏込土から出土した須恵器杯B IIIは、須恵器杯I~VI群のいずれにも属さないが、形態的に奈良時代後半~末と推定され、下層基壇の造成時期と矛盾しない。

下層頭塔の規模 Aトレンチで下層石積第一段西面を確認したことから、下層頭塔の第一段の東西幅は約21m(71小尺)であることが確認された。上層塔本体第一段は東西幅24.2m(82小尺)であるから、作り替えの際11尺大きくなっている。また東高西低の原地形を、東は削平し、西には盛土して、2%弱の西下がり勾配をもつ平坦面を造成していた。下層基壇の上面も同じ勾配をもっており、上層基壇の築成にあたって水平に直したのである。

(長尾 充)

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積(m ²)	備 考	調査要因
6AAD-P・0	平城宮 第250次	95.4.7-95.7.7.	1,800	造酒司	計画調査
6ALP-K					
6ALQ-J					
6AAD-N・O	平城宮 第259次	95.7.3.-95.9.29.	2,000	造酒司・宮内道路	計画調査
6ALQ-I・J					
6AAV-M	平城宮 第261次	95.10.2.-96.1.19.	2,100	二次町道院東第六堂	計画調査
6ABP-I	平城宮 第262次	95.9.1.-95.9.5.	12	第一次大極殿	地盤調査
6AAV-M	平城宮 第265次	96.1.19.-96.5.13.	2,030	第二次朝堂院南門	計画調査
6AAW-L・K					
6AAN-C	平城宮 第258-11次	96.3.19.-96.3.26.	23	内裏北外郭北方	個人住宅建設
6AFJ-O	平城京 第258-2次	95.5.16.-95.6.9.	250	左京三条一坊七坪	駐車場造成
6ASB-B	平城京 第258-3次	95.8.22.-95.8.31.	46	市庭古墳北東部	個人住宅建設
6AFC-G	平城京 第258-4次	95.9.20.-95.9.28.	42	左京一条二坊十坪	個人住宅建設
6AFJ-N	平城京 第258-5次	95.10.24.-95.11.10.	160	左京三条一坊七坪	ガソリンスタンド建設
6AFC-F	平城京 第258-6次	95.11.14.-95.11.22.	30	左京一条二坊七坪	個人住宅建設
6ASB-B	平城京 第258-7次	95.12.4.-95.12.8.	15	市庭古墳周辺	個人住宅建設
6AFJ-H	平城京 第258-8次	96.1.9.-96.1.19.	30	左京三条一坊坊間路	個人住宅建設
6AFJ-Q	平城京 第259-9次	96.1.17.-96.1.26.	42	左京三条一坊八坪	個人住宅建設
6AGF-P	平城京 第258-10次	96.2.13.-96.3.15.	45	左京三条一坊十坪	個人倉庫建設
6AFJ-G	平城京 第266次	96.1.23.-96.3.15.	395	左京三条一坊十五坪	ホテル建設
6AFC-G・H	平城京 立会	96.2.15.-96.2.20.	木取山古墳周辺		水路改修
6BFK-I	平城京 第258-1次	95.4.17.-95.4.19.	20	法華寺旧境内	個人住宅建設
6BGN-B	平城京 第260次	95.7.6.-95.9.8.	330	大乗院庭園	史跡整備
6BYS-L	平城京 第263次	95.10.2.-96.1.25.	1,480	藥師寺講堂	伽藍復興
6BZT-A	平城京 第264次	95.10.16.-96.3.29.	8	頭塔	史跡整備
6BGN-B	平城京 第268次	96.2.26.-96.3.21.	210	大乗院庭園	史跡整備

1995年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

山田寺創建軒平瓦の製作技法

一桶は一つ軒平瓦は皆兄弟—

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

山田寺の四重弧紋軒平瓦は、紋様と製作技法によってA～Hの8形式に細分できる。創建以後も軒平瓦は基本的に重弧紋を踏襲し、造営と補修が行われる(『奈文研年報1994』)。今回は、蘇我倉山田石川麻呂存命中に造営された山田寺金堂および中門・回廊の所用瓦と推定される四重弧紋Aをとりあげ、その製作技法を紹介する。四重弧紋Aは全て粘土板桶巻き四枚作りで、重弧紋の4条の弧線のうち、上から2条目が他より太いことを特徴とする。中門・回廊所用のA I(瓦当幅31cm前後)と、金堂所用のA II(瓦当幅35cm前後)に細分する。两者とも凸面を丁寧にナデ調整するため叩き板の違いに基づく製作技法の分析は難しい。だが、凹面は全くといってよいほど未調整なので、用いられた桶と布(布袋)の痕跡が明瞭に残り、これに基づく検討が可能である。

中門・回廊所用のA Iは、瓦が長方形をしており、桶は筒形である。類例は檜隈寺にある。基本的な製作技法は次のように復原できる。布袋の布縫じ目と粘土板合せ目の比は約1:2であり、粘土板合せ目SとZが相半ばすることから桶には粘土板2枚を巻き付ける。叩き板には木目直交の平行刻線と木目斜交の格子目刻線があるが、叩き板の枚数を抽出することはできなかった。平瓦部成形後、広端凸面に粘土板(幅約3cm)を接合して瓦当を形成する。この頃の粘土板は側板圧痕と布压痕をもつ。桶に巻き付けた粘土円筒から所定の幅を切り取り、これを貼り付けたのだろう。凸面調整の後、円筒のまま瓦当面を下にして半乾燥させる。その後、再度回転台に上下反転して乗せ、施紋する。この時、平瓦部は反転させても自立できるほど乾燥しているが、瓦当部はまだ軟らかい。洗濯物の乾き方と同じで、上から乾くからである。その後、4分割し、側面調整をする。

さて、四重弧紋A Iは桶に止めつけた紐の分割凸帯を目印に粘土円筒を4分割する。従って、同じ桶から作られたA Iの凹面に残る側板痕のパターンは4種類に限られるはずだ。幸いA Iは倒壊した東回廊から完形品が多量に出土した。これらの軒平瓦の凹面に残る側板痕を仔細に観察した結果、4部分の側板痕跡(側板痕1～4)を抽出した。側板の傾斜から判断して、これらは1～4が時計回りに連続して一つの桶を構成する。桶に被せた布袋は、布縫じ痕によって異同の判定が可能である。A Iの布縫じ痕には3種があり、これは布袋の違いとみてよい。これを布a～cとする。布aには縫い足しがあり、布a 1と布a 2に細分できる。さらに、布a～cについて、側板痕との対応を比較すると、どの布袋にも同じ側板痕のパターンが現れる。つまりは、四重弧紋A Iは1つの桶を用い、布を2度仕替えて生産された。また、布a・bでは側板痕1と3に布縫じ痕が出現する頻度が高い。桶の開閉部と布袋の布縫じ目の位置に高い相関関係があるようだ。なお、A Iの瓦当紋様は、10種に細分できるが、このうち4種が布a、5種が布b、残る1種が布cに対応する。

金堂所用のA IIも、やはり粘土板桶巻き四枚作りである。A IIは瓦が台形で、桶はバケツを伏せたような截頭円錐形。A IIも瓦当面を下にして成形し、一旦半乾燥させた後、粘土円筒を反転させて回転台上で施紋する。その後、分割・側面調整を行う。A Iには2種の布縫じ目がある。これは一見2つの布袋の存在を示すようだが、一枚の瓦に2種の布縫じ目が同居する例があり、2枚の布をはぎ合わせた布袋だったことがわかる。つまり、A IIは全て一つの布袋(布d)そして1個の桶から生産されたとみてよいだろう。A IIはA Iほど平瓦部の残りが良くなかったので、側板痕4種を抽出することはできなかった。しかし、布縫じ目と粘土板合せ目の位置関係が共通する例がいくつもあり、桶と布袋そして粘土板合せ目相互の位置関係に規則性のあったことを窺うことはできる。

以上のように金堂そして中門・回廊の四重弧紋軒平瓦は、各々たった1個の桶から製作された。現在、平瓦についても同様の分析を進めているが、平瓦には軒平瓦と同じ布袋は用いられていないようで、軒平瓦の製作と平瓦の製作は互いに別個の道具が使用された可能性が高い。発掘遺構からの推算では、金堂には445枚、中門・回廊では2470枚の軒平瓦が必要である。これらをたった2個の桶で生産したと推測するのは、効率的ではないように見えるが、例えば、一日に粘土板を20回桶に巻き80枚の軒平瓦（生瓦）が生産できると仮定すると2割のロスを含んで金堂で7日、中門・回廊で37日を要する。これは無稽な数ではないと思う。

（花谷　浩）

A I・側板底 1 (布b)

A I・側板底 2 (布b)

A I・側板底 3

A I・側板底 4

A I・布a1

A I・布a2

A I・布a1とa2の比較 (←は同一組目)

A II・布d

A II・布d

A II・布dとⅡの比較 (←の特徴が一致)

山田寺四重弧紋Aの桶と布袋 (撮影は1:8)

藤原京六条大路の幅員について

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

藤原宮の南面を東西に走る六条大路の幅員については、従来から他の大路よりも幅広である可能性が説かれてきた。藤原京の条坊造構を整理した井上和人によれば、六条大路の道路規模は、藤原宮第21-1次（1977年度）や第29-7次（1980年度）の調査成果から、側溝心々間60大尺（21.24m）、路面幅50大尺（17.70m）に復原できるという（「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1984年）。またその後、いわゆる「大藤原京」域において実施された橿原市教育委員会の調査で、六条大路と西六坊々間路の交差点の一部が検出された（大久保・東今度遺跡）が、そこで復原された六条大路の規模も、側溝心々間で幅21m強であったという（橿原市教委1991年3月調査）。

このように藤原京六条大路については、側溝心々間約21mの幅を持つことがほぼ定説化しており、側溝心々間約25mの規模を持つ朱雀大路（1976年10月調査）に次ぐ京内有数の条坊道路として、広く注目されることとなった。しかしながら、1996年1月に実施した藤原宮第78-9次調査（本年報で概要を報告）において、六条大路と西一坊大路との交差点が検出されたが、そこでの六条大路は側溝心々間約16mの幅員しか持っていないかった。一方同じ時期、橿原市教育委員会が調査を進めていた右京六・七条四坊の発掘では、下ツ道でもある西四坊大路の東側溝とそれに交わる六条大路の造構が検出されたが、調査担当者によれば、その規模は溝心々間で約21mに復原できるという（橿原市教委『藤原京右京六・七条四坊現地説明会資料』1996年3月）。ほぼ同時に行われた六条大路の調査で、幅員について二通りの数値が得られたわけである。宮の前面とそれ以外とで、大路の幅員が異なったとも解釈できるが、その場合でも宮前面の方が狭いという奇妙な現象が生じてしまう。何故なら、宮の南面を通る大路ゆえに、他の大路よりも広い幅員を持つと、理解されてきたからである。ではいずれかの解釈に誤りがあるのだろうか？ 以下、六条大路の幅員について再検討を加えてみよう。

藤原京の条坊造構については、周知のように、道路面そのものを検出することは極めてまれで、道路の両脇に掘られた側溝を確認し、それらに挟まれた範囲を道路造構として認定することが多い。このため条坊想定位置の発掘で、側溝にふさわしい規模と年代をもつ一つの溝が確認できれば問題はないが、近接してもう一本余分な溝が存在したり、対となるべき側溝が存在しない場合には、条坊造構の認定に種々の疑問が生じることになる。特に小面積の発掘区の場合には、たとえ想定位置で検出できた溝であっても、本当にそれが側溝であるとは断定できないし、まして土層観察のみによる判定には、疑問が残る。その意味で、藤原宮第21-1次調査（土層断面による観察調査）や、同第29-7次調査（面積36m²のトレチ発掘）の成果にもとづく、幅員の復原には再検討の余地があるようだ。

藤原京の条坊側溝は、交差点部分で、ほぼ一定の方式で交わることが知られている。すなわち、東西道路の南北両側溝は、南北道路の東側溝に横T字形に合流するのに対し、西側溝は逆L字形に西へ折れて東西道路の側溝に連接する。これは東南から西北に向かって下がる地形の影響を受けたもので、一部の例外を除いて、ほぼこの形で交差点の造構は理解できる。逆に言えば、逆L字形や横T字形に連接する溝が検出されれば、条坊交差点の造構である可能性が高いことになる。

以上の観点から、六条大路関連の從前の造構を検討すると、大久保・東今戸遺跡においては大路北側溝と坊間路西側溝の交点が、第78-9次調査においては大路南北両側溝と西一坊大路西側溝の交点が、また右京六・七条四坊においては大路北側溝と坊間路西側溝の交点が逆L字形を呈しているから、これらは調査者の想定とおり条坊造構と見てほぼ誤りない。一方、右京六・七条四坊における六条大路「南側溝」については、西四坊大路東側溝との交点が横T字形に連接しているから、南側溝である

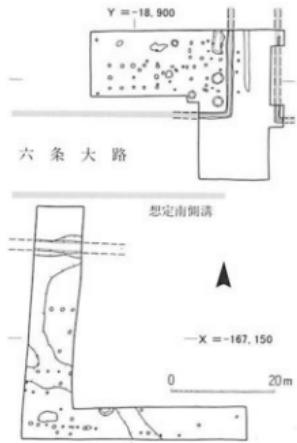
可能性は否定できないが、筆者はその溝の規模があまりにも大きすぎる点に疑問を感じる。なぜなら条坊側溝は、通常、幅2m以下、深さ0.8m以下であるのに対し、この溝は幅約4m、深さ1.2mとはるかに大規模である。側溝と考えるよりは、むしろ物資運搬などの目的で設けられた運河ではなかったのか？

条坊に沿う運河の造構は、藤原宮大極殿北方（第20次）の調査などで確認されている。この造構は、宮内先行条坊である朱雀大路東側溝の東約2～3mのところを平行して流れる幅約6～7m、深さ約2mの溝であり、宮の造営工事に関わった大規模な運河の可能性が指摘されている。今、右京六・七条四坊の「南側溝」をこれと同様に運河と考え、その北側2～3mの位置に幅約1.5mほどの南側溝が通っていたと想定すると、六条大路の幅は側溝心々間で約16mとなって、第78-9次調査の成果と整合することになる。では大久保・東今度遺跡はどうか？

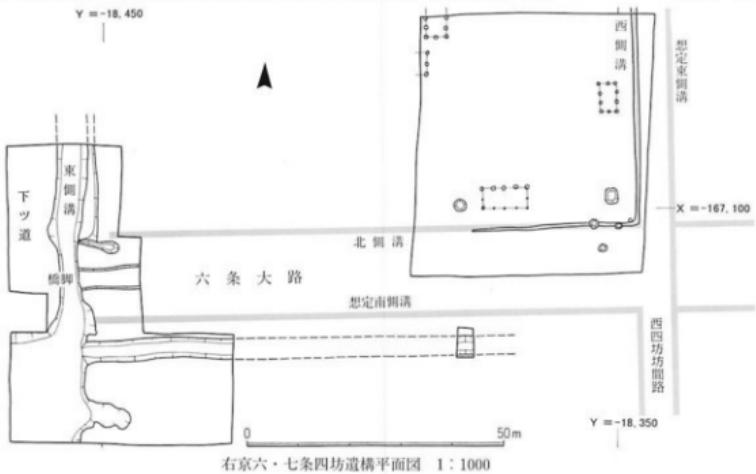
この遺跡の場合も、検出された状況からみて、六条大路北側溝はほぼ誤りないものの、調査者が南側溝と想定する溝は、直線部分を8mだけ確認したに止まる。故にこれを、条坊造構と断定するにはいささか根拠が薄い。その上、北側溝から南16～17m付近は、南北両調査区の間に当たり、そこに南側溝が存在する可能性も皆無ではない。21m強の幅員を積極的に主張する根拠は、この調査区でも薄弱なようである。

以上のように、藤原京六条大路の幅員は、従来の想定と異なって、側溝心々間で約16mである可能性が強くなってきた。この約16mという幅員は、他の偶数条坊大路と全く同じ規格であるし、最近発掘された五条大路などの調査成果からすれば、六条大路もまた、設定の基準を道路心に持つことは明らかである。このように考えると、朱雀大路だけが唯一幅員25mという最大規模を誇ることになるが、調査区の狭少さからすれば、これも案外、今後の調査で再検討が必要になるかも知れない。なお文末ながら、橿原市教育委員会齋藤明彦氏のご教示に対し感謝の意を表したい。

（黒崎 直）



大久保・東今度遺構平面図 1:1000



右京六・七条四坊造構平面図 1:1000

本薬師寺出土建築部材

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

前年度年報で報告したように、本薬師寺1994-2次調査において、回廊内から計4点の建築部材を検出した。このうち主要堂塔の建設年代上限を示す史料と考えられる2点について、ここに検討結果を報告する。

本薬師寺の東西両塔を結ぶ石敷参道SF222に重複して柱掘形SX277とSX280を検出した（図1参照）。掘形は、一辺約1.4m、深さ約1.5mの隅丸方形で、参道内に取まるようにして南北に並ぶ。掘形の時期は不明だが、抜き取りは参道石敷を壊しており平安時代と思われる。掘形底部には、礎盤が1本ずつほぼ南北方向に据えてあった。礎盤はヒノキの建築部材の両端を切断したもので、SX277の材は、残存長約127cm、幅は端部で19cm、中央部で20cmあり、高さ（成）は25cmを測る。SX280の材は、残存長約150cm、幅は端部で20cm、中央部で22cm、高さは26cmを測る。ともにやや外側に傾くがほぼ水平で、SX280では掘形壁面をえぐって端部を納め、水平に据えようとしていた。礎盤周辺には、複数の凝灰岩切石の断片が落とし込まれており、SX277では軒丸瓦や面戸瓦、駁斗瓦なども詰められていた。面戸瓦には朱が付着していた。これらは軟弱な地盤を補強するために入れられたと思われる。その出土状況については概報掲載の写真を参照されたい。

2つの遺構は、部材の据え付け方や高さが同じであることから一对の遺構と認められ、参道内に取ること、金堂基壇東辺の南延長上にあることなどから、幢竿のような施設であったと思われる。各部材の一方の端部には、隅行きの力肘木を置く斜めの欠き取りと、直交する他の通り肘木に乗るための直角方向の欠き取りが上下にあり、もとは通り肘木の上木であったことを示している（図2・3参

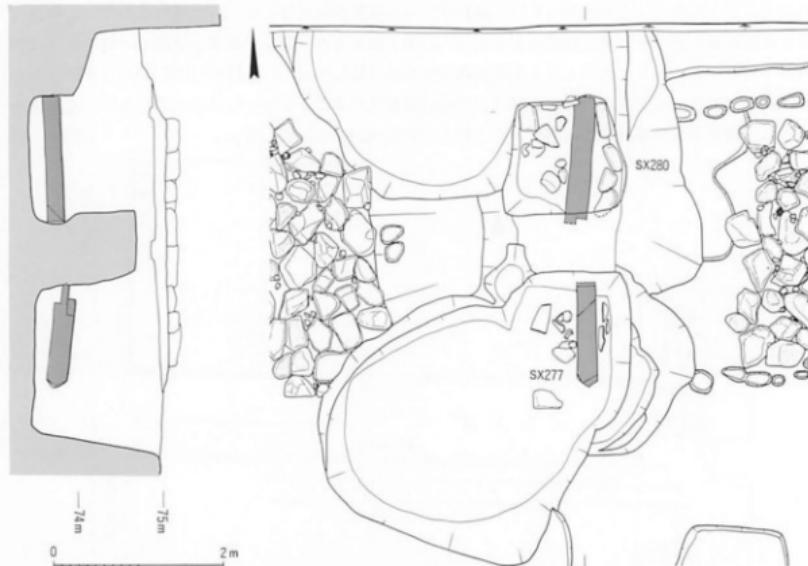


図1 遺構図および南北断面図 1:60

照)。斜めの欠き取りが水平であることから、組物と同レベルの位置に用いられる通り肘木であり、保存状態が良好であるにも関わらず風蝕がほとんどなく壁の痕跡も認められないこと、全面がチョウナ仕上げであることから入側筋で用いられていたものと思われるが、圧痕が認められないことから未使用の材であった可能性もある。また両者は、材質・形状・仕上げ状態・風蝕程度などが極めて類似しているので、同一の建物に用いられる部材であった可能性が高い。

このうちSX277から出土した材は、192層分の年輪が認められ、ヒノキの暦年標準パターンの504年～695年の年代位置で照合が成立した。これには3.3cmの辺材部が含まれるので、伐採年は695年と確定した。したがって、これらの通り肘木を用いたか、あるいは用いようとした建物は、695年（持統九年）に材木の伐採を行っていたことが判明した。文献によれば本薬師寺は、天武九（680）年に発願され、持統二（688）年には無遮大会を設け、持統十一（文武元年、697）年には開眼会を開き、文武二（698）年には構作がほぼ終わったとされる。これらの部材に対応する建物は、材木の運搬・乾燥・加工・仕上げ工程を考慮すれば、完成が文武朝に入ることはほぼ間違いないと思われるが、であればどの建物であったかが問題になる。そこでつぎに部材寸法からこれを検討した。

表1に主な同時期の現存遺構の通り肘木の断面寸法を比較している。このうち法起寺三重塔と平城薬師寺東塔のものは修理報告書と調査報告書にみえる当初材の寸法の平均値を掲載した。しかし法隆寺と唐招提寺のものは実測値ではあっても当初材かどうか不明である。また、部材寸法は1cm内外のばらつきがあるのが普通だから、数値の差は絶対的なものではなく厳密なことはいえないが、出土部材の断面寸法は、明らかに法隆寺五重塔と法起寺三重塔のものと近い。薬師寺東塔の場合は、当初材の現在の寸法は出土部材よりも小さいが、調査報告書の中で材の痩せを考慮して復原している成とは一致している。出土部材の場合は、地下水に浸されていた時間が長いので、痩せはそれほど進行していないものと考えれば、むしろ薬師寺東塔の部材寸法に近いとしてよいのかもしれないが、その際には縦横比の違いが問題になる。また、このように考えた場合は、法隆寺五重塔と法起寺三重塔の材寸が出土部材よりもやや大きいことになる。いずれにしろ出土部材の断面寸法は、7世紀末期の塔のものとしてそれほどおかしくないが、幅が広いことに注意を要する。

一方、中門は法隆寺1例しかなくしかも当初材か不明であるので曖昧だが、痩せを考慮しても幅が狭く縦横比も異なる。金堂は、法隆寺では大きすぎ唐招提寺では成と縦横比が異なる。

以上のように部材寸法からみると塔のものである可能性が高いが、この部材が用いられた構造は東塔に対する施設と思われるので、かりに東塔のものとみるなら未使用材であるか、大規模な修理の際に取り外されたものとみなければならない。また講堂の可能性もあるが、共に出土した面戸瓦に朱が付着し、重層の建物のものであったことをどう考えるかという問題がある。この史料をどう解釈するかは、今後ともあらゆる条件を検討しつつ慎重に進めなければならない。

（藤田盟児）

建物名	SX277出土材	SX280出土材	法隆寺中門	同金堂	同五重塔1～3層	法起寺三重塔	同復原版1～2層	同3層	唐招提寺金堂
成	25	26	24.5	27	26	25～26	24.5	26	24
幅	20	21	18.3	22	21	20～21	19	21	21
成/幅	1.25	1.24	1.34	1.23	1.24	1.24～1.25	1.29	1.14	1.14

表1 入側筋通り肘木の断面寸法比較表（単位cm）



図2 SX277出土建築部材実測図 1:30

図3 SX280出土建築部材実測図 1:30

飛鳥藤原地域で出土した銅、青銅、金銅製品

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥藤原地域から出土する金属製造物は、わが国の金工史を考える上で重要なものが少なくない。例えば、古代においてすでに金属接合剤である銀—銅合金系の銀錠を用いていたことがわかった水落遺跡出土の送水用小钢管や、銀錠そのものと思われる飛鳥池遺跡出土の銀—銅合金の細棒、同じく飛鳥池遺跡から出土した我が国最古級の魚々子繩の痕跡を持つ小钢板などがその代表に挙げられる。飛鳥時代になると、金属製品も都の中核では徐々に日常生活に浸透していくとともに、都の建設や仏教寺院などの建造物に必要な建築用部材としても金属材料が使われ出すのが大きな特徴といえよう。また、和同開珎の前駆としての錢の登場時期でもあり、金属の用途の多様化が認められるようになる。古墳時代に「金銅」として、馬具や装身具の表面を金色に装飾していた鍍金技術は、寺院建築の飾り金具などの荘厳にも応用されるようになった。図1は1993年の発掘調査で本薬師寺から出土した垂木先金具の一部である。埋蔵中に表面を覆うようになった緑青さびの下から現れた黃金色が、創建当初の豪華さを窺わせる。古代における鍍金法は、水銀と金の合金である金アマルガム粒子の集合体によって構成されており、厚さは10~20ミクロン程度である。しかし、光沢のある黃金色を得るために、最終工程で金アマルガム粒子によって作り出された表面の微妙な凹凸を鉄製のヘラなどで均す必要があり、その痕跡は遺物表面を精査すれば確認できる場合がある。これまで、古墳時代の馬具や装身具において鍍金層表面の金アマルガム粒子の状態を電子顕微鏡によるミクロな観察によって明らかにしてきた。図2は本薬師寺から出土した垂木先金具の表面鍍金層の電子顕微鏡観察の結果である。顕著ではないが、鍍金層が数ミクロン程度の金アマルガム粒子の集合体であり、光沢のある表面を得るために金アマルガム粒子の凹凸を均した作業の痕跡も認められる。またX線分析の結果、この鍍金層からは、主体の金とともに少量の銀と水銀も検出した。因みに、垂木先金具の本体は鍛造製の鋼板であり、古墳時代にみられる薄板作りの金銅製品の本体がほとんど鍛造銅板であったことと共通する。また、これまでの山田寺の発掘調査によって出土している金銅装の建築用金具が數例あるがいずれも本体が銅製の薄板であることを確認している。しかし、この時代の建築用金具の金銅装は全体的に残りが悪く、あまり質の高いものではない。今後、古墳時代の馬具などに用いられた技術との違いなどを含めてさらに精査する必要があるだろう。

図1 本薬師寺(1993-3次調査)出土の垂木先金銅装金具破片

図2 本薬師寺出土垂木先金銅装金具に施された鍍金層表面の電子顕微鏡観察

銅の鋳造性を高めるために錫との合金、いわゆる青銅を利用することは弥生時代から知られていた。わが国最初の本格的な銭は青銅製の鋳造貨である和同開珎といわれるが、飛鳥藤原地域ではそれに先行するとみられる銭が出土している。銭の成分に限って見ていくば、まず注目すべきは、無文銀銭、和同銀銭などの銀製の銭である。いずれも純度の高い銀で作られているのが特徴である。その後、銅製の和同開珎が登場するのだが、最近の分析によってこれにもいくつかのタイプがあることがわかつてきた。いずれも主成分は銅であるが、副次的成分として含まれる錫、ヒ素、鉛、鉄、ビスマス、アンチモンなどの含有量に違いが認められるのである。ここで、特に注意する元素として取り上げるのがアンチモンである。藤原京75-15次（1995）の発掘調査で出土した和同開珎は錫が1%に満たないが、アンチモンを数%含むことがわかった。これまでにもアンチモンを多く含む銭の事例としては、厭勝銭といわれる富本銭があげられる。富本銭に関しては、飛鳥藤原地域で出土したもの（64次出土）や平城京で出土したもの（57次出土）も含め、これまでに出土した4例とも数%のアンチモンを含むことがわかった。しかし、和同開珎に関しては、アンチモンが顕著なものは、平城京出土も含めてこれまでのところ数例確認している。一方、藤原京80次の発掘調査で出土した小型の海獸葡萄鏡には、やはり数%のアンチモンを含んでいることがわかった。しかもこれとよく似た小型海獸葡萄鏡がいずれも高めのアンチモンの分析値を示した。以上の状況を踏まえると、アンチモンを高く含む鉱石を使った工房でこれら特定の製品が鋳造された可能性が想定できる。アンチモンを他の元素と間違えて添加したという考え方もあるが、飛鳥池遺跡の工房跡からは、アンチモンの鉱石である輝安鉱も出土しており、当時すでにアンチモンの存在は知られていたと考える方が妥当ではなかろうか。今後、アンチモンを顕著に含む遺物の確認を進めていく作業が必要となるが、その過程でアンチモンが原料鉱石の産地を推定する指標の一つとなる可能性も探ることができると考える。また、分析手法を現在のところ蛍光X線分析による非破壊的手法に限っているため、分析値が土の汚れや腐食層など遺物の表面状態に影響が反映され、正確な組成の比較検討を困難にしていることにも問題がある。合わせて今後の課題となろう。

（村上 隆）

左 藤原宮第75-15次調査出土和同開珎（実大）

右 藤原宮第64次調査出土富本銭（実大）

		銅	錫	鉛	アンチモン	ヒ素	銀	鉄	ビスマス
富本銭	藤原宮64次	89.9	0.9	0.3	5.1	0.9	0.4	1.0	1.5
	平城宮168次	84.6	0.8	—	11.9	1.9	0.1	0.3	0.4
	平城宮57次	87.0	2.6	—	7.2	1.1	0.7	0.6	0.9
和同開珎	藤原宮75-15次	91.0	0.4	0.2	6.2	1.2	0.2	0.1	0.8
	平城宮57次	89.0	1.3	—	6.1	2.6	0.3	0.4	0.7
	g	94.0	0.6	—	2.3	0.8	0.5	0.6	1.2
海獸葡萄鏡	藤原宮80次	91.6	0.7	0.9	4.0	0.7	0.1	0.4	1.6
	坂田寺6次	91.2	1.0	1.6	3.0	2.0	0.3	0.2	0.8

アンチモンを含む銅製品の非破壊的手法による蛍光X線分析の結果 (wt%)

藤原宮第80次調査出土
海獸葡萄鏡（実大）
下 X線ラジオグラフィー

1995年度平城宮跡・平城京跡出土木簡

平城宮跡発掘調査部

1995年度の調査では平城宮跡の2箇所、平城京跡の1箇所から計2961点（うち削削2596点）の木簡が出土した。ここでは主要なものについて紹介する。

(1) 造酒司地区（第250・259次調査）

内裏の東にあたるこの地区では既に第22次、第182次、第241次調査がなされており、出土木簡の内容などから造酒司跡と推定されている。95年度の二回の調査では、造酒司の南限築地とその南の東西道路を確認した。木簡は、造酒司内を南流する溝SD3035及びSD16733から各1点、東西道路SF11580を南北に横切る溝SD16742から27点（うち削削15点）、SF11580の南側溝SD11600から2808点（うち削削2459点）出土したほか、出土地区不明の削削119点がある。以下、SD11600出土のものを中心に述べる。

年紀の記載としては、⑩の延暦元年（782）、⑪の同3年があり、長岡京遷都（延暦3年11月）直前の年紀を示す。文書木簡は内容上二つのグループに分けられる。第一のものは、春宮坊に対して被管官司から出された解である（①・②・③）。①・②はいずれも主膳監からの宿直報告である。複数の被管官司の解が含まれているので、これらは春宮坊本体から廃棄された可能性が高い。奈良時代末の皇太子としては他戸・山部（後の桓武天皇）・早良の三親王がいるが、比定についてはなお検討を要する。但し、⑫にみえる「大原史魚次」が宝亀7年3月25日春宮坊写経所送文（『大日本古文書』編年文書23-617）に自署する別当主兵署首大原魚次（『大日本古文書』は「首」を「正」に書き直したと解するが、恐らく逆）と同一人物であるとすると、山部親王（宝亀4年（773）立太子、天応元年（781）即位）の春宮坊である可能性が高い。第二のものとして、「所」からの食料・食膳具請求文書がある（④～⑦、⑧もこれに含まれよう）。日下に別当などの名が記され、裏に四等官などの判が加えられている。その所属する官司は、判官・主典の表記が「進」「属」であることから、職クラスであることがわかる。「林浦海」は『続日本紀』延暦4年6月辛巳条に皇后宮少属としてみえ、「少進安倍」は同日条にみえる皇后宮少進安倍廣津麻呂と一致する。以上のことから、これらの「所」は桓武天皇の皇后藤原乙牟漏（延暦2年4月18日立后）の皇后宮職の下部組織である可能性がある。

春宮坊関係の木簡が出土したこと、奈良時代末に春宮坊が今回の調査区の近くにあったことが推定できる。かつて第32次調査において、平城宮東南隅のSD3410・1250・4951から今回のものと類似する木簡が出土し、また、第104次調査でも、SD4951の上流部に当たると考えられるSD3236から同様の木簡が出土している。このことから、SD4951・3236などの上流即ち北方に春宮坊が所在することが推定されていたが（『平城宮木簡3（解説）』1981年）、今回の調査でその可能性がさらに高まった。しかし、具体的に春宮坊に比定し得る建物の遺構は検出されておらず、その位置は今後の調査の成果を待つて考える必要がある。また、藤原乙牟漏の皇后宮職関係の木簡が出土したこと、皇后宮職の少なくとも一部の機関が今回の調査区の近くにあったことが窺える。『平城宮発掘調査報告XIII』（1991年）で、光仁天皇の皇后井上内親王や桓武天皇の皇后藤原乙牟漏の宮は内裏内部に營まれたと推定したが、奈良時代末の皇后宮のあり方については、春宮坊関係木簡と皇后宮職関係木簡が共伴したことの意味も含めて、なお今後検討すべき課題が残る。また、これらの木簡は皇后宮職の「所」の具体像を窺える資料であり、今後他の文献資料との比較を踏まえた検討が必要である。

(2) 平城京左京三条一坊十五坪（第266次調査）

坪内の井戸SE6690の抜取痕跡から木簡5点（うち削削3点）が出土した。⑬は木材の進上状か。平城京遷都直後の和銅4年（711）の年紀をもつ。

（古尾谷知浩）

500-1 大〇〇王木牘

①・主膳監解 申宿侍一人 高橋國守
安都郡万呂

十一月廿二日奉一萬

②・「膳監力」解 申宿侍三人多米縣呂
安都郡万呂

十一月廿三日奉一萬

360・39・4 011

③・主馬解

(69)・(17)・1 081

④・膳 御服所請鈴宅抬陸更石川尾張
小崎升 安倍庭女 都努力田已上四人日料依命歸

・宣所請如件 五月廿二日膳安麻呂
別当史生阿閉

336・32・3 011

⑤・綫所請賄物漆合人七口料四月十日別當物部弟益

・「行少羽三鳴大潤」

(コノ他削り残リノ黒紙アリ) 219・32・3 011

⑥・御賄所請柏拾把
・「行 林浦海」

270・30・3 011

⑦・人拾所請骨塗武升官人御料
〔滑〕
・「請塗毛牛」
〔為燒皮并夫愈所請如件
五月七日

六月四日

255・35・4 011

・「利少進安信
少属三鳴」『大潤』

242・32・3 011

⑨・衛士四人給夕食
□

・利大進 十三日 小□

(144)・28・2 081

⑩・伊豆国那賀郡那珂郷主天田郡人成口調魚鹽魚桔357月給同
宇連部得足 延暦元年十月十日
専当郡司擬領外正七位上膳臣山守

308・32・4 031

⑪・瀬岐國「田脱力」
山都三谷凡直小野□

337・37・3 011

延暦三年四月十一日

(94)・17・3 019

○和銅四年二月五日

091

⑫・奉上
「□□」
[S.你那]

88・46・3 019

500-2 大九〇出土木牘

⑬・○奉上木三百一材
○和銅四年二月五日

(176)・30・2 019

091

⑭・奉上
「□□」
[S.你那]

88・46・3 019

平城宮跡・平城京跡出土漆紙文書

平城宮跡発掘調査部

1995年度に行われた平城宮第259次調査では漆紙文書一点が出土した。これを紹介するとともに、以前の発掘調査で出土していた漆紙文書についても再調査を加え、今後順次報告していくこととする。

(1) 造酒司南宮内道路南側溝（第259次調査）出土の漆紙文書

第259次調査では宮内道路SF11580の南側溝SD11600から、2808点の木簡とともに漆紙文書一点が出土した。本文書は、漆付着面を外側に四ツ折にして廃棄されていたが、展開すると直径約16cmの円形に復原できる。大きさ、縁辺部の形状からみて、漆液を大きな容器から取り分けてパレットとして用いた皿または環状の土器の蓋紙であろう。墨痕はオモテ面（漆の付着していない面）に6行、52文字確認できる。行間は2.1cm、字の大きさは本文で約1.0cm～0.8cm四方、双行部で約0.9cm四方である。縦横の界線が確認されるが、界幅は現状では測定が困難である。本文は楷書体で大数字を、双行部は行書体で小数字を用いる。界線の存在、楷書体・大数字の使用、宮域内からの出土、などの条件から、諸国からの京進文書とみてよかろう。なお、表面には茶褐色の方格状の線が認められる。大きさ、形状からみて国印の印影の一部として矛盾はないが、顕微鏡及びX線による観察によつてもここに顔料は確認できなかった。今後の検討に課題を残す。また、紙背の状況は不明である。

内容は田積を列記し、それぞれの下に双行で「損」（損田）「得」（得田）の内訳を記す。得田は町段歩単位で田積を記すが、損田は「二」「三」のみしか記載がなく、損率（二分・三分）の意味であろう。なお、2～4行目の得田積が36歩の整数倍になっていることが注意される。現存する帳簿の中では、天平12年遠江国浜名郡輪租帳（『大日本古文書』編年文書2-258）の損戸の夾名部が類似した形態と内容をもち、延喜主税式租帳条の記載もほぼ同様である。このことから本文書は租帳である可能性があるが、得田積を基準に記載している点が損田積を基準とする他の例と異なり、また、浜名郡輪租帳では損田・得田積が24歩の整数倍で、田租一束あたりの田積が計算の基準になっているのに対し、本文書は田租計算上整数値にならず、租帳としては不自然な点もあるため、なお検討を要する。

(2) 左京二条二坊六坪（第68次調査）出土漆紙文書

ここで報告する資料は、平城宮第68次調査（1970年7月、平城京跡左京二条二坊六坪）において、東二坊々間路西側溝SD5780から出土した2点の漆紙文書である。これらは既に『平城宮発掘調査出土木簡概報』8（1971年）において伴出本簡とともに漆片に文字のあるものとして収録されており、これが漆紙文書の中でも最も早く報告されたものの一つである。しかし、今回これを再調査することでこれまで知られなかつた重要な知見が得られたので報告する。

漆紙文書が出土した西側溝SD5780は、幅3.2m、深さ0.6mを測り、他に文字資料として木簡79点、「東南隅」「東隅」等の墨書き土器、和同開珎・万年通宝等の銭貨が出土した。木簡には郡里制（～靈龜3年）や郡郷里制（靈龜3～天平12年）の地名表記を持つものがみえるが、万年通宝など奈良時代後半の遺物も伴出しており、溝は奈良時代を通して機能していたとみられる。なお、木簡については寺崎保広「1977年以前出土の木簡」（『木簡研究』17、1995年）も参照されたい。

①長さ約8.0cm、幅約2.6cmの不整形の断片で、他にも直接は接続しないが同一紙とみられる断片がある。オモテ面（漆の付着していない面）に4行の墨書が認められる。行間は約0.9cm、字の幅は約0.5～0.7cmである。この他、横界状の墨線があること、「丘」「桑」の字が○で囲まれていることが注意される。内容は明確ではないが、3行目に戸主名の下に田積を記載する。戸主の本貫と思われる地名表記に「里」とあることから、この文書は郡里制もしくは郡郷里制下のものであろう。

②漆付着面を内側にして二ツ折にして廃棄されていたが、展開するならば直径約18cmの円形に復原できる。紙継目は見られない。以前はオモテ面についてしか報告されていなかったが、今回資料を水で濡らし、赤外線テレビカメラで観察することにより紙背の漆付着面の文書も確認できた。

a オモテ面 4行の墨書があるが、3行目と4行目の間に約5行分の空白がある。行間は約1.9cm、字の幅は約0.8cmである。界線等は確認できない。宝亀2年(771)の年紀があるが、月日のない点や記載位置からすると、文書作成年そのものとは考え難い。

b 漆付着面 8行の墨書が認められ、行間は約1.5cm、字の幅は約1.2cmである。縦界が確認でき、界幅は約1.5cmである。内容は左京または右京の計帳で、ある戸の冒頭の統計記載である。正倉院に現存する計帳と比較すると、1行目から順に、本貫、戸主名+「手実」、去年の計帳の口数合計、帳後破除の口数、帳後新附の口数、今年の計帳の口数合計、不課口数の合計、不課口の内訳といった記載内容であろう。但し、各行の書き出し位置を推定すると、他の計帳と合わない点があり、検討をする。また、「手実」とあるが、本貫が「同坊」と直前の戸を承けた記載であり、また直前に紙継目がないので、各戸から提出された手実を貼り継いだものではなく、これを淨書したものであろう。本計帳の作成年は、3歳以下の年齢区分として「黄」字を用いていることから、天平勝宝9歳(757)の養老令施行以降と考えられ。

る。本計帳が大数字、楷書体を用いてのこと、界線を有することなどからすれば、計帳の面が一次文書でオモテ面が二次利用であろう。一次文書としての本計帳が中央に提出されたものか、京職が控えとして保管し、ここから廃棄されたものかという点については現段階では判断し難い。

なお資料の調査にあたり
京都大学教授鎌田元一氏か
ら多大な教示を得た。



(古尾谷知浩)

(2)-① 赤外線写真

「定良大小口夫擔肆人」
「武人」
「一人門部」
「八人小」

人黃

右
同
坊

2

宝龟
一年

② あ才モテ面

□麻
□里長谷部赤男戸百廿歩

□

(一) 平城宮第二五九次調查出土漆紙文書

(三) 平城宮第六八次調查出土漆紙文書

法隆寺所蔵金属製容器の調査 (3)

平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部

法隆寺所蔵青銅・銅製容器についての考古・保存科学両面からの調査は、1992年度に開始し、1995年12月には終了した。調査点数は83点であった。今回は水瓶について報告する。なお、水瓶については、1991年度に奈良国立博物館所蔵及び保管品を調査しており、ここでその一部も取り上げる。

1 考古学的調査

1～4は僧が身を淨めるための水を入れた淨瓶。仙蓋形水瓶とも呼ぶ。肩部の肩に蓋付きの短い口をもつのが特徴であり、通常はここから瓶内に水を入れ、細頸から上に水を出したと考えている。

1は受水口部に胡面を刻んでおり、イラン・トルコの影響を受けた唐製品と推測されている。青銅（佐波理）製の鋳造品であり、底も共鋳きのようである。正倉院宝物例と酷似するが、肩の張りがやや弱く、蓋の天井部に甲盛りがない点は他にない特色であり、法隆寺例が先行しよう。年代は両者とも奈良時代に比定しているが、蓋のつまみに施した千段巻の表現が、たとえば中国の北魏末～隋代の王子形水瓶の頭部にあり、以後は見られなくなることからすると、7世紀に遡る可能性が高い。

2・3は奈良国立博物館蔵の青銅製鋳造品。2は底の中央近くに型持用鉄芯の跡を鋳掛けした円痕があり、底も共鋳き。3の底も共鋳きか。2の器形は前述の正倉院例に近いが、肩の張りがやや強い。頭部と蓋とが一連となり、蓋のつまみを八面に面取りする点は、以後の作例につながる新しい要素。3はさらに肩の張りが強く、高台が低い。蓋のつまみ頂部につくられていた球状の飾みも消失する。唐僧の神会墓（758）出土品は3に類似するが、肩の張りが2に近い例であり、2は8世紀前半代に比定できる。3は鞍馬経塚出土品に類似し、大きくは平安時代になる。

4は銅製で、鋳造した各部をハンダ着けしている。肩の張りが極めて強い。類例は高麗（918～1392）にあり、時期も新しくなるが、丈が低い点は特異。淨瓶の最終、中世後半と推測しておく。受水口部の蓋の取り付けが他とは逆で、ここから水を入れることが明らかである。5も銅製鋳造品。鎌倉時代から盛行する布薩形水瓶で、注口部が長く高い点は中世後半からの特徴を示す。下端に穴を開いた中空の円筒を蓋に取り付けている。ピベットがストロー的機能をもつのであろう。（毛利光俊彦）

2 科学的調査

法隆寺に伝世する金属製容器の中で鉢と皿に対する材質調査などの概要是、これまで2回に分けて報告した。ここでは、水瓶類のX線ラジオグラフィー（X線透過撮影）による構造調査を中心にまとめる。今回調査した水瓶の中で注目されるのは、唐からの招来と伝えられる「胡面水瓶」（重要文化財）（水瓶1）である。材質分析により、銅に錫20%を含む青銅、いわゆる「佐波理（さはり）」製であることを確認した。図1・2は、胴に取り付く胡面部の拡大とその部分のX線ラジオグラフである。当初、胡面部全体に相当する開口部が胴部にあるものと想定したが、実際には1cm弱の小さな丸い穴だけが胡面の下に隠れていた。図3は、胴部に開けられた穴の部分をファイバースコープで確認した様子である。加工状態から、この穴は本体鋳造後に開けられたものと考えてよかろう。一方、水瓶4・5では受水口全体が胴部に開口していることをX線ラジオグラフによって確認できた（図4）。胡面水瓶の小さな穴の存在は、水瓶本来の機能性及び使用法を解く鍵となるであろう。また、胡面部と本体胴部の接合部に鐵材と思われる灰白色の物質を認めた。錫系、又は鉛系のものと思われるが、今回は分析による確認はできなかった。接合の様子からみて後補の可能性も高い。今後の検討をする。古い時期の水瓶の事例として、奈良国立博物館所蔵の水瓶も合わせて分析する機会を得た。表に、分析結果をまとめた。ただし、螢光X線分析法を用いた非破壊分析によるもので、水瓶のオリジナルな組成を正確に示すものではないので、分析値の取り扱いには注意を要する。奈良博の水瓶2・3は、いずれも銅と錫を主成分とする青銅製であるが、鉛が数%含まれる。かなり時代が下がる法隆寺所蔵の水瓶4・5は、銅が主体となりそれまでのものと大きく異なる組成を示す。

（村上 隆）

図1 水瓶1の入水口部拡大

図2 水瓶1入水口部
X線ラジオグラフ

図3 ファイバースコープでみた胴部の穴

水瓶の非破壊手法による螢光X線分析の結果 (wt%)	銅	錫	鉛	鐵	銀	ヒ素
水瓶1(胡面)(法隆寺所蔵)	79	20	-	-	1.0	0.6
水瓶2(奈良博蔵)	72	23	4.1	0.7	0.1	-
水瓶3(奈良博蔵)	75	14	8.5	0.6	0.3	1.2
水瓶4(法隆寺所蔵)	99	-	0.2	0.1	-	0.5
水瓶5(法隆寺所蔵)	99	-	0.3	-	-	0.8

図4 水瓶5の入水口部X線ラジオグラフ

櫛描流水紋土器の新例

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

西方官衙南地区で行った藤原宮第80次調査で、不思議な土器が出土した。橿原市四分町における宅地造成の事前調査が、有数の弥生集落——四分道路の眠りをさました結果である。集落の北をめぐる外濠SD8493の下層堆積層の黒灰色土層から、その土器は出土した。

惜しいことに口頭部を欠いていたが、残存高25.2cm、体部最大径24cm前後で細頸壺と推定できる弥生土器である。

A 紋様は、頭-体部界に2条の梵描直線紋があって、頭部下端に櫛描波状紋、体部上半に櫛描流水紋を飾る。外面の調整法は、底部から体部下半にかけて横方向に乱雜なミガキを施しており、縱方向のヘラケズリの形跡はない。紋様の部位はナデ。内面体部下半は、ハケメ。頭-体部間に現れた擬口縁の形状は外傾である。紋様・形態・調整法のこのような組み合わせは、この壺が奈良あたりの弥生土器で、櫛描紋を描き始めた第Ⅱ様式にあたることを示す。

B さて不思議なのは、体部上半の流水紋である。体部を5つの面に分けて、回転台を用いないフリー手で描いており、注目すべきことに、どの面も決して同じ型を繰り返していないのである。櫛描紋の60箇所の重複関係から、A→B→C→D→Eと左隣りの面に描いていったと復原できる。

C 重複関係に拘ってもう少し具体的にみると、作者はまずA面を3本歯の道具で描き始めたが、すぐ歯を1本加えるか、別の道具に持ち換えた。A面は体部上半の半分で終えたが、B面に移ってから、A面の下部を流水紋で埋めた。C面は、B面の最上段の直線部を共有することに決めて描き出したが、すぐに変更し、ともかく最下段まで描き進んでから、右隣りの最下段を描き足す。D面はA面で試みた長方形流水紋で始めたが、独立させずに下段に連ねる。これは、C面の直線部の処理に引きずられたためだろう。最後のE面で、この土器で最も整った縦型流水紋を描く。

E 土器の手法は奈良あたり。もし奈良なら流水紋を好んだ地である。だがなぜか線は弱々しく頼りなげだ。だから作者は、自信に満ちた確信犯でも、歪んだ性格の人でもなくして、個人的か文化的かはともかくまだ習熟段階にいる初心者を想像させる。こうみなしてよければ本品は紋様の習熟過程の実際を伝える証人ということになる。 (深澤芳樹)

興福寺文書の神鹿記事から

歴史研究室

興福寺所蔵の経函第54函には、神鹿殺害関係記録として一括された7冊の文書記録がある。鹿島香取の神を春日の地に運んだ鹿は、春日曼陀羅にみられるごとく奈良では春日大社の神鹿として崇敬される存在であった。したがって奈良では、神鹿、講衆、児童に対する犯罪は三ヶ大犯とされ、室町時代以降、神鹿殺しの罪は大垣成敗に処せられたのである（永島福太郎氏「大垣廻し」『国史学論叢』所収）。大垣成敗とは、神鹿殺害の罪が確定した場合、犯人を興福寺築地を周回させたうえで、斬罪に処した厳しい成敗をいうのである。この第54函所収の文書記録は、江戸時代のものであるが、当時死鹿が発見されたとき、それに対しどのような対応が為されていたかを知る格好な資料である。江戸時代の神鹿殺害関係史料としては、天理図書館所蔵の『松操錄』などの松村家文書、春日大社所蔵の『神鹿一件記』などがよく知られるが、当興福寺所蔵文書中にも、中世ほどではないにしても興福寺境内を中心として周辺の検断を有していた興福寺の当事者としての、神鹿殺害という事件への対応を如実に示している貴重なといえよう。

ここに掲げた史料は、当函第37号5の史料で、嘉永3年（1850）6月17日夜に起った事件を記した「菩提院方内於明王院門前突死死鹿一件始終書留」と題されたものである。そこには、死鹿が菩提院の明王院門前で発見され、それが殺害された様相を示していることでの、一週間程の興福寺内でのその処理におわれる慌ただしい動きを示す史料である。紙幅の関係で神鹿殺害とまでいえないこの文書を掲げたが、そのような事件でさえ、その対応がいかに大変であったことが判ろう。まして鉄砲で殺されたことが明白な場合は、重大事件であり、例えば、天保12年（1841）に発生した神鹿殺害事件については、その顛末は、すでに紹介されているところであるが（『日本庶民生活史料集成25』p.59、『奈良の部落史』本文編P.296、史料編520）、その事件に関しては、興福寺文書のなかにも調査、検断の責任者である当事者としての興福寺の動きを伝える史料もみえる（『川上村神鹿一件抜書』第37号3）。また一括外であるが死鹿の数に関する寛政から嘉永まで各町内で発見された死鹿の詳細な記録（『寺社町死鹿數取調書抜』第38号）もみられるのである。

（綾村 宏）

返事	御手致祥見候、然者明廿七日
致承候	右御答返如斯ニ御座候、以上
六月廿六日	
表二	
中条伝之系譜	
興福寺	
一賜所	

一、右之通返書道シ、明日之伴僧五師月番へ申入置、
四ツ時御役役所罷出候様候仰下
致承候、右御答返如斯ニ御座候、以上

同二十七日

一、四ツ時當職世尊院院代成身院伴僧元利
御寺務へ相届候處、御使も有之趣ニ付問道ニ面、奉行所へ
御越處、掛り与力佐役ノ系面会ニ面達之趣、
此事就鹿一件ニ付、吟味之儀被相頼ニ付、一件
當奉行所ニおろて、夫々開合等も申付口申中、遂吟味
候處、何者之仕業乎も難相分り候間、此段御達シ被申
候、尙赤脚ニ面も有之儀有之候ハ、早速可被申出
旨被申、委細承知候旨及返答帰寺畢、
一、其處御寺務へも申上直候也。

（以上）

一、縁届之簡、死鹿之處如何致置候哉、明朝末

其德差置候哉、御退候下度候矣、先死鹿之處者、

今勝手二假取片付可致様与之御沙汰付、異り

引取單、

一、戸上拍手呼ニ道シ死鹿之處、今一走見分いたし

参り候様申付凡、直様場所へ参り見分之處、何も

子細無ニ、先日之徳候旨申ニ付、東之坂甚右衛門呼ニ道シ、

故障之死鹿之事故、不敢取特知、仮理ミ致置候様申付凡、

一、非人頭弁助呼ニ道シ、間合之處、相尋ル處また難分

旨畢、

一、鹿守右衛門等之儀用捨道ス、

一、配下不残請書差出ス、

一、山不残掌中財能功三万神人、何も例之

通、請書差出候付、取直畢、

一、戸上拍手呼ニ道シ死鹿之處、内々借用写讀、

同廿三日

一、下賜三十講酒第一引取支度、当職世尊院

故代成身院伴僧元吉召連、御寺務、届處、

御使同道ニ而奉行へ延越、

一、懸り力中柔伝文不被出過、御願之書委細

承知被致、猶許可仕候、尤手懸り之箇も有之候ハ、

可被出申旨被申、宜頼候旨申入、引取り候、

一、御寺務御使同勘之事、

一、去ル十日夜、當寺地中明王殿前ニ死鹿

有之候、有者女鹿ニ而首より前足へ懸ケ縛ニ而括リ

其上突起三ヶ所も有之、何者之往業とも相分

不申候得異、何分縛ニ而括リ、且候も有之候得者、

全ク相弁申候ニ而括リ、而有之間數、神慮

無勿被為入置候、仍而吟味之儀、一裝所井

下脚分より崩出候へ共、分而嚴重之吟味之程、被

為稱入候、以上。

六月廿二日

下賜分付代

庚六月廿二日 興福寺 附所 印

一關代御中

中柔伝之卷

表二

同二十六日

六月廿二日

四ツ時御後拂江御詔シ可有之候

以上、

御達被申候義有之候間、明廿七日

評定之下、集会候者退散、

此武家之沙汰有之候、差相見合居可然也、一統

「聞之存知之者無之哉、遂吟味焉」紙不存申之哉。

仍而猶も室内之者共之哉、味不哉哉、明日于之刻之二

書付を以申出様申付凡、一紙異り引取了、

一、非人頭長太郎罷出、開合セ之儀便付二付、

銘々相考へ所存之處申上便様申付候二付、粗々相考へ居候へ共

手馳りも無御座、尤持表り候鹿与者相見申不申、御門前二面

括り候或之察申候、仍而何若致事ニモ急々三種相分候間、

延引之略顯二來凡、

一、鹿亭又右衛門昨夜よ鹿鹿之儀便付候付、則番仕候へ共、

延引二相成候而者、難活仕候間、何幸帝之御用榜二預り

願出候へ共、是より沙汰ニ及候迄、審政居候申付候、異口引取、

一、戸上拍手一山聲相濟、贈書寫上二来凡、自然用之而呼二

遺候間、早々罷出候申付、今日之使者引取候便様申渡、

一、右死鹿二付、御寺務願出ル苦二下觀分、統評定、乍然

今日日外吟呻二面、渥々相成、明日詔書相拂義上、相羅

可然官付、明日願書差出二決畢、乍然分不貽易

事柄故、先不取敢内々告委之家用申入置、可然

哉とも額付候二付、西之刻比當願世尊院御事奉者へ參殿、

一、当番家司中治大和守内々致面会、右死鹿之文第

者御問通ニ相成候而者、如何敷候間、不取敢内々申上置候、

申入候口上之趣、委細承知之旨返答二付、賴入引取畢、

一、今晚之候者、会合退散、明日朝集会之旨申入、一統

引取畢、早々事也、
一、辰之刻集会、出仕成身院、大持院、延寿院、
五大院、華嚴院、東海院、

同廿二日

一、手馳りも無御座、尤持表り候鹿与者相見申不申、御門前二面

括り候或之察申候、仍而何若致事ニモ急々三種相分候間、

銘々相考へ所存之處申上便様申付候二付、粗々相考へ居候へ共

一、御寺務差出上書二通相認、五師中妙喜院、
宝月院院下案二面相談上相認要、
一、御寺務當願世尊院御事代成身院院

一、口上書左二、

一、去ル十九日夜當寺地明王院門前死鹿在之、

口上覽

一、去ル十九日夜當寺地明王院門前二おろて、死鹿

御付為致見分候候、右若女鹿ニ而百首よ前足ハ掛ケ

一、往後奉行所、差出口上書相認、當職世尊院

下院分體代成身院御領元洞同道二面、御寺務へ

向參殿、取次ヲ、右之通相認奉行所へ差出申度

旨申御願候下候様、賴入控へ居ル、口上書左二、

一、去ル十九日夜當寺地明王院門前二おろて、死鹿

口上覽

一、去ル十九日夜當寺地明王院門前二おろて、死鹿

御付為致見分候候、右若女鹿ニ而百首よ前足ハ掛ケ

一、御寺務差出上書二通相認、五師中妙喜院、

宝月院院下案二面相談上相認要、

一、御寺務當願世尊院御事代成身院院

一、口上書左二、

一、去ル十九日夜當寺地明王院門前二おろて、死鹿

口上覽

一、去ル十九日夜當寺地明王院門前二おろて、死鹿

御付為致見分候候、右若女鹿ニ而百首よ前足ハ掛ケ

(表紙)「嘉永二庚戌年『興福寺印』(采方印)」

六月十九日夜普提院方於明王院門前

突厥死鹿一件始終吉留

下屬分衆等」

嘉永二庚戌年 六月二十日

一、普提院々主實體照より使者二面 方圓明王院門前ニ

死鹿之候間 早々御取片付候付御願申来ル、

致承知候 無程見足差向候間 夫迄帝之處 其院より

被付候様 返旨申

一、戸上重行拍手重員見分ニ遣候處 見分口上書左二、

一、明王院様御門前少シ寄ニ、大女能尼定死鹿有之

一、綿ニ而右死鹿一首括り有之

一、前足兩足共脚而括り有之

一、右之監腹一突厥与思敷族武ヶ所 左之之監腹ニカスリ

一、此病八十日余ニも相成

統一ヶ所 右三ヶ所 有之候得共 此病八十日余ニも相成

二、綿ニ而右死鹿一頭而括り有之

一、前足兩足共脚而括り有之

一、右之監腹一突厥与思敷族武ヶ所 左之之監腹ニカスリ

一、此病八十日余ニも相成

一、右之監腹一突厥与思敷族武ヶ所 左之之監腹ニカスリ

一、此度於普提院方内明王院門前神鹿首井

持出シ候死鹿二相見へ疑ケ敷故 急速に町内より持出シ候哉

一、右之通口上書差出候置 尤死鹿者持出候二言上致

御一關所

世尊院様

戸上重行 印
拍手重員 印

同廿一日

一、拍手重員來ル 指へ居候様申付

一、死能之大弟不容易致方ニ付 開合半手今難相分リ 仍而

下屬分中集会御取狀出ス

一、午之刻統出席 不參阿弥陀院普度院

一、死能之大弟第一及被露候上 開合之處分り候まで

見合候故且又不取敢手取分ノ吟味可致哉 評定之

死能何時之往生不相分

其方仲間井二召使等ニ至ル時 遂吟味不候哉

死能何時殺害致在之禪之事故 開合セ者 其儘吟味之處

可然皆一決單

一、三方人井配下店之者江差紙道ス、

一、寺中味之袖書一通相認文左、

右之通申渡奉書半切二認候袖書二通トキ通ス、異り引取

一、此度於普提院方内明王院門前神鹿首井

前足ヲ括りシ 突厥を負死鹿存ニ 右者何者之

開合不候哉 分り次第申出候様申付ル 异り引取
一、毎後實里院院方内内死鹿者之矣 繙申付申付可付致候

得共 分り退氣之時分ニ候間 早々御取片付候様申付候故

死鹿ニ放障之筋御座候間 誰取懸り居候 相分候ニ次第

早々御取片付候 番之儀未取敢自是非人ニ申付

候様 戻守歟二申付候間 夫迄予者等ノ事候付候様入候

一、荒地小屋頭手ニ遣シ 開合七七箇 如何分り候哉

難分申之 精々開調今晚可申上候間 夫迄予者致候様

頗付開闢 願付開闢

一、死鹿之處 戻守又右衛門呼 遣申來候哉 不取敢死鹿

番いた候様申付 异り引取處所ニ奉り畢 亦音より前足ヘ掛ケ繩一面括り

一、初更比良人頭弁助ヘ來り開合之儀 明朝迄之猶子類出候 開道了。

一、死鹿之處 戻守又右衛門呼 遣申來候哉 不取敢死鹿

番いた候様申付 异り引取處所ニ奉り畢 亦音より前足ヘ掛ケ繩一面括り

一、未之冠過 神人怨代外都役南郵中務北都玩後

頗付開闢 願付開闢

一、未之冠過 神人怨代外都役南郵中務北都玩後

頗付開闢 願付開闢

一、去ル廿日既普提院方内明王院門前ニ於而 痘之死鹿有之

亦音より前足ヘ掛ケ繩一面括り

有之 何者之往生共不相分 其方仲間井召使

被官等ニ申出候様申渡ス 异り引取

一、戸上拍手兩人客候下席ヘ呼出シ 列座ニ而申渡ス

一、戸上拍手兩人客候下席ヘ呼出シ 列座ニ而申渡ス

一、去ル二十日既 普提院方内明王院門前ニ突厥之死鹿有之

首より前足ヘ掛ケ繩一面括り有之 何者之往生共不相分 其方仲間井二召使等ニ至ル時 遂吟味不候哉

明日午之刻迄二

仕業とも難相分間 駆々來来并留主居

等ニ至ル時 畏者無之哉 畏教候殊味不候哉

明午之刻迄三書付ヲ以一關所ヘ可被差定候

若不沙汰之儀 於有之者不及嚴重之浮太候 以上

六月廿一日 下屬分衆徒

右之通奉書半切ニ恐誤裏

二人罷出 則客殿下座ヘ呼出シ申渡

一、未之冠過 神人怨代外都役南郵中務北都玩後

兩人罷出 則客殿下座ヘ呼出シ申渡

右之通奉書半切ニ恐誤裏

一、去ル廿日既普提院方内明王院門前ニ突厥之死鹿有之

首より前足ヘ掛ケ繩一面括り有之 何者之往生共不相分 其方仲間井二召使等ニ至ル時 遂吟味不候哉

明日午之刻迄二

右之通奉書半切ニ恐誤裏

一、去ル二十日既 普提院方内明王院門前ニ突厥之死鹿有之

首より前足ヘ掛ケ繩一面括り有之 何者之往生共不相分 其方仲間井二召使等ニ至ル時 遂吟味不候哉

明日午之刻迄二

右之通奉書半切ニ恐誤裏

第一次大極殿復原基本設計

建造物研究室・庶務部会計課

昨年度から継続して進めている10分の1模型の設計・作製と平行して、今年度から復原の基本設計に着手した。同設計は今後継続して行うものとして、まず全体の設計内容を検討した上、今年度の設計項目を定め、設計を（財）文化財建造物保存技術協会に委託した。同協会は（財）建築研究協会の協力を得て、調査・実験等を京都大学・赤松純平助教授（地盤振動特性）、大阪市立大学・谷池義人教授並びに（財）日本建築総合試験所（耐風試験）、京都大学・西澤英和講師（耐震壁）に依頼した。

復原実施にあたっては、文化庁により設置された「大極殿復原構想検討会議」における報告『平城宮跡第一次大極殿の復原について（平成5年3月）』において、構造・意匠などに厳正な復原をめざすべきことがうたわれており、これを設計の指針としている。基本設計では構造と具体的な意匠の両面の検討が必要となるが、今年度は主として、復原原案の構成部材、重量等の算出による概略的な構造計算と、建築基準法に規定する諸条件にかかる調査・実験の一部を行ない、設計にあたっての基礎的データ及び基本方針の検討・策定のための資料を作成した。

1 基礎的調査・実験

地質・地盤調査 造構内の支障のない位置を選び、4カ所のボーリング調査と、2カ所の載荷試験を行ない、深さ約50メートルまでの地層状況を把握するとともに、地表面からの地耐力値を求めた。

地盤振動特性調査 奈良盆地周辺の地盤構造を概観して歴史的地震や断層から推定される奈良盆地の地震危険度評価とその問題点をあげたうえ、地質資料や重力異常のデータ、微動観測などから推定される奈良盆地の地盤構造とそれによる地盤振動特性を把握するための作業を行なった。

風洞実験 建物全体にかかる構造体に対する風荷重の測定と、建物各部にかかる外装材に対する風荷重の測定を、それぞれに適合した精密な模型を作成して風洞実験を行なった。

耐震壁の性能確認実験 朱雀門の復原において採用を検討している木造積層耐震壁からさらに施工性の向上をめざした耐震壁の改良を試みるため、新たな耐震壁案を検討のうえ、実物大による実験を行ない、その性能を確認した。新たな耐震壁案は、格子状に組んだ枠組に積層材を落とし込んだうえ、表面全面に木摺を打ちつけたものと、同じく格子の積層面外に鋼板をはめ込んだものの二種である。

2 構造設計（復原原案の構造面の検討）

復原原案から想定される検討要點の抽出 以下の諸点の検討が必要となった。造構に影響を及ぼさずに基壇を構築できるか。柱は原案の断面径で座屈のおそれはないか。地震・風圧に対し柱脚部はどうに挙動するか。軸部は柱相互の緊結がなく転倒しやすい。耐力壁は不足が明らかで抵抗要素が不足し、正面開放のため捻れやすい。大虹梁は軸部との関係が弱く、断面大で撓みやすいので、組物が内側へ転倒しやすい。組物は薬師寺式三手先であり、持出方向の緊結が不足しないか。軒廻り部材は、軒出に対して全般に断面が不足していないか。二重軸部は一重と柱心が一致せず問題はないか。

復原原案の概略的な構造計算 古代木造建築の特徴的な工法の踏襲を前提に、建築規模（主要寸法・各面積・各重量）を算出し、構造計算を行なった。その結果、軸部、組物、軒廻り、二重軸部、小屋組などに、上記で抽出した点が不十分であると判断されるに至った。

設計方針策定にあたっての問題点の整理 復原原案に何らかの補正措置を加える必要が生じたため、後世に発達した工法を加える方法、小屋組などに別構造体を新たに加える方法、一部に鉄骨などの近代工法を併用する方法、さらには免震構造の導入などを検討し、基本構造や細部について設計案を作成するとともに、諸案から基本方針となる構造体を策定するための問題点を整理した。（木村 勉）

姓の大工が足守藩の陣屋町に建てた乗興寺でしか判明しなかったが、郡村は地誌や藩史料によれば近世後期に400軒弱の住民の約3分1が大工とその関連職種で占められる特異な在郷町であった。したがってこの種の絵様は郡村大工のものとしてよいと思われる。ただし郡村は、在郷町の要素の強い在方であるから、これを町方大工と在方集住大工のいずれとしてよいか今後の検討課題である。

(4) うねり型若葉（写真4） 若葉全体が大きくうねる。市域東部の西大寺周辺に18世紀前・中期に限ってみえることから、(3)(5)(6)のいずれかの絵様の一時代的様相を示すと思われる。

(5) 艂久大工の絵様（写真5） 尾形・田淵の2つの棟梁家のものしか確認できなかったが、ほかの絵様と比べると単純で線が太い。尾形太郎左衛門末忠の妙広寺客殿（1753年）、尾形太郎左衛門末次らによる普門院本堂（1746年）、田淵市左衛門勝繁による明王寺観音堂（1786年）などが、その特徴をよく示している。脂久大工については他の棟梁家の絵様を確認する作業が残された。

(6) 翠吹き型若葉（写真6） 絵様全体に線が細く、若葉は大きくうねりながら芽状の突起をもつ。市域東部の古くから寺院が集まる地域にあり、浄土寺本堂（1704年）、長楽寺本堂（1750年）、無量寿院如法寺本堂（1768年）の調査で近在の村に住む徳田・尾野姓の大工作と判明する。地理的には脂久大工系の在方集住大工とも考えうるが、同じ絵様が(1)か(3)の作と思われる妙林寺仁王門（1754年）にもみえるので町方大工との関係も窺える。この大工集団の性格解明は今後の課題である。

(7) 村大工の絵様（写真7） 近世前半期の村大工の作は、市域北部の山間地帯に残る脇野八幡宮本殿（1669年）や天神社本殿（1700年前後）しかないが、絵様は稚拙さが目立つ。ところが18世紀後期以後、彫り方も従来と異なる新奇な絵様が1次調査物件の多くを占めるようになる。この種の絵様は数の上から村大工の作かと思われるが、今回の調査では十分に把握するには至らなかった。

(8) サヤエンドウ型若葉（写真8） 若葉部分にサヤエンドウに似た突起がある。17世紀には広くみえるが、18世紀以降になると市域北部や西部に限られる。市北方の建部の大工である藤井又太夫の建てた幸福寺本堂（1732年）のように、建部や美作あるいは備中の大工が用いた絵様と思われる。

(9) 木津大工の絵様（写真9） 妙教寺靈応殿で赤穂藩木津村の在方集大工棟梁野村家の絵様をみるとができる。市内には類例のないものである。

このほか報告書には、1・2次調査物件すべての絵様を含めた写真と解説を載せ、脂久大工の詳細な歴史と市域の近世瓦の編年と生産地比定を行った論考も掲載している。
（藤田豊児）

4 無量寿院如法寺 仁王門（1721年）

5 普門院本堂（1746年）

6 長樂寺本堂（1750年）

7 脇野八幡宮本殿（1669年）

8 幸福寺本堂（1732年）

9 妙教寺靈応殿（1741年）

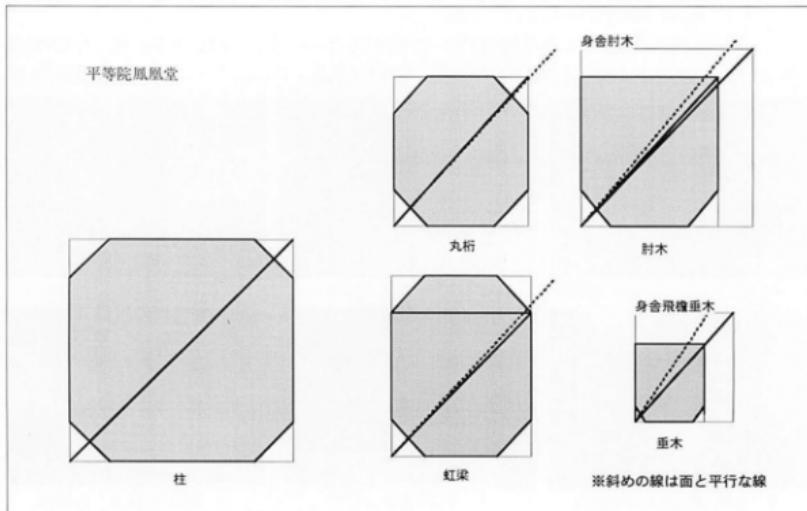
古代建築における部材の面取について

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

はじめに 現在、平城宮跡において朱雀門をはじめとする復原整備事業が実施されている。これら事業の最初の段階において復原図の作成というプロセスがある。周知のように発掘調査により得られる復原資料は非常に限られたものであるため、復原図作成においては同時代の建築造構の類例調査が重要な位置を占める。しかし、当然のことながら同じ用途、規模、構造形式の建物は存在せず、建築造構を分析することによって当時における設計意図等を探り出し、当該建物に応用することとなる。この作業の一端については1996年1月13日に開催された1995年度奈良国立文化財研究所総合研究会において「平城宮東院正殿復原における類例調査」と題し発表した。本稿では平城宮東院正殿の復原整備に関連して行った古代建築の面取り手法について研究成果の概要を報告する。

面取り手法のみられる古代建築と面取り部材 現存する木造の古代建築は64棟を数える。そのうち材に面を取った建物は、榮山寺八角堂（天平宝字・奈良時代）、平等院鳳凰堂（天喜元年・1053）、鶴林寺大師堂（天永三年・1112）、宇治上神社本殿（平安後期）、三仏寺投入堂（平安後期）にみられる。いずれも建物全体にみられるのではなく、建物の一部分に面取りされている。つまり榮山寺八角堂は虹梁、平等院鳳凰堂はもこし部分の材、鶴林寺大師堂・宇治上神社本殿・三仏寺投入堂は庇部分の材に面取りされている。榮山寺を除けば、他はすべてもこし、庇といった建物の中心部分ではなく付属的な所の部材に面が取られている。部材的には、柱、虹梁、肘木、丸桁、垂木に面が取られる。

面取りの手法 下に平等院鳳凰堂と宇治上神社本殿中殿の面が取られた部材の断面図を示した。網掛け部分が断面で、細線の四角形は面を取る前の部材の断面を示す。また、補助線として、面取りの角度と平行な線を破線、面取り前の材の断面（両建物の虹梁及び宇治上神社本殿中殿の垂木においては上部の面を除外した四角形）の対角線を実線で表した。平等院鳳凰堂においては柱、肘木、丸桁は、面の角度が面取り前の四角形の対角線とはほぼ一致する。虹梁は、面の角度が上部の面部分を除いた四

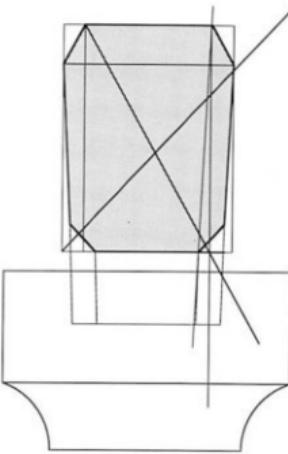


角形の断面の対角線とはほぼ一致する。垂木については、面の角度と対角線の角度は一致せず、どういう法則で面の角度が決まったのかは不明である。宇治上神社本殿中殿においては、柱、丸桁は、面の角度が対角線とはほぼ一致する。虹梁の面は、平等院と同様上部の面を除いた断面の対角線とはほぼ一致する。垂木は平等院とは異なり、上部にも面を取る。面の角度は虹梁と同様な取り方をしている。

栄山寺八角堂の虹梁は平等院鳳凰堂や宇治上神社本殿中殿のものとは形状が異なり、上部ほど太くなり、上と下の面の角度も異なる。斜めの線は、右上がりの斜線が下の面の角度と平行、左上がりの斜線が上の面の角度と平行な線である。結論からいえば、下の面は平等院や宇治上神社の虹梁と同様に上の面の部分を除いた四角形の断面の対角線とはほぼ同じ角度である。上の面は上の面の左右の部分を除いた断面の対角線とはほぼ同じ角度である。

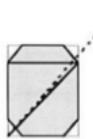
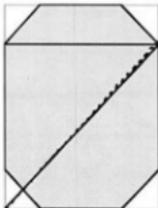
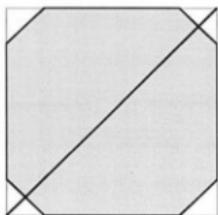
まとめ 資料の関係上、面をもつすべての建物について考察することはできなかったが、次のことがいえそうである。面の角度はその材の断面の対角線と同じとする。但し、虹梁においては上部の面を除いた断面の対角線と平行とする。同時代の面を取らない虹梁においては、上面は平らでなく上に膨らみをもつが、面取りの虹梁における上部の面はこの膨らみを表しているのではないだろうか。この意味で面の角度を決めるのに上の面の部分を除いたものと思われる。垂木においては上部に面を取るものと取らないものがある。上部に面をもつ宇治上神社本殿中殿においては虹梁と同じように上の面の部分を除いた断面の対角線を面の角度としている。

(村田健一)



栄山寺八角堂虹梁

宇治上神社本殿中殿



※斜めの線は面と平行な線

中国黒龍江省における朝鮮族住居・集落の調査

建造物研究室

鏡泊湖と朝鮮族 吉林省の牡丹嶺に水源を発する牡丹江は、いちど溶岩台地の谷間にせきとめられ、そこから再び北流して松花江に合流する。その溶岩台地の谷間にできた湖は、水面が鏡のように美しいので、「鏡泊湖」とよばれる。この湖名は満州語のビルトンを漢語訳したものという。

鏡泊湖から北東へ10kmほどのところに、渤海という小さな鎮がある。いうまでもなく、あの渤海國の渤海で、その近郊には有名な上京龍泉府の宮殿遺跡もある。平城京の從兄弟のようにして栄えた渤海國の都であり、渤海以後も、女真や満州族などのツングース系の人びとが、この地に勢力をほこった。ところが、近年では朝鮮族の人口もすいぶん増えてきている。清朝は当初、漢族をはじめとする一切の異民族の東北三省入植を厳禁していたが、嘉慶年間[1796-1820]あたりから、確かに越境する朝鮮人が増えてきた。中国に越境し開墾する朝鮮人は、はじめ「朝耕暮帰」とか「春来秋去」とよばれる漂泊的な耕作民だったが、しだいに長期的な居留者に変わり、事実上の入植が進行した。とくに同治八年[1869]の大飢饉によって、李氏朝鮮北部の人びとが大挙して豆満江をわたり、吉林東南部へ移住した。これより先、禁令を破って中国へ逃れる朝鮮族は数れず、日韓併合時代から朝鮮民主主義人民共和国成立後も増加の一途をたどり、入植の足跡は黒龍江や遼寧にまでおよんでいる。現在、朝鮮族の総人口は約200万人という。

瀑布村の成立と構成 鏡泊湖の周辺に住む人びとも、大多數が朝鮮族である。わたしたちが調査したのは、「吊水樓」という瀑布の落水をうける渓谷に営まれた村落であった。その名も瀑布村。行政的には寧安市に属する。朝鮮半島の出身地はさまざまだが、ある老人は、1920年代に忠清北道堤川郡白雲面龍洞里からやってきたと語った。かれらの最初の移民生は、吉林省境により近い鹿道という村であった。文化大革命直前の60年代前半になって、寧安政府は、鏡泊湖方面の開拓を奨励し、鹿道村から瀑布村への移住が進められた。70年代にはいると、牡丹江の水力発電事業がはじまり、村内3ヶ所に発電所が建設された。しかし、かえって灌漑用水の不足をまねき、瀑布村から鹿道村へ逆もどりする一家も増え、人口は減っていたという。近年は、鏡泊湖の開放とともに観光業の発展により、村は再び活気をとりもどしつつある。このように瀑布村は、成立年代の新しい朝鮮族の村落である。しかし、その住居は、寧安市の他の朝鮮族村落と比較しても、圧倒的に古式をとどめており、台地上から眺める集落の全景は、瀑布や渓谷の風景とあいまって美しい。また、丸屋根の草葺き民家は、すでに韓国でもほとんどみられなくなっている。

瀑布村（二道村）の民家群。寄棟風の九屋根と直線切妻屋根が共存している。

（二道村）の屋根伏図

瀑布村は3つの小地区に分かれており、調査した集落区域はかつて二道村とよばれた。渓谷の西側斜面に33軒の住居（P₀₁～P₃₃）と材木小屋（P₃₄）1棟、機械小屋（P₃₅）1棟が一見ばらばらに配置されている。しかし、集落の中央を南西から北東へ流れる小川の両岸で、家屋の配列は異なった規則性を示す。すなわち南東側では、東西棟を主屋とする屋敷が整然とならぶ一帯が中心にあり、計画的な建物配置をみせるのに対し、北西側では等高線に即した自然発生集落風の配列が認められる。なお、集落の東を限るのはダムであり、北端にはレンガ造の水力発電所も建設されている。

瀑布村の民家 上に示した35の木造建造物およびその付属舎は、すべてが草葺きである。草葺きにも、切妻造直線型屋根と寄棟風むくり屋根の2種類がある。葺材はヨモギがいちばん良いが、ほかにもアシや羊草を使う。ここでは、ベースを示した金成男氏宅（P₀₈）を例にとってみよう。P₀₈は寄棟造・大壁構造の平屋建物で、1960年代に建造された。金氏一家は鹿道からの入植者だが、もともとこの家に住んでいたわけではない。2年前まで台地上に新居をかまえていたのだが、それを売却すると同時に、P₀₈を借家として住むようになった。一家は30代の夫婦と子供3人の5人暮らしだ。主屋は寄棟造の典型的な2室タイプで、2つの部屋を3枚引戸で間仕切りしている。西側の部屋は、竈をはさんで土間とオンドル部分にわかかれている。竈まわりの土間をとくにブロック（釜屋）とよぶこともある。竈の焚口部分は、土間が一段低く、堅穴のようになっている。この場所をボーグンという。竈には羽釜をのせる穴が3つあけてあり、そのうち1つにだけ羽釜が据えられ、他の2つの穴は釜の蓋をひっくりかえしてふさいでいた。夏に竈の火を焼くことはほとんどない。オンドルが熱くなるからである。かつて夏には、庭の外竈で炊事することが多かった。今では、電気炊飯器や電熱器が普及しており、もっぱらそれらで調理する。この部屋のオンドル部分は、チョンジーもしくはアレパンという。ここにちゃぶ台をだして食事する。食事のないとき、ちゃぶ台は畳んで壁にたてかけておく。夜は寝室にもなる。引戸をへだてた奥のオンドル部屋は、ウバンという。この奥の部屋は寝室で、タンスや机をおいている。チョンジーとウバンの前面には、幅1mほどの土間の通路がとおる。本来オンドルとは、部屋全体をあたためる床暖房装置であり、このような通路を屋内に設けることはなかった。近年、オンドルを造りかえるさい、従来のオンドルを約1m切り縮めて通路とする傾向がみられるのは、おそらく部屋の一部の床を暖房する漢族や満州族の炕の影響があるのだろう。

堅穴住居から発展した朝鮮族の民家は、まずブロックとオンドルが「一体化した1室型平面から出発したもの」と推定される。瀑布村の民家は、この原初的平面にウバンを加えた2室型で、やはり朝鮮族住居の祖型にちかいものとみてよかろう。朝鮮半島では、瀑布村よりも発展した平面の民家が多いよ

うだが、咸鏡道や平安道には類似する平面をもつ民家も存在するようであり、今後はより広域的視野から瀑布村民家の系譜を考えていきたい。なお、本調査は芸術文化振興基金助成の「伝統的文化財技術の調査研究」の一環としておこなったものであり、奈文研からは村田健一と浅川が参加し、これを楊昌鳴（天津大学）、栗原伸治（同）、坂田昌平（京大大学院）が補佐した。（浅川滋男）

滋賀県近世民家調査（1）

建造物研究室

平成7年度から3カ年の計画で滋賀県近世民家調査を行なっている。滋賀県の近世民家については、先に昭和41～43年の「滋賀県緊急民家調査」（滋賀県教育委員会）があるが、主に近世中期までの民家を対象とした調査であり、近世末期、あるいは近世民家を継承したと考えられる近代初頭の建物までは取り上げられていない。また、近年の都市化の進行や生活様式の変化により、滋賀県でも近世の民家遺構は急速に減少してきている。このような状況を踏まえ、全県下での調査が企画された。

調査の主体は滋賀県教育委員会で、調査委員会は奈良国立文化財研究所建造物研究室を中心として、窓谷誠一（滋賀県立短期大学教授）、吉見静子（岐阜女子大学教授）、山岸常人（神戸芸術工科大学助教授）の各氏を迎えて構成された。また調査委員長は建造物研究室長がこれにあたる。

平成7年度は、まず県下各市町村によって一次調査（所在調査）が実施され、50市町村で805件、2095棟の民家遺構がリストアップされた。これをもとに、調査委員会において二次調査（詳細調査）対象を選出した。二次調査は全県で160件程度を対象とする予定であるが、本年度はこのうち、13町の50件63棟について、基本調査の作成、史料収集、聞き取り、平面実測、断面実測、敷地内配置、写真撮影などの詳細調査を実施した。

第1回二次調査は、平成7年10月30日から11月2日の日程で、県北東部の北国街道に沿った余呉町・木之本町・びわ町・高月町の4町を対象地域として実施した。調査件数は20件の21棟である。山間部の中小規模農家や湖畔地域の大型農家、北国街道沿いの宿場町での本陣の遺構などを調査した。近接地域ではあっても、地勢などの条件の相違は民家の形態に大きな影響を与えていたことが確認された。また福井県境地域では、平面構成や構造形式において北陸地方との交流関係を裏付ける遺構を見ることもできた。

第2回二次調査は平成8年1月29日から2月2日の日程で、県南東部の旧東海道に沿った竜王町・野洲町・栗東町・石部町・甲西町・水口町・甲賀町・甲南町・土山町の9町を対象地域として実施した。調査件数は30件の42棟である。旧東海道沿いの町屋や旅籠、野洲川両岸の田園地帯における中規模農家に加え、甲賀地方の在地の武家住宅などを調査することができた。近年の生活様式の変化とともにあって改造をうける民家が多いなかで、往時の姿をよくとどめる遺構も確認することができた。

詳細調査は平成8・9年度も継続し、平成9年度末に報告書を刊行する予定である。（長尾 充）

飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

特別展示「古代の形」—飛鳥・藤原の文様を追う— 時代や地域の広がりを超えて伝えられ使われ続けた種々の文様は、文化の精神的背景を物語る手がかりであり、また文明の継承を証言する標識ともなっている。具体的な遺物とは異なる意味合いで、文様の体系そのものが貴重な人類の文化遺産だということもできるだろう。飛鳥資料館の春の特別展示では、飛鳥・藤原宮の時代の装飾意匠をテーマとして、はるか地中海文明に起源を持つ文様、中国の神話から生まれた描写、日本列島在来の意匠が、わが国最初の都の地でどのような形をとって総合されていくのか、それがその後の日本人の造形意識にどうかかわっていくのかを考えるまでの資料を提供しようと試みた。実際の展示は蓮華文、唐草文そして動物意匠の三種類の文様を中心として構成した。蓮華文は7世紀の瓦類を主体として、仏像、飾り金具、石棺や石灯籠などの石造物にこなされた文様の系列を整理し、唐草文では瓦類のほかに鏡類や銀製容器類など当時外国から日本にもたらされた遺物の紹介もおこなった。動物意匠については、月に住む兎、守護獸としての獅子、あるいは虎や空想上の龍や鳳凰など、現在でも日本人の生活になじみの深い動物たちの絵姿が、わが国に渡ってきた一番はじめのころの形と、それがどのように使われていたのかをまとめている。動物意匠の展示では玉虫獅子、法華説相図銅版の複製品のほか、さまざまな遺物の部分拡大写真を使った。なおこの特別展は橿原市が中心となって実施した藤原京創都1300年記念事業に協賛する企画もあり、展示期間も記念事業にあわせて実施した。

特別展示「蘇我三代」飛鳥時代前半の、大和朝廷の政治・対外・文化事業を考えるとき蘇我本宗家の馬子、蝦夷、入鹿の果たした役割はこの上なく大きなものだったと言わざるを得ない。渡来系の諸部族を支配下において、そのすばらしい技術力を道具としてしっかりとした国家支配の骨組みを確立したこと。外国との太い情報交換のパイプをもって精力的に新しい文化を取り入れたこと。蘇我氏が深く関わった多くの政策が、その後の古代国家のたどった歴史の方向に決定的な影響を与えたことは間違いないだろう。資料館秋の特別展では、蘇我本宗家が政治の中枢にいた飛鳥時代の前半、馬子の登場から乙巳の変、いわゆる「大化改新」までの時期の幾つかの遺跡をとりあげて、蘇我氏や渡来人のさまざまな動向を考古学的な観点から検討した。文献資料に生き生きと書きとどめられている蘇我氏の活躍の場は、当時の都、飛鳥を中心とした地域に数多くの遺跡として残されている。なかには飛鳥寺のように発掘調査によって往時のありさまが詳しく解明された例もあるが、飛鳥豊浦宮から飛鳥板蓋宮にいたるまでの諸宮殿のように、まだ充分な調査の手がおよんでいないものも多い。古墳については、馬子の墓と伝えられる石舞台古墳、蝦夷・入鹿が葬られたといわれる水泥古墳、あるいは蘇我一族の集団墓だった可能性もある新沢千塚古墳群や細川谷古墳群、さらには赤阪天王山古墳、見瀬丸山古墳、大阪府磯長谷の用明陵、推古陵など蘇我氏と関係の深い大王陵を紹介。邸宅については明日香村島庄の遺跡、甘樅丘東麓遺跡の発掘の成果などを手がかりとして当時の豪族の住居を考察。寺院では飛鳥寺、豊浦寺を中心に蘇我氏と仏教や外来文化の関係をふりかえった。今回の特別展を機会に、これら飛鳥地域および磯長谷に散在する蘇我氏関連の遺跡について、展示説明のパネルを作成すること、また今後の研究の資料として使用することを目的として系統的に航空写真的撮影をおこなった。さらに石舞台古墳については墳丘を想定した1/50の立体模型を製作して往時の姿の復原試案を示した。今回の復原では墳丘は2段築成、上部を円形とした。また橿原市宗我坐宗我都比古神社など、この地域に残る蘇我氏ゆかりの地の紹介もおこなった。

(岩本圭輔)

年輪年代学 (13)

埋蔵文化財センター

狹山池木樋の年輪年代

大阪府大阪狭山市にある狹山池は、日本最古で最大の溜池である。狹山池の名は『古事記』や『日本書紀』にも登場し、その築造は五世紀ごろのこととして記されている。狹山池は東西の段丘の間を流れる旧天野川を塞ぎ止め溜池としていたもので、堤の長さは500m、高さ15mの巨大なものである。狹山池は、築造後幾度となく災害にあり、その都度大改修がおこなわれてきた。なかでも奈良時代の名僧行基によっておこなわれた改修はもっとも有名である。平成元年以降、実施されてきたダム化工事に伴って、狹山池調査事務所（大阪府土木部、大阪狭山市教育委員会など）が本格的な発掘調査をおこなった結果、多くの新事実が明らかになった。

狹山池の発掘調査では、北堤付近において中樋造構、西樋造構、東樋造構の3つの樋の遺構が検出された。中樋造構では、大正時代まで使用されていた尺八樋の最下段が出土した。これは慶長13年(1608)に片桐且元が改修した際に設置されたものである。西樋造構は、中樋同様に慶長の改修の際に設置されたものであり、構造船の廃材が大量に転用されていた。東樋造構は、もっとも東で発見された遺構で長さ70m以上の樋が上下2層になってそのまま残っていた。下層の樋は築造当初のもの、上層の樋はやはり慶長の改修で設置されたものである。

上記3つの樋のうち、東樋と中樋に使われていた部材の年輪年代法による年代測定をおこなったので、以下にその概略について報告する。

東樋造構 東樋下層の樋管は、コウヤマキの丸太材（直径60cm）の内側をU字状に割り貫いたもので、総数9本の樋管を連続していた。東樋下層造構の池側（取水部）においては築造当初の樋の先端部を切断し、補修がおこなわれていた。年代測定用の試料はコウヤマキの樋管のなかで一部に未加工部分が残っていたものが5本あり、それぞれ直径5mmの棒状標本を採取した。池側のヒノキの補修材からは辺材部が完存していたもの1点、辺材部が2.2cm（普通、ヒノキの平均辺材幅は3cm）残っていたもの1点を選定、総数7試料を採取した。これらの年輪年代は樋管5本の伐採年がいずれも616年(推古24)、補修材2点のうちの1点の伐採年は817年、残る1点の年輪年代は726年と確定した。

以上をまとめると、下層の樋管には616年に伐採された木が使われていたことから、狹山池の築造は五世紀代ではなく七世紀前半であることが確実となった。このことから、五世紀代の河内平野の大開発と結びつけてきた見方は、否定された。また池側の補修材の一点は、行基が天平3年(731)に大改修した際に使われた材とみてよかろう。もう一点の伐採年からは、記録にはないが9世紀の前年にも改修のあったことが明らかになった。

一方、東樋上層造構は下層造構の直上にあって、おもにヒノキの厚い板材を箱形に組み合せた構造となっていた。この樋の長さは73mあり、取水部、樋管、排水部ともすべて残存していた。年代測定用の試料は、ヒノキの蓋材のなかで辺材部が完存していたもの2点を選定した。これら2点の伐採年は、1554年、1600年と確定した。伐採年は異なっているが、いずれも慶長13年の改修の時に使われた材とみてよかろう。ちなみに上下2層の年代差は約1000年、築造当初の樋本体が長年壊れることなく機能していたことになり、当時の土木技術の水準の高さをうかがい知ることができる。

中樋造構 この造構では、護岸に伴う部材1点の年代測定をおこなった。材種はヒノキで辺材部は全く残っていないかった。この年輪年代は1566年と確定、これに削除された年輪層数を加算することを考えると、これまた慶長13年の時の改修材とみてよかろう。

(光谷拓実)

動物遺存体の調査 (12)

埋蔵文化財センター

本年度は、島根県出雲市教育委員会の行った奈良時代から平安時代末にかけての上長浜貝塚と、千葉県君津都市文化財センターの行った古墳時代から中世にかけての郡遺跡の資料の分析を行った。

上長浜貝塚は、「出雲國風土記」に記された「神門水海（かむどのみずうみ）」と日本海との間の砂丘地に立地し、砂丘の急速な成長のために廃絶した。貝層は厚いところで2メートルにもおよび、厚い純貝層と灰、炭化物、混貝土層からなる。貝類種は現在では見ることのできない殻長4センチ以上のヤマトシジミが99パーセント以上をしめる。発掘後市教委において採取した貝層を水洗選別し、動物遺存体の採取を行い、埋蔵文化財センターにおいてその同定、集計を行ってきた。採集した魚骨は65,000点におよぶが、哺乳類は100点にしか過ぎない。哺乳類は、ニホンジカ、イノシシが大部分で、ウマ、ウシの出土は見られない。魚類は、サメ類のように表層を泳ぐもの、コショウダイ、マダイ、クロダイなど岩礁性の外湾部を好むもの、コチのように砂泥性を好むもの。コイ、ウグイ、ナマズなど淡水域に棲むものに分類でき、人々が神戸水海、砂丘の外の外海、島根半島の磯、沖合いに漁労域を持っていたことを示す。土壤水洗の過程で炭化米、ムギ、マメ類も採集しており、種子の同定を継続している。古代・中世の貝塚の調査は珍しく、非農耕漁労民の生活の実相の一端に迫ることができた（出雲市教育委員会『上長浜貝塚』1996）。

君津市郡遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、特に古墳時代の須恵国造に連なると考えられる豪族居館跡と、その後身の官衙的建築群、河川跡が発掘されている。動物遺存体の大部分は5世紀後葉から8世紀後葉と8世紀前葉から9世紀前半にかけての河川跡から出土した。出土した動物遺存体は、ウマ、ウシ、イヌ、ニホンジカとネズミザメ科の椎骨の垂飾品、大型のフグ類の歯板などであった（君津都市文化財センター『郡遺跡群発掘調査報告書II』1996）。5世紀末から7世紀前半の河川（SD469）から出土した2点のト骨のうち、1点は、ウシの肋骨の幅広い部分を表裏に半載し、内側の海綿状組織に10×5mmの方形の彫り込み、縁を連続して穿ち、そこに火箸を押しつけて生じる穴やひび割れの形状により占うものである。

ト骨は、中国においては元来、ウミガメの甲を用いるが、弥生時代になって日本に伝わって以来、素材の入手の困難性によるものか、イノシシ、ニホンジカの肩甲骨が多く、5世紀以降は、ウシまたはウマの肋骨を利用することも行われた。

弥生時代のト骨が直接、火箸を当てるのに対して、古墳時代のト骨は、縁を穿つ方法にかわる。ウシとウマの肋骨は断定では同定が困難であるが、幅広いウシのほうがト骨には向いていることから、他の例もウシの肋骨を素材に可能性が高い。

藤原調査部で行った7世紀中頃の山田寺造営時の整地土からも同様のト骨が出土しており、海綿質の特徴からこれもウシの肋骨を用いた可能性が高い。このようなト骨は、時代は降るが伊場遺跡では奈良時代前期、多賀城の第61次調査では9世紀後半の溝から出土しており、古代律令祭祀の中にも引き続き採用されたことがわかる。

- 1
1・2 郡遺跡出土のト骨
(2は同一個体)
3 山田寺下層出土のト骨

(松井 章)

赤外分光分析(FT-IR法)による出土有機質遺物の同定

埋蔵文化財センター

近年、国内各地での考古学的発掘調査の件数が急増し、それに伴う出土遺物の種類も極めて多様化している。各種遺物の材質を同定することは重要な課題の一つであるが、金属製品、陶磁器などに比べると、繊維、紙、漆、皮革などの有機質遺物は一般に劣化が著しく進行し、遺物全体の形態を推定できにくく断片化していることが多い。

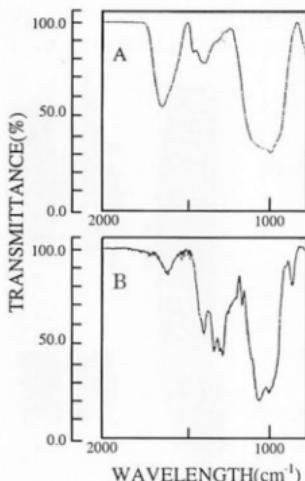
従来、このような状態の有機質遺物の同定は困難で、労力と時間を必要とした。しかし、最近、顕微専用のフーリエ変換型赤外分光光度計(FT-IR法)の発達により、極めて微量の試料(数ミリグラム以下)を採取するだけで、短時間内に必要十分な知見が得られるようになってきた。従来、有機物質の同定には、かなりの試料採取を必要としていたことを考えると、非破壊分析の理想に近付いたといえる。

上に述べたように出土有機質遺物は常にある程度劣化しており、赤外スペクトル解析に際しては、肉眼、光学顕微鏡あるいは走査電子顕微鏡による微細形態の観察などの結果と総合して考察しなくてはならない。例えば、試料Aは栗山遺跡(福岡県甘木市、弥生時代中期前半)出土繊維のスペクトルである。これは一見現代の苧麻、あるいは「こうぞ」のスペクトルに類似しているように見える。しかし、他の多くの出土繊維例との比較から、劣化状況の極めて著しい紺であると判断される。紺を構成する蛋白質分子に特有の吸収である $1680\text{--}1630\text{cm}^{-1}$ のアミドIおよび $1570\text{--}1515\text{cm}^{-1}$ のアミドIIの吸収ピークが他の吸収ピークより強いのが特徴であるが、紺の劣化が進行するに従って両方とも強度が減少し、特にアミドIIの吸収ピークは消失してしまう。さらに 1000cm^{-1} 付近の吸収強度が大きくなる。また図Bは江戸時代の銅製品の表面に付着する紙のような外見の繊維である。「みつまた」と「こうぞ」はスペクトルがほとんど同一で赤外分析で判定できないが、Bのスペクトルはむしろ苧麻との類似性が高い。紙繊維の呈色反応(C試薬による)では苧麻とこうぞの中間的な赤紫色を呈し現段階では判定できず、光学顕微鏡による繊維断面形状などの確認がさらに必要である。

以上の実例からも明らかなように出土遺物は常に各種の遺存環境化での劣化分解を起しているため、基準として比較すべき現代産の有機物質のスペクトルとは著しく異なったスペクトルを呈する。多数の標準化学物質のスペクトルを集め成したサトラーの赤外ライブライアリーや装置に付属しているが、考古学的用途の検索には全く適していない。

現在、本研究室では国内外の考古学出土遺物の各種の材質のスペクトルを多数測定して、そのデータを蓄積しており、近い機会に考古学用赤外ライブライアリーアとして整備し、全国の研究者からの検索要望に答えられるよう準備を進めている。

(佐藤昌憲・肥塚隆保・高妻洋成)



出土遺物の顕微赤外スペクトル

出土木材の劣化と収縮挙動

埋蔵文化財センター

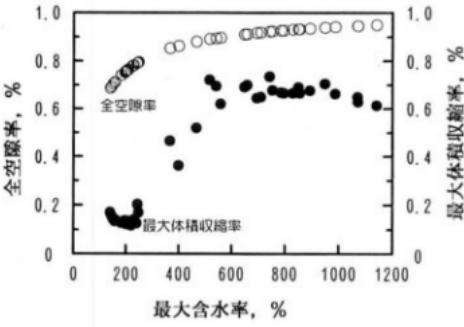
出土木材が乾燥により著しく収縮・変形することはすでに広く知られていることであり、この収縮・変形を抑えつつ、いかにして脱水・乾燥を行うかが、保存処理の第一の課題である。出土木材に限らず、一般に文化財を保存処理するに際して、理想的には、1)劣化状態を十分に把握した後、2)その資料に最適の処理法を選択・実施し、3)処理後の保管を適切に行う、というプロセスをとる必要があろう。これまで、出土木材を保存するためのいくつかの有効な方法が開発されてきたが、1)の劣化状態を把握する方法については、十分な方法が確立されていない。現段階で行われている一般的な方法は、最大含水率を測定する方法である。しかしながら、同程度の最大含水率であっても樹種によってその収縮挙動が異なるため、一義的に劣化の程度を判定することは困難である。したがって、出土木材の保存処理をより効率よく、しかもより良好に行うためには、様々な劣化状態にある多くの出土木材の性質についてさらに基礎的な研究を進め、劣化状態の把握が十分可能となるようなデータを蓄積していく必要がある。このような観点から、その手始めとして、出土木材の収縮挙動が、劣化程度に応じてどのような変化を示すのかを、空隙量の増加と関連させて検討した。

出土木材の乾燥による著しい収縮は、材中から水が拡散蒸発していく際、水の表面張力に対して細胞壁が抗しきれず、落ち込みといわれる変形を生じることによる。細胞壁の脆弱化は、細胞壁を構成している成分の分解溶脱にともなうものである。成分が溶脱したところは空隙となり、水が浸入しているため、落ち込みといわれる異常な変形量の増加は、木材中の空隙量の増加に依存するものといえる。したがって、出土木材の収縮は、木材中において空隙がある程度増加した時点で、一気に増大することが予想される。

平城宮跡から出土した広葉樹環孔材であるケンボナシについて実験を行ったところ、図に示すような結果を得た。この図では、最大含水率を一応の劣化の尺度と考えて横軸にとってある。全空隙率(出土木材単位体積あたりの空隙量の割合)は、劣化の程度が大きくなる、すなわち最大含水率が高くなるにしたがい、増大していく。一方、体積収縮率についてみてみると、最大含水率が200%程度までは、現生材と同様の収縮挙動を示しているが、この領域を越えた含水率域では、急激な体積収縮率の増大を明瞭に認めることができる。これは、ケンボナシの場合、最大含水率が200%程度までは細胞壁の落ち込みを生じないが、この領域を越えるあたりで水の表面張力に細胞壁が抗しきれなくなり、落ち込みを生じ始め、収縮量が一気に増大するものと考えることができる。

これらの情報は、出土木材を保存処理する際に、最大含水率を測定することで、その材の収縮挙動の推測、処理法の選択などに、有効なものとなる。今回は、試みとして広葉樹環孔材のケンボナシに対するデータを得ることができたが、今後、対象樹種を広げ、保存処理に関する基礎的なデータの蓄積の一環として、取り組んでいく予定である。

(高妻洋成・沢田正昭)



空隙率と収縮率の増加

石材同定のための基礎資料の作成 (2)

—平城宮跡およびその近辺地域—

埋蔵文化財センター

前回は飛鳥・藤原京とその近辺地域の出土石材について調査し、資料の作製を行った。今回はさらに平城宮跡およびその近辺地域について整理したのでその概要を報告する。

遺跡から出土する石材、特に構造に伴う石材の同定は從来から肉眼的手法で行われている。この基礎資料は肉眼観察に併せて、さらにその特徴を正確に把握するため偏光顕微鏡資料を作製し、風化試料等についてはX線回折法によりその詳細を記載している。

偏光顕微鏡観察用試料薄片の製作は石材をダイヤモンドカッターで切断した後、イソシアネート系合成樹脂で固化してから自動研磨してプレパラートに張り付け薄片試料とした。

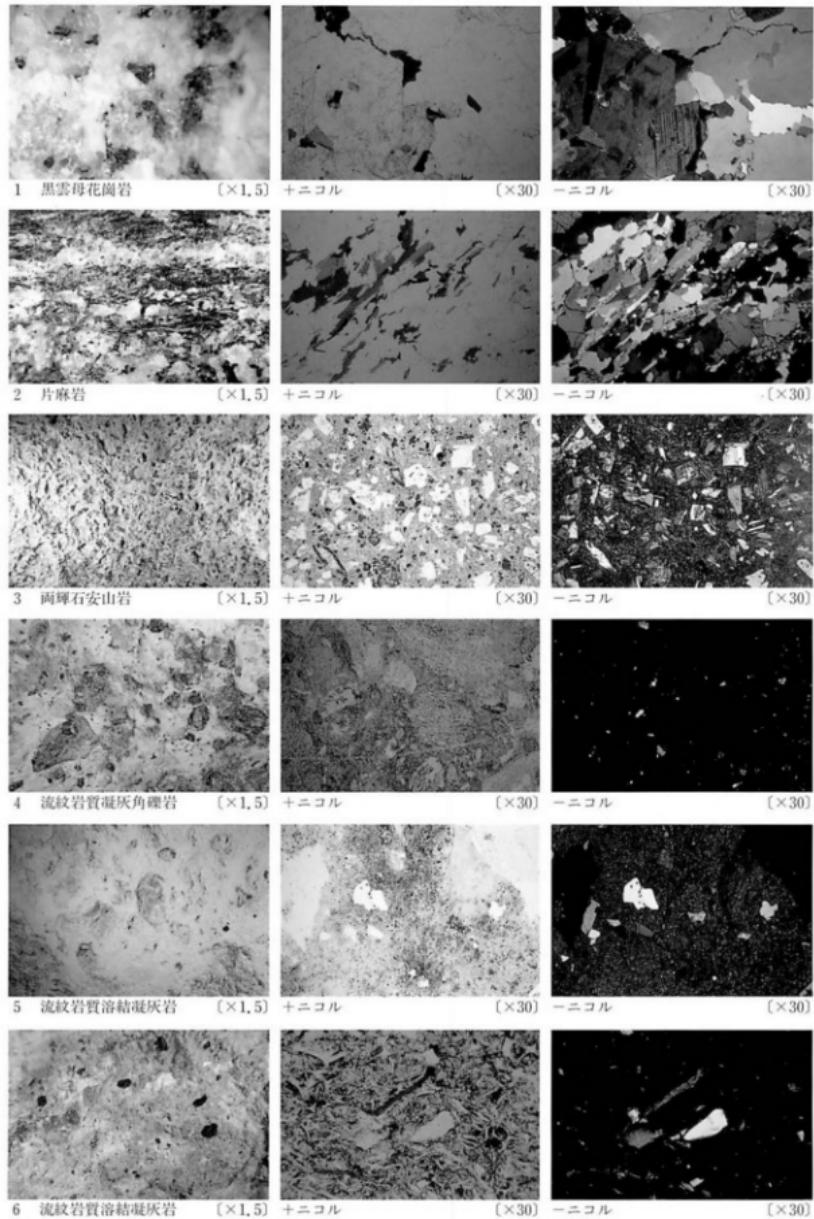
解説：平城宮跡から出土する石材の種類は多くない。礎石は基本的に、領家花崗岩類が多く使用されている。主なものは黒雲母花崗岩、両雲母花崗岩、アブライト質花崗岩、ベグマタイト質花崗岩、石英閃綠岩、花崗閃綠岩、黒雲母片麻岩などである。花崗岩類の多くは、奈良市東部の地獄谷周辺に分布するものに酷似する。閃綠岩類の大半は塩基性シュリーレンを含んでおり、藤原京およびその近辺で多量に出土するものと同じ特徴をもっている（年報1994参照）。この特徴を有する閃綠岩は薬師寺、恭仁京大極殿跡などの礎石にも見られ竜門山地に分布するものと考えられる。これらの領家花崗岩類で平城宮近辺から出土する岩石の多くは風化が進んでいるものは小数であるが、片麻岩やベグマタイト質花崗岩の一部のものは鉛物間の結合力が失われて砂礫状になっているものも見られる。しかし、これらの岩石の最大含水率は5%にも満たない。礎石などの建築部材以外には庭園の景石として片麻岩やベグマタイト質花崗岩が使用されている。

平城宮跡からは領家花崗岩類以外にも姫路酸性岩類の礎石が出土している。一般的には竜山石の名称で知られている流紋岩質溶結凝灰岩で、表面は風化して淡黄褐色になっているものが多い。西大寺や恭仁京、大和郡山城石垣、飛鳥寺などにも見られるかいずれも転用されているため本来の用途は不明である。また、少量ではあるが、俗称「榛原石」と同様な特徴をもつ（年報1994参照）流紋岩質溶結凝灰岩も出土している。この岩石は石基がガラス質で斑晶としては石英、長石、黒雲母が顕著であり、ガーネットの小さな結晶を含み、この近辺では室生層群地獄谷累層（奈良市東部）に分布している。強度が大きく固結度は良く、肉眼的には石英安山岩に似た岩石であり、他の溶結凝灰岩とは容易に区別できる。風化に対する抵抗も大きく軟弱になっているものは少ない。

平城宮跡から多量に出土する石材の一つに上二山からドンズルボーにかけて分布する流紋岩質凝灰角礫岩がある。この凝灰岩はもともと固結度が低く加工しやすいため基壇の化粧石などに多用された。出土する凝灰岩のすべては風化しており、最大含水量は20~40(c)にも達する。この岩石は各種類の礫を多く含む事が特徴で、その礫種により採取地が特定できる。黒色の溶結凝灰岩礫を多く含むものは上二層群のなかでも下部ドンズルボー層に多く、灰色の流紋岩礫や石英安山岩礫を多く含むものは上部ドンズルボー層のものである。

平城宮跡やその近辺では上記石材以外にも両輝石安山岩（三笠安山岩とも言わ、三笠山およびその周辺に分布する）が使用されている。出土するほとんどの岩石は10~20cm大の円礫ないしは亜円礫状を呈し、礫層もしくは河川から採取されたと推定できる。風化して表面層が白色に変化しているが新鮮な内部は黒色である。風化しても強度的には劣化しない堅牢な岩石でもあるため石敷きなどに利用された。

（肥塚隆保）



地中レーダーによる探査（2）

埋蔵文化財センター

遺跡探査に応用される方法のうち地中レーダー探査は、立木など障害物がある場合にはアンテナ走査ができないため使用は制限されるが、測定が迅速であるところから採用される機会の多いものである。この探査では、通常「断面」画像を得て、それに基づいて土層変化や遺構、遺物を判断する。しかし、考古学探査で求めるのは、これらの規模や形態などの詳細であるので、断面画像を整理して、「平面」図として提示する方法（図-1）が、有効であることを報告したことがある（奈良国立文化財研究所年報1991、p.62～63）。

ところが、この平面図作成の方法は、地表面が平坦であるときには地下遺構の実際を反映できるが、地面に起伏がある際には正確に提示できないという欠陥があった。すなわち、遺構は平坦な旧地形に沿って構築されているが、現在の地表面が傾斜していたり凹凸があるという場合には、地表から等しい深さのデータを取り出す通常の方法では、遺構とは関係のない部分も含めて表現してしまう（図-2）。そこで、地形に合わせてデータを取り出し、遺構の現実に近い形で表現できる方法を開発した。

それは、断面画像をまず地形にあわせて変形して、それをもとに平面図をつくるものである。平面図を作る際に断面画像をある一定の時間幅で区切り、それぞれの時間幅における電波の反射強度をとりだして、平面図をつくるのは通常の方法と同じである。この方法を応用した飾東1号古墳（兵庫県・姫路市）における試みを、一例として取り上げ紹介する。

飾東1号古墳は横穴式の石室をもつ直径約13m、高さ3mほどの小円墳で、石室は既に開口しているため、内部から構造や規模を観察できる。ここでは、石室基底面は当然ながら水平な旧地表面上に構築されているが、もし、墳丘上から探査すると、通常のレーダー平面図は墳丘の表面に沿った一定の深さにおけるデータを取り出すので、異なる高さにある石材を表現してしまう。基底面と同じ水平なデータでなければ、石室の実際は求められないのである。

なお、この古墳は石室が墓道に対して横長方向にあり、全体がT字形を呈するところから、兵庫県内でも古くより知られていた。

ここでの実験的測定の目的は、正確な石室の形態を求めるにあったが、それにより石室を構成する石材がどの程度背後へ及んでいるか、すなわち石材の厚みを明らかにできると考えたのもである。石材は石室内部から観察できるが、石がどれほど後方へ控えられているかは知ることができない。墳丘の上から地中レーダー探査により、墳丘内での石の存在状況を推定することを試みたのである。

測定にあたっては、アンテナを南北方向に1mの測線間隔で走査した。すなわち、対象範囲は1mの間隔でくまなく測定した。アンテナ走査の方向はT字形石室の長辺に対して直角となる。使用した装置はアメリカG.S.S.I社製のSIR-2型で、アンテナは300MHzである。

測定の結果である地形補正による平面図を見ると、上層の50cmまで位の深さでは、石室上部における電波の反射が弱い。すなわち、石は存在しないように表現されている。しかしながら、現地での探査中の観察や石室の実際を考慮すると、地表下50cmまでには天井石は存在するようと思われたので、表現できていないのは不審である。もしかすると、天井石は扁平かもしれないと推定した。

50cm～1m程度の深さとなると、天井を構成する石からと思われる反射が顕著である。探査結果からは天井石は2石からなると判断される。しかし、これは石室内部から観察できる実際とは異なる。もしかすると、天井石上面が凹凸に富んでいるのかもしれない。

1m~1.5mくらいの深さ、すなわち石室の基底面にある石材を表現していると思われる部分になると、羨門の袖石の形状や石室を構成する石材背後の状況がよくわかる。全体としてみると、奥壁の背後で若干突出したようにみえる箇所を除くと、石室の両側壁と奥壁はあまり後ろへ控えられておらず、均質な厚みをもって構築されていると推定できる。羨門をつくる石は予想以上に厚く大きいと見ることができるが、それでも一石からなるのか、固定するための裏込めも含めた表現となっているのかは判断できない。

なお、石室中央の部分では空洞であるにもかかわらず、そこでもつよい反射があり石などがあるような表示となっている。これは、天井石や空間のように大きな反射をもたらす原因があると、それがエコーとなって下部すなわち遅い時間帯にまで及んだ結果であり、遺構の実際を表すものではない。パルスレーダーシステムにおける特徴であり限界でもある。

ここで初步的実験では、石室の構造を盛り上がった埴丘表面からでも推定できたと考えている。しかしながら、データを取り出す幅すなわち時間幅が大きく、50cm単位では石材の詳細を十分に表現できていないようである。石の大きさに合わせた幅が必要と思われる。

(西村 康)

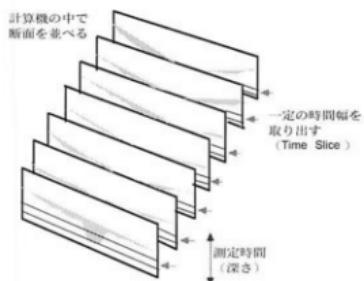


図-1 地中レーダー探査『平面図作成の要領』

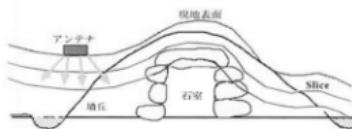


図-2 通常の平面図作成

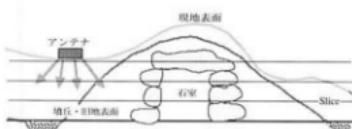
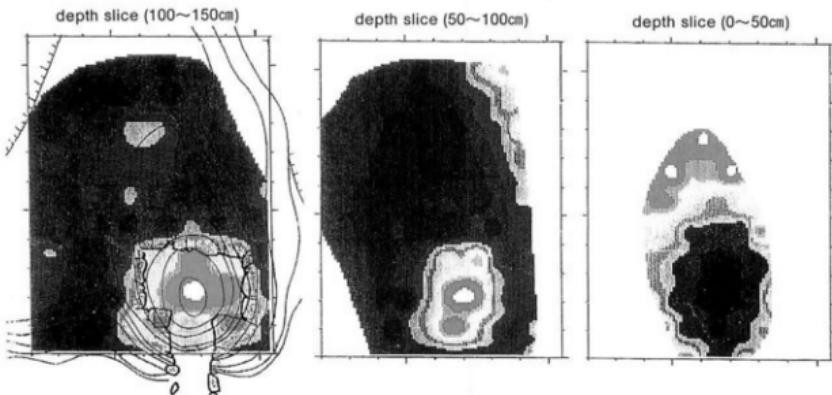


図-3 地形補正による平面図の作成



地形補正による平面図作成例 兵庫県飾東1号墳

情報システムの整備

埋蔵文化財センター

平成7年度補正予算によりハードウェアを中心とする情報システムの整備を行った。これはネットワークシステムの整備と所内外用のデータベースシステムの整備、所員が直接利用するクライアントパソコンの整備からなる大規模かつ根本的なシステム更新である。

ネットワークシステム

本庁舎の各室、第1～第5収蔵庫、平城宮跡資料館、飛鳥藤原宮跡発掘調査部各室、飛鳥資料館各室にネットワークコンセントを設置した。将来の利用拡大にも対応できるように、倉庫などにも設置している。各コンセントからのUTPケーブル（カテゴリ5）を建屋ごとに収線し、パッチパネルを介してコンセントレータに接続している。これにより、任意のコンセントに対して、接続の可否や接続先を物理的に簡便に変更可能となった。

コンセントレータとしては高速のスイッチングコンセントレータを導入し、各ネットワークコンセントまで10Mbit／秒もしくは100Mbit／秒の速度を確保した。10Base-Tないし100Base-TXでの接続が可能である。建物が大きいなどによりスイッチングコンセントレータからの距離が遠い一部のコンセントについては10Base-Fからの分岐となるため、1コンセントあたり10Mbit／秒の速度を得られないが、現状では業務遂行上問題のない帯域を確保できていると考えられる。

スイッチングコンセントレータ間は155Mbit／秒のATMで接続しFDDIをバックアップとして用いている。いずれも光ケーブルで接続している。ATMはLANE機能を活用し、もっぱらバックボーンとしての利用を行っている。これらの機器の設定によっては、任意のコンセント同士を特定のグループ化するバーチャルLANの利用も可能で、機器の移設をせずにネットワークの区分変更に対応できるようになった。

分散する施設間の接続にはデジタル専用線（1.5Mbit／秒）を利用している。研究所としてドメイン名（nabunken.go.jp）を取得し、対外接続はSINETおよびWIDEにデジタル専用線（1.5Mbit／秒）で接続している。導入している専用線の速度は現在のところ、関西では最も高速の部類に属しており、当面の需要には十分に答えられるものとなっている。

ネットワーク関連のサーバ類として、ドメインネームサーバ、プロクシサーバ、メールサーバ、ファイアウォールを整備した。ドメインネームサーバに関しては飛鳥藤原宮跡発掘調査部にセカンダリサーバを設置することで負荷の分散をはかっている。これらのサーバにより所内外の電子メールやホームページアクセスなどのサービスを享受できることになった。奈文研独自のインターネットホームページの公開を平成8年度に予定しており、そのためのサーバを本年度に導入し、準備を進めている。

データベースシステムは、主に所内向けである「文化財情報システム」と、全国の文化財担当者向けの「不動産文化財情報システム」とからなる。

文化財情報システム

従来小型の汎用機で提供していた木簡データベース・軒瓦データベースと、小規模なPCサーバに搭載していた図書データベースとを統合し、そこに全文データベースを加えた4つのデータベースを新たに導入したPCサーバで実現している。データベースエンジンにはORACLE、全文検索エンジンとしてSAVVYを採用し、データベースサーバ、全文検索サーバを分離した。ハードウェアは本機と予備機の2重構成をとっているので、全体で4台の同一構成のサーバを運用している。いずれのサーバにもRAID5のハードディスクを10GByte接続し、事故によるデータの消失がないように備えている。

データベースは、木簡・軒瓦・全文の三者には画像情報を付加することが可能となっている。画像情報は大容量となるため画像ファイル用のサーバを別に導入した。高速のUNIX機 (SPECrate int92 : 21,758, SPECrate fp92 : 20,851) に RAID 5 でデータ領域180GByteのハードディスクを接続して対応している。また、画像情報の蓄積と処理を円滑に進めるため入力装置としてPhotoCD焼付用のシステムとスキャナ、出力装置としてカラープリンタとフィルムレコーダを導入した。その他、蓄積が進んでいた軒瓦拓本画像、木簡写真画像のファイルをコンバートしデータベースとの統合を可能とした。

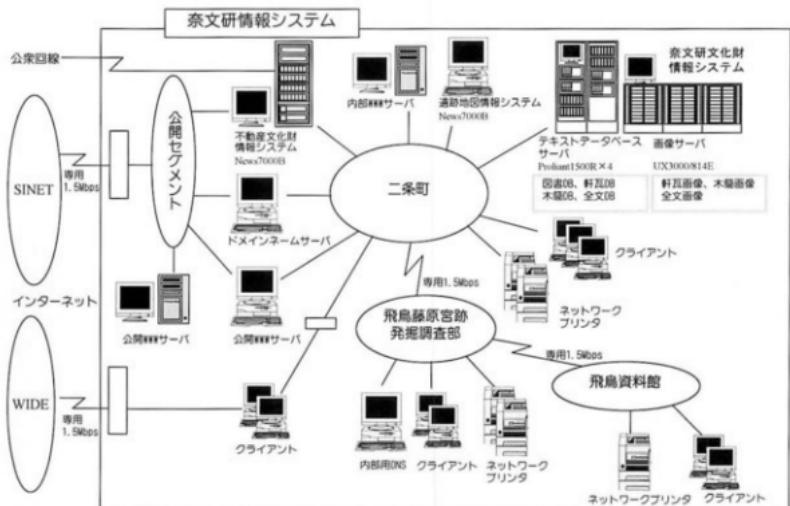
不動産文化財情報システム

不動産文化財情報のプロトタイプを発展させるため、UNIX機にRAID 5 でデータ領域75GByteのハードディスクを接続している。データベースソフトには引き続きORACLEを採用した。アプリケーションの開発は平成8年度に行う予定で、本年度は前年度より引き続いてデータの収集、調整を実施した。

クライアントパソコン

所員などの情報システム利用者は、直接にはパソコンを通じて、ネットワークやデータベースを利用することになる。このため日々の研究業務に活用でき、かつ円滑な処理を可能とする高機能のパソコンを導入することが、直接的にシステムの高度活用に貢献すると考えられる。従来の機器との整合性をとるため、Windows3.1を搭載した機種とMacOSを搭載した機種の2系統を用意し、それぞれにデスクトップ型とノート型とを導入している。すべてのクライアントパソコンにネットワーク関係のソフトウェア (TCP/IP、telnet、ftp、電子メール、ブラウザ) のほか、文化財情報システム用のアプリケーションや画像表示、ワープロ、表計算、データベース、ディスク診断、ウィルス対策の各ソフトウェアを搭載した。また、所内の要所にネットワーク対応の高速プリンタを配備した。

(森本 晋・奥村小百合)



情報システム構成図

平城宮跡の整備

庶務部・平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・
建造物研究室・埋蔵文化財センター

平城宮跡の整備

1995年度に実施した宮跡整備は、朱雀門・東院庭園・宮内省の3地区における復原整備、見学者用広場整備および、落雷により破損した東院南門の災害復旧を行った。

朱雀門復原整備

朱雀門復原整備事業の3年度目である。本年度は、昨年度に引き続き木材の加工・組立を行い、初重については軒回りの一部を除き組立を完了し、二重は軸部・組物の組立まで完了した。屋根工事としては、平瓦・丸瓦などを製作。また、天井廻り等組立後の施工が困難な部分の塗装（丹土塗り）を行った。工事現場の一般公開を春と秋の2回（ともに3日間）実施し、いずれも約1万人の見学者が訪れた。朱雀門の施工状況の見学に加え、春には大工によるヤリカンナを用いた木材加工、秋には屋根葺師による屋根葺作業を資材保管加工棟で公開し、好評を博した（図1.A）。 （村田健一）

東院庭園復原整備

園池の再発掘・試験施工 中央建物復原工事及び園池復原整備工事に先立ち、園池北部（1392m²）および園池南部出島周辺（195m²）の再発掘を実施した。このうち、園池南部の出島周辺については、園池全城の復原整備の工法を検討するため、素屋根掛けの試験施工区を設定し、石の保存処理と洲浜復原の試験施工を実施した。石の保存処理については、石質により次のように行った。片麻岩・花崗岩などの脆弱な石は、割れている部分の接着および合成樹脂減圧含浸による強化処理、安山岩など表面の風化にとどまっている石は、合成樹脂点滴による強化処理。また、洲浜の復原については、①造構面の不陸を砂で充填して整正 ②透水性不織布の土木シートを敷設 ③真砂土により推定復原地形を造成 ④表面礫敷き（礫は平城宮跡発掘調査での発生材および淡路島産の購入材）という工法を標準として試験施工を行った。このほか、ソイルセメントを使用して表面の礫を固定する工法についても、小試験区を設定して試験施工を行った。試験施工後は水を計画水面高まで満たし、造構面・造成地盤の状況を観察した。園池全城の復原整備工事の実施にあたっては、これらの試験結果を勘案して、最善の工法を採用することとした。

園池北方地区的整備 園池北方地区では、板塀復原工事・地形復原造成・導排水関連工事・植栽等を実施した。復原した東西方向の板塀（第110次調査で検出した掘立柱東西塀SA9064）は、庭園の北を



朱雀門復原工事（二重の組物まで組立完了）



東院園池北方地区 板塀

区画する施設であり、東端は東面大垣にとりつく。全長は12間（36.84m）。柱間寸法は、東端から8間目が12尺、9間目が8尺である以外は、10尺等間。この柱間12尺の部分を扉口と考えた。柱径は出土柱根から1尺とし、復原造営基準尺は、1尺=30.3cmとした。構造形式は、第一次大極殿地区で出土した掘立柱塀の部材を参照し、腕木・出桁式とした。また、屋根は、第99次調査で平橋SC8465の柱穴から幅1尺の大和葺下材が出土していることから、大和葺とした。ただし、寸法は、他の部材とのバランス上、第178次・第202-13次調査出土の大和葺下材を参考に、幅8寸とした。上板は法隆寺五重塔の表階を参考したが、下板とかみ合うアゴは、木材の収縮によって割れるおそれがあるためつくらなかった。壁体は横板落込み式。棟高は10尺、軒の出は2.1尺。扉は藤原宮跡西方官衙出土部材を参考にして復原した。施工にあたっては、鉄筋コンクリートのベタ基礎の下に、鉛直荷重を拡散させ、造構面を保護する効果があるコマ型コンクリートブロック基礎（以下コマ基礎）を埋めた。柱はベタ基礎に固定した逆T字型のステンレス鋼板2枚で挟んだ（図1、B）。

地形復原工事は、真砂土で地形を復原的に造成した後、板塀南側では疎敷き舗装を復原的に施工し、板塀北側では緩衝地的なスペースとの位置づけにより全面張芝とした。疎敷き舗装は、ソイルセメントに砾をたたきこむ工法を用いた（369m²）。また、導排水工事のうち、復原的なものは、池への導水路となる東西方向の石組溝（28m）と東面大垣の東西両側の雨落ち溝（東28m・西83m）で、その他は機能的な排水施設である。植栽工事としては、シラカシ・イロハモミジ・ツバキ・サツキ等を用いて北辺から西辺の遮蔽植栽としたほか、板塀南側には復原的な庭園植栽としてハギを植えた。このほか、北辺から西辺にかけて外周柵を設置し、門扉2ヶ所を設けた。

中央建物の復原 中央建物は昨年度の復原設計をもとに施工を開始した。園池と復原建物との盛土厚に差があるため、園池上に張り出す中央建物の縁・露台が池方向から大変高く見えるという問題が生じ、建物全体の床高を既設計寸法から階段一段分（7寸）下げ、2.9尺とした。また、主に柱足元と床下、壁体、屋根に構造補強を施した。これらは、地震による倒壊・建物のねじれ・浮き上がりに対処するためのものである。基礎は鉄筋コンクリート造で、身舎部分は布基礎、縁部分はベタ基礎、露台部分は柱穴彫形を利用した独立基礎とした。また、身舎東端梁行方向の身舎柱基礎下には、コマ基礎を併用した。基礎と柱脚との接続には、身舎部分ではステンレス丸ダボ、縁部分では基礎上に立てたアンカーボルトを用いた。露台部分の八角柱は基礎に固定した高さ24cmのステンレスケースに差し、ステンレスボルトを柱に貫通させて固定した。独立基礎相互は逆T字型のステンレス鋼で緊結する。床下部分では、補強のため足固貫を付加し、さらに火打梁を入れた。また、地震の上下動に対抗するため、ターンバックルで火打梁と基礎を固定した。壁体には、木製格子を組み、角盆状のステンレスパネルを入れて耐力壁とした。頭貫より上の浮き上がりをおさえる必要のある部分数箇所においては、部材相互をアンカーボルトで緊結した。屋根では、軒の垂れを防ぐため、丸桁・母屋・木負の上面に炭素繊維板を添えた。これは、実験的に東側の桁行方向2間分のみに入れてある。

（小野健吉・箱崎和久）

東院地区水源調査

東院庭園復原整備では、来年度園池を復原整備する計画である。第44次・第99次発掘調査で確認された園池は、その表面を洲浜砂利でおおった出島・入り江を持つ複雑な形態であり、復原する池面積は1,750m²、當時貯水量は350m³の計画である。池水の水源としては公共上水道や地下水が考えられるが、きれいな池水を保つためには水温の上昇対策や泥・木の葉の混入防止及び濾過対策が必要であり、池水の入れ替え及び濾過装置の検討が必要となった。池水の水源を公共上水道にすれば、その量が公共上水道に与える特に夏期における量的な問題も大きく、また、同時に排水は既存の用水路に放流す

こととなり、周辺耕作地への春秋の多雨期における影響が問題となる。そこで、東院庭園では水源を地下水とし、その水を循環させることにより池表面からの蒸発量のみの補給（地下水汲上げ）を行い、地下水への影響も最小限に留め、排水も降雨水のみを放流する計画とした。本調査は、この給水計画に従い地下水の水理特性及び、水質を把握し給水供給源としての適性を検討するため実施した。調査位置は、東院地区宇奈多理坐高御魂神社西方である。本調査位置が計画上給水源となり揚水貯水槽・設備室等を伴うことから、遺構の削平が確認されており復原整備に影響のない位置を選定した。ボーリング孔深度については、奈良市盆地部の深井戸調査から深度100m孔から $1,500\text{m}^3/\text{day}$ 程度の湧水の可能性があることが判明したことから本調査孔の深度を安全を見て120mとし、水中ポンプの設置を考慮し孔径を250mmとし調査を行った。本調査では湧水を確認するため電気検層、湧水試験、及び水質試験を実施した。

調査結果概要 水理特性：揚水量は $430\text{m}^3/\text{day}$ 程度であり、計画揚水量 $350\text{m}^3/\text{day}$ の確保は可能である。長時間揚水において運転水位は下降傾向を示しているためポンプ設置位置はGL-50cm付近である。

水質結果：水道法による基準を超えるものは、大腸菌群陽性（水道法基準検出されないこと）、マンガン $0.21\text{mg}/\ell$ （水道法基準 $0.05\text{mg}/\ell$ ）、色度5度（水道法基準5度以下）の3項目である。この他、検討を要する項目として基準値以下であるが、鉄分 $0.27\text{mg}/\ell$ （水道法基準 $0.30\text{mg}/\ell$ ）、硝酸性及び亜硝酸性窒素 $1.8\text{mg}/\ell$ （水道法基準 $10\text{mg}/\ell$ ）が含まれている。

本地下水を飲料水として使用する場合は、上記項目を基準値以下に浄化する必要があるが本計画において飲料水として使用することは考慮していない為特に支障はないが、地下水に含まれる鉄分は酸化により赤く変色し、マンガンは酸化により黒く変色し、池表面を構成する敷石に着色し景観を大きく損なう結果となることが予測される。また、硝酸性及び亜硝酸性窒素は水温の上昇に伴いアオコの繁殖が懸念される。よって、これらの浄化除去設備等の検討が必要となった。

給排水計画としては、浄化環流方式を採用し本井戸地下水をポンプにより揚水、除鉄・除マンガン処理のうえ園池へ給水する。池水は循環ポンプにより汲上げ回収、水中の浮遊物質等を濾過するとともに、池周からの湧水に含まれる鉄分・マンガンはその濃度により適宜除去するなど浄化を行ったうえ、再度池に給水する。あわせて、池水の循環回数及び補給水量の検討により水温上昇を調整しアオコの発生を抑制するシステムの完成が今後の検討課題となる（図1. B）。(今西康益)

宮内省南面築地および南門

宮内省地区整備の一環として行っている外周の築地については、1987年度に北面築地および北門を復原したが、本年度は北面築地の西端部および南面築地および南門の復原を行った。南面築地は北面と同規模に巡らすこととし、遺構にしたがい位置、形状を設定した。築地の基底幅は1.5m、高さは3.37mで、今回の施工延長は40.8mである。工法、仕様とも前回の北面に倣い伝統的な手引き版築とするが、築土の水分、成分など材料の調整は再度検討を加えた。南門については、築地中におさめられた穴門であったのか、あるいは築地から切り上げた切妻形式の門であったのか、遺構からは判断できないが、同門が西側の内裏正面に至る通路に面していることを考慮し、築地から切り上げた門の構えをとることとした。間口は遺構をもとに北門と同じ9尺としたが、構造形式は、北門の方をより主要な出入口としている従来の解釈にもとづき、北門に準じつつもやや簡略化し、高さも低めることとした。南門の遺構が北門と異なる点は、北門の柱穴が二穴であって棟門とみることができるのに対し、南門は桁行両端に二カ所ずつ計四穴の柱穴があることである。それぞれの柱穴の大きさからは柱径の大小の判別がつかず、またその平面は築地と同じ軸線上にある。この柱位置関係からみて薬医門や控え柱付きの棟門とは考えにくく、現存例にみる門の構造形式にあてはまらない軸部構造であつ

たことも考えられる。このため整備にあたっては、柱は遺構にしたがって四本建てとし、上部構造は前述のとおり北門に準ずるものとした（図1. C）。（木村 勉）

造酒司の井戸及び見学者広場整備

発掘調査で検出した井戸遺構のレプリカは、1994年度に覆屋内に設置したが、本年度は、レプリカに接する部分の遺構面約120m²の復原を行った。遺構の井戸からの湧水は現在でも多く、大雨時にはレプリカの井筒まで漏水することが判明したことから、覆屋の基礎スラブと復原遺構面との間を埋める材料が問題となった。そこで表層表現に必要な厚みを残し、その下部はコンクリート（厚さ約45cm）で埋めるとともに覆屋への

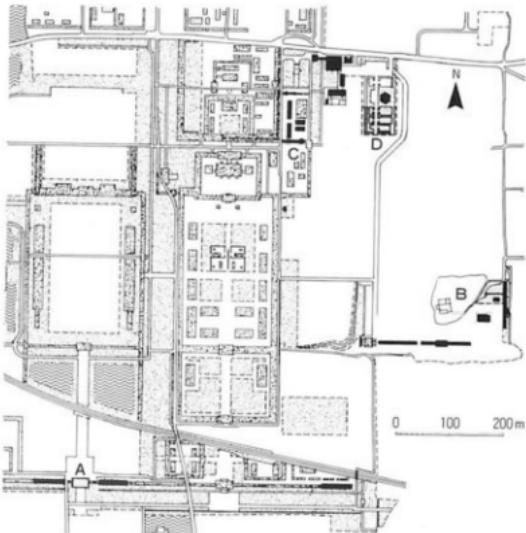


図1 平城宮跡整備位置図

配水管（塩ビ管径100mm）2本を埋設し自然排水を行い復原遺構面の冠水を避けるようにした。このコンクリートから復原する遺構面までは2層構造とし、ともに粗粒の真砂土（柳生産「鬼真砂」）にセメントとセメント硬化剤を混入する透水性舗装とした。下層部は仕上げ面-8cmまで、溝や柱穴を含めた遺構面の概形を造成した。表層部は、礫の多く混じる遺構面の外観を表現するため、遺構面の礫に類似した洗い砂利（5~40mm）を土量の約3割用い、発掘調査時に採集した礫（50~100mm）も随所に混ぜた。仕上げは、実測団と写真に基づき溝や柱穴を表現するとともに、発掘用鎌とワイヤーブラシを用いて削りだした。これは叩き締めただけでは表面が偏平になるためである。

見学者用広場は、平城宮跡の東側の利用拠点として整備を進めてきた。昨年度はその北側入口部分の広場と造酒司覆屋及び周辺環境整備を行い、本年度南側広場、宮内道路の延長及び東方官衙地区的区画である西辺築地壇跡及び南辺築地壇跡の復原表示（広場内園路として利用）を造酒司南門取付部までを行った。広場は、東院庭園へのアプローチとして中央南北方向に設定した宮内道路（車両通行部分：幅員6m）を中心に、駐車スペースとこれを取り囲む植栽帯を1ブロックとした駐車ゾーンを地形高低差に合わせ段状に配した。これは広場舗装面が広いことによる景観上の影響と、宮跡へのアプローチとしての効果を考慮したものである。舗装は、インターロッキング舗装及び玉砂利を混合した自然色舗装とし、また、車両通行部分は耐磨耗性があり車両交通に耐えうる舗装材を選定した。駐車面積は、1,470m²・70台分である（図1. D）。

（内田和伸）

平城宮跡整備費内訳

朱雀門復原	東院庭園復原	宮内省地区整備	見学者用広場整備
—	4,582m ²	49.8m	4,582m ²
779,967千円	421,579千円	82,400千円	55,620千円

ロシア・パジリク古墳群出土遺物の保存科学共同研究

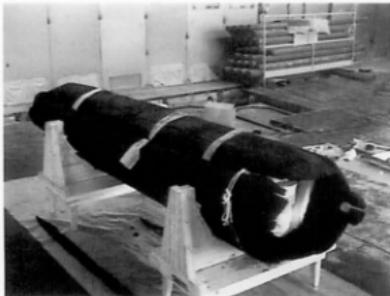
昨年度に引き続きロシア科学アカデミー・シベリア支部歴史学、考古学、民族学研究所（ノボシビルスク）と当研究所の間でパジリク古墳群出土遺物に関する保存科学共同研究を実施した（1995年7月10日～7月19日）。

今年度は、昨年度PEG含浸処理（40%PEG水溶液を含浸した後、遺物を取り出し徐々に乾燥）を終了した遺物の表面処理と接合・整形をおこない、さらに真空凍結乾燥した遺物の取り出しを実施した。表面処理はアルコール（約45°C）を用いて材表面のPEGを除去する方法によった。処理の完了した遺物は、それぞれの破片を用いて接合材料選択のための予備実験をおこなった後、エポキシ系およびアクリル系接着剤を使用して接合をおこなった。また、欠損部の一部はエポキシ樹脂とフェノールマイクロバルーンを混合した補填材料により形を整えた。その後、棺材を展示するため、遺物の形状に合わせて支持台を製作し、組み立てをおこない遺物の保存処理と修復を完了した。

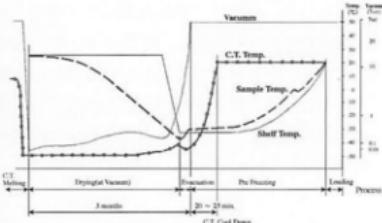
今回の一連の実験の結果、パジリク古墳群出土木材にはカラマツ材が使用されているものが多く、それらは表層から内部まで腐朽が進んでおり、その含水率も150～200%の範囲におさまる均一な材であることが明らかになった。しかし自然乾燥することにより繊維軸に添って放射方向の著しい割れを生じるため、遺物を安全に保管するには保存処理が必要不可欠であることも明らかとなった。今回の実験を通して、低濃度のPEG水溶液を含浸した後、長期間かけて徐々に自然乾燥するだけでも保存処理効果が大きいことも明らかとなった。また、真空凍結乾燥法により実験した結果、PEG水溶液を含浸した後、予備凍結をおこない真空乾燥処理するとはば3ヶ月で処理が完了できることも明らかとなった。しかし、現状では発掘された木材を一次保管するためのブールなどの施設がないため、処理までの保管をいかに有効に行うかという問題が残っている。今後は出土木材について簡便なシール法などの一次保管方法について、気候条件などを考慮してさらに検討する必要がある。

今回は有機質遺物だけでなく、骨や金属製造物の保存処理方法の検討をおこなうため研究所において出土遺物を実見し、ブロンズ病対策などについて意見の交換をおこなった。さらに出土遺物の材質調査方法に関しては、実験施設の整っている結晶学研究所を訪れて、蛍光X線分析法をもじいた非破壊測定法に関する意見の交換や、実物の金箔資料を使用して実験をおこなった。今後、さらに出土遺物の保存科学研究を進めていく上においては、材質調査に関する共同研究も必要となる。以上、これまでの両国間における保存科学共同研究は、将来においてさらに進展し大きな成果となることを期待する。

（沢田正昭・肥塚隆保）



保存修復処理後、支持台にて組み立て



真空凍結乾燥処理のプロセス

予備凍結した棺材温度が安定後、真空にし、所定の乾燥温度で真空凍結。

アンコール文化遺産保護共同研究

文化庁では、平成5年度から標記の共同研究事業を開始し、本年度はその3年目に当たる。本事業は1. カンボジアにおける共同研究と、2. 日本における共同研究のふたつの側面を持つ。

1. カンボジアにおける共同研究

本年度は7月と3月の二回にわたり、当研究所の研究員を現地に派遣し、現地の研究者と協力して共同研究事業を行った。

7月には西村・花谷・杉山の三名を派遣した。昨年度3月に初めてカンボディア現地での遺構探査を試みたが、3月の乾期においては、特に電気探査で電流の流れの悪さによる探査のやりにくさが指摘された。そのため、今回は雨期のはじめの頃で、雨もそれほど激しくなく、かつ地面も幾分か湿った状態を得るために、7月に調査を行った。

パンテアイ・クディ遺跡においては、上智大学の調査隊と協力して小規模な発掘調査を行ない、これまでに確認されていた前柱殿南建物の基壇規模を明らかにすることができた。

3月にも上記同様、3名の研究員を派遣した。7月の調査で、磁気探査と電気探査については、一応の成果を上げることができたことから、今回は地中レーダー探査を試みた。その結果、スラニスランの西側において、明瞭な反応が認められた。探査範囲の北側では、古くにフランス極東学院による発掘調査が行われており、スラニスランの西側堤に沿って南北のラテライト石組溝が検出されている。今回の反応はこの溝の南延長部と考えられる。

昨年度発見されたクメール陶器の窯跡であるタニ窯跡群の踏査を行うとともに、磁気探査も行った。あわせて、関連陶器資料収集の一環として、シエムリアップ市内のワット・ボーキ寺院所蔵土器の調査を行った。

2. 日本における共同研究

A. 若手研究者の招聘 王立芸術大学考古学部を卒業したエア・ダリス氏とブラック・ソナラ氏の2名を、平成7年10月5日から12月28日まで招聘した。発掘現場実習・測量実習・遺跡探査実習や、奈良周辺をはじめ九州各県の遺跡調査修復現場の視察を行った。

B. 中堅研究者の招聘 今回はブノンベン王立芸術大学講師であるとともに、アンコール地区の遺跡保護と開発を管轄するAPSARAの顧問であるアシュリー＝トンブソン氏を、平成7年12月6日から12月18日までの招聘した。研究所の活動や周辺での遺跡の調査保護活動を視察するとともに、氏の要望で、茨城県の水戸彰考館に所蔵される祇園精舎図とよばれる、アンコール・ワットの古絵図の調査を行った。

(杉山 洋)



パンテアイ・クディ西北隅での探査



スラニスラン西側での探査

在外研修報告

1995年11月5日から1996年1月25日までエジプト・トルコ・ギリシャに出張し、古代の117遺跡を実見した。以下、現地で考えたことを記す。

(1) 古代エジプトのピラミッドの群としての分布と、畿内の前方後円墳の群としての分布との比較

エジプト第1～3王朝の王墓や最初のピラミッド（ジュセル王）がサッカーラに集中し、首都メンフィスに近接する。これは、日本の大倭古墳群や最初の大前方後円墳（磐墓）が首都纏向に近接するのと似る。また、エジプト4王朝の諸王のピラミッドは、首都メンフィスより遠く離れた場所に位置し、この時代のピラミッドが最も大きい。日本の古市古墳群・百舌鳥古墳群に、4王朝のピラミッド群の配置が似る。エジプトの場合、個々のピラミッドの王名が判明しており、その点が日本の前方後円墳より分析しやすい。エジプト古王朝において3・4・5・6王朝と区分する王朝細分の本質的な相違点や王相互の血縁関係などを検討することは、畿内の大前方後円墳の群配置を考える上でも有効であろう。

(2) 古代トルコにあらわれる整然とした計画による都市造りと、その先行形態

かつてミレトス遺跡は、日本古代における方格地割をもつ都城と比較されたことがある。そして「ヒッポダモス式都市は植民都市であって、在地における生活の伝統と断絶し、外来の植民市民を主体として建設された」と把握された（田辺・稻田「エーゲ・オリエント・日本の都市」『考古学研究』77, 1973）。しかし、トルコやギリシャでは、ヒッポダモス式都市とは、Hippodamus（B.C.5）が考案した都市計画による都市を指すのであり、ミレトスでは紀元前5世紀、ブリエネでは紀元前4世紀に計画・実施されている。ミレトスの最初の植民地への移行はB.C.15世紀頃のミケーネ人の移住であり、ブリエネでは、最初の植民都市は位置が判明せずペルシャ戦争後B.C.359年に再建されたのが現在のブリエネ遺跡であることが判明している。したがって、植民都市であるからヒッポダモス式都市であると断ずることはできず、むしろ、ミレトス・ブリエネ遺跡に先行する時代のトルコ・ギリシャにおける建物配置の規則性を検討する必要がある。ミケーネの城塞やヒッタイトの都城ボガスキヨイにおいては、自然地形を利用して建物を建て、方格に配置する規則性は認められないが、ティリンスの城塞では同一方向に近い建物群が出現し、B.C.13世紀のビュロスにおいては、内庭を囲む連続した建物の配置という点では古式であるが、同一方向に建物を配置する傾向が強くなる。次にB.C.8世紀のトルコ・フリギヤ王国の首都ゴルディオンでは、「広間」と「玄関の間」からなるメガロン群が、同一方向に規則的に並ぶ。したがって、ギリシャの暗黒時代（B.C.12～8）と呼ばれる時期を前後する時期にはじまり、Hippodamusが都市計画案を完成させるまでのB.C.5世紀までの建物配置及び道路の規則性についての検討が必要となる。この点は、今後の課題としたい。

(3) クレタ文明における宮殿と呼ばれる遺跡

クレタ文明において宮殿とされるものがいくつかある。このうちマリア、グールニア、カトー・ザクロは海に面し、王の部屋とされるものは、いずれも7×7m、7×10mと狭く、遺構全体の中でも標高の低い位置にある。一般の居住地が標高の高い位置にあって、王の部屋と連続していることなどからみて、王という概念を用いることは、検討の余地があると思う。クノッソスでも玉座の間は、12×10m程度であり、ファイストスやアギア・トリアグラでも、それ以下の狭さである。以上からみると海に面した三遺跡は海の町で、王の部屋はリーダーの部屋とでも呼ぶべきであろう。一方、やや陸地に入る三遺跡では、倉庫群が遺跡の面積のかなりの部分を占めることが注目される。ミケーネ文明は、遺跡からみて強い王権の存在が推定できるが、それに先行するクレタ文明の社会組織のあり方は、古典ギリシャの民主政のあり方とも関連して興味深いものがある。

（山崎信二）

イクロム国際建築修復コース

ローマにあるイクロム（International Centre for The Study of The Preservation and Restoration of Cultural Property）が1996年1月24日から5月31日にかけて開催した1996年度国際建築修復コースに参加した。コース全体を通しての参加者は18名で、随時数人の短期参加者があった。参加者の母国はヨーロッパが主体で、アジアからの参加は1名のみであった。例年度にくらべて、東欧圏および中東諸国からの参加者が目立った。

コースは18週間からなり、以下のように週毎にテーマが設定されている。

第1週：修復の哲学と概念／第2週：構築物と遺跡の保護に関する国際情勢／第3週：文化遺産の記録／第4週：歴史的建造物の概要／第5週：構造および材料の劣化原因（予防と対策）／第6週：調査・分析・修復・管理／第7週：検査・調査事業・遺跡管理／第8週：劣化過程・予防と対策の原理／第9週：劣化の原因とメカニズム（土・石・モルタル）／第10週：劣化の原因とメカニズム（石・ブロック・モルタル）／第11週：劣化の原因とメカニズム（金属・コンクリート・近代の材料）／第12週：表面の修復原理／第13週：予防措置、歴史的建造物内の博物館と陳列品／第14週：実験／第15週：考古遺跡、文化的景観、歴史的庭園／第16週：都市と田園の修復／第17週：研修旅行／第18週：文化遺産における保存理念・哲学、新しいタイプの対策・再生

参加者は以上の講義を開くだけでなく、発表・討論・演習というかたちでコースに関わる。日本の文化財の調査・保存に関して「阪神大震災における伝統的建造物」、「木造建造物の調査・記録方法」、「遺跡の発掘と整備方法」、「奈良市における町並と埋蔵文化財の保存に関する諸問題」と題した発表をおこなった。日本の現状は、ヨーロッパを中心とした国々とはかなり異なっており、他国からの参加者の興味をひき、日本の文化財保存の現状についての誤解を解くこともできた。概して、各参加者とも、講義よりも参加者の発表に興味がひかれたようである。

実習では、対象物に面した際の視点・調査方法・評価方法が参加者によって異なっており、そこには各国の文化財に対するアプローチの方法が反映されており、興味深かった。また、世界各国からの講師・参加者間で、各国で保存上直面している諸問題の処理方法について論じ、互いに学ぶべき点が多くあった。とはいっても、各地域・各国の文化財に対する価値観・評価基準・修復方法・活用方法、強いては保存のプロセス・その嗜好にみられる国民性もそれぞれ固有の文化であり、文化財保存に関する世界一律の基準づくりはかなり困難であると感じた。そこで、文化財保存の国際協力においては、自国の保存哲学・方法論を主張するだけでなく、相手国の国情・歴史・国民性等をも考慮した活動が必要であることを再認識した。

コースにおいて西欧の保存・修復方法を学ぶと同時に、修復・活用された文化財を実見した。科学的・工学的な処理方法については、イクロムで学んだ技術が使用されている。しかし、修復や活用方法については、西欧の伝統的な保存理念との矛盾をしばしば感じた。現実には、活用を主眼においたダイナミックな改造もなされている。いずれの国においても、文化財の保存は現社会とのかかわりなしには論じられないということであろう。残念ながらイクロムではそのような視野に立っての講義・討論が少なかった。理念のみが先行し、ややもすると実際の保存から遊離してしまっている点も否定できない。参加者からも、一部の現実的問題と遊離した講義内容や講師の態度に対して批判的な声が聞かれた。このコースが、主として技術的問題を扱うことを主眼としているのもその一因ではあった。しかし、来年度は、試みとして「世界遺産都市の保存」というコースが開催され、現代社会のなかでいかに歴史的都市を保存するかが議論されるという。

（島田敏男）

国際交流彙報

中国文物研究所・天津大学との交流

芸術文化振興基金助成の「伝統的文化財技術の調査研究」の一環として、中国から張之平（中国文物研究所古建築保護部）、楊新（同）、楊昌鳴（天津大学建築系）の3氏を招聘した。招聘期間は1996年3月20日からの10日間。3月22日には、恒例になった「古建築の修理と復原に関する意見交換会」（第4回）を開催した。3氏の講演題目は以下のとおりである。

・張之平「〈古建築木構造の維持と補強技術の規範〉について」

・楊新「独樂寺修理工程の状況簡介」

・楊昌鳴「宮殿形式を模倣したラマ教寺院－青海省の瞿崑寺」

このほか、3氏は春日大社、元興寺庫裏、如意寺、神戸十五番館、嚴島神社などの修理現場や数多くの古建築を視察し、3月29日に福岡から帰国された。5年間にわたる「伝統的文化財技術の調査研究」も最終年度を迎えたが、日中の修理技術者・研究者の交流が今後さらに活発化することを願ってやまない。

（浅川温男）

北魏洛陽城永寧寺出土の塑像と瓦の調査

永寧寺は、孝明帝熙平元年（516）に靈太后胡氏によって建立された北魏洛陽城で最大の仏教寺院である。中国社会科学院考古研究所が1979年から調査を継続しており、1994年には文部省科学研究補助金（国際学術研究）を受けて、奈良国立文化財研究所の2名の研究員が西門と塔の調査に参加した（『年報』1995）。1995年からは遺物の総合的整理と研究が開始され、日本側も11月2日から11月16日まで中国を訪問し、永寧寺の塑像と瓦および関連資料の調査を行った。山崎隆之（愛知県立芸術大学）は塑像の製作技術の調査を行い、中國側が從来から唱えてきた手作り説に対し、型作りを基本にし、それに範など手を加えたという説を提示するに至った。松浦正昭（奈良国立博物館）は塔各層の塑像の大きさや組み合わせ、背景の復元を行った。佐川は瓦の文様と製作技術の調査を担当した。塔所用の蓮華化生文軒丸瓦は4種類があるので、一案としてこれらを四面ごとに分けていた可能性を考えている。井上直夫（奈文研）は遺物の写真撮影を現地で行った。なお、中国語版の報告書は1996年に刊行され、日本語版は現在製作中である。

（佐川正敏）

国際シンポジウム「鍍金された金属文化財の表面科学」への参加

本国際シンポジウムは、アメリカ保存科学会（AIC）の1995年度本大会前の特別セッションとして企画され、6月4～6日ミネソタ州セントポールにおいて開催された。村上は「文化財保存振興財団」の派遣研究員として会議に参加した。「鍍金（gilding）」技法は、馬具や武具、装飾品などの金工品はもとより、彫刻、建造物も含めた金属文化財の表面を金色に装飾する表面加飾技法の代表的なテクニックであり、洋の東西を問わず古代から盛んに行われてきた。「鍍金」は、わが国では水銀を用いた金アマルガム法を指すことが多いが、「gilding」は、金箔などで覆う方法なども含めた「表面を金色に装飾する」という広範な意味を持っている。シンポジウムは、gilding技法を時代や地域別にまとめ、様々な分野から検討を試みる企画で、特に文化財保存科学、考古学、美術史、工芸史、さらには現代工学の視野をも含めた学際的な討論を行う努力が払われていた。発表は本分野の第一人者である大英博物館のアンドリュー・オディ保存科学部長の基調講演に始まり、17本の講演が続いた。村上は「日本で出土した鍍金を施された金工品について」と題して講演し、わが国出土の古代の鍍金仕上げの金工品を紹介し、その表面の微細構造を現代の技術で作成した試料と比較対照することで、古代鍍金技法を解明する糸口を探るとともに、さらに金銅製造物の腐食のメカニズムに関する考察も報告

した。わが国の金工技術に対する欧米研究者の関心の高さにもかかわらず、わが国情報はこれまでほとんど紹介されていなかったのが実情である。特殊なテーマではあるが、熱気に満ちた会場の雰囲気は、欧米のこの分野での層の厚さを改めて痛感させられた。シンポジウムのあと、ワシントンのスミソニアン研究機構に招かれ、フーリア美術館所蔵の青銅鏡などの調査を行うことができた。またメリーランドにある国立標準技術院（NIST）において電子顕微鏡観察を行う機会を得た。（村上 隆）

国際会議「Hidden Dimensions: The Cultural Significance of Wetland Archaeology」への参加

1995年4月26日から30日まで、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で開催された低湿地学会の国際会議に出席し、大阪平野における沖積地の遺跡の変遷について発表を行った。この学会は、ジョン・コールズ氏を代表とするWetland Archaeology Research Project (WARP)との共催で、参加者は約200名ほどであった。従来紹介されることの少なかった西海岸の興味深い遺跡の発表が印象に残った。日本からは、低湿地遺跡の保存科学、三内丸山遺跡などの発表があった。（松井 章）

国際ガラス会議第17回大会への参加

国際ガラス会議第17回大会が1995年10月9日から14日まで、北京の国際会議センターで開催された。この会議はニューガラスから古代のガラスまで、ガラスに関するすべての分野を網羅するもので、3年毎に大会が開催される。今大会は40ヶ国から620の発表があり、予稿集は3800ページに達し、参加者は1000名をはるかに越える規模であった。肥塚は今回、「Archaeology, Archeometry of Glass」の部門で“CHEMICAL COMPOSITION OF ANCIENT GLASSES FOUND IN JAPAN”と“SCIENTIFIC STUDIES ON SEVERAL ANCIENT CHINESE GLASSES”と題して2件の口頭発表をおこなった。この会議ではガラスの科学的な研究を通して、古代ガラスの国際的な交易の実態解明に迫ることができる見通しを再確認することができ、今後日本の研究成果を世界に向けて発信する必要性を痛感した。なお、1998年はサンフランシスコで開催が予定されている。（肥塚隆保）

国際会議「縄文文化からスター・カーへ—後氷期におけるユーラシア大陸の狩猟採集文化」の開催

松井は1995年9月4日より10日まで、ケンブリッジ大学とダーラム大学においてユーラシア大陸の狩猟採集文化の比較研究をテーマに、「縄文文化からスター・カーへ」と題する国際会議を、サイモン・ケイナー、リリアナ・ヤニック（以上、ケンブリッジ大学）とピーター・ロウリー・コンウェイ（ダーラム大学）らと4名で共催した。本会議は、1993年に奈良国立文化財研究所が招聘したダーラム大学講師ピーター・ロウリー・コンウェイ氏が、日本の縄文文化に興味を示し、ヨーロッパと日本の研究者がそれぞれの研究成果について討議する機会を持ちたいと考えたの発端である。会議は約100名の参加者があり、そのうち日本人研究者が30名ほどを占め、日本人の少ない国際会議とは異色の構成となった。日本考古学の成果がこれほどの数、発表されたことはこれまでになかった。（松井 章）

公開講演会

白寿をむかえた文化財建造物の保存 明治30年古社寺保存法が制定され、わが国の本格的な文化財建造物の保存が始まる。以来今年で99年目、人間でいえば白寿をお祝いする年となった。社寺所有の建築に限られていた保存の対象も昭和4年の国宝保存法、昭和25年の文化財保護法と法律改正により拡大され、城郭、民家、洋風建築等もその対象となった。近年では鉄道施設、ゲム施設等の近代化遺産も指定されるようになり、現在約3500棟が重要文化財に指定されている。

修理工事報告書も昭和初年から発行されるようになり昭和30年代からは根本的な修理の時は必ず刊行されるようになった。現在約1200冊を数える。

以上のように重要文化財建造物の保存については手厚い保存措置が講じられてきた。今後は国民意識を含めた底辺の広い文化財建造物の保存措置が課題となるであろう。 (村田健一)

頭塔の発掘と復原 頭塔の復原整備に先立って行った発掘調査では頭塔に関する様々な事実が明らかになった。頭塔が石積の基壇上に立つ7段の階段状石積を本体とし、石積には瓦葺きの屋根がのるきわめて特殊な形態の仏塔であること。東西南北の各面にはそれぞれ11体の石仏が配されており、頂部中央には刹が地中から立ち上がっていたこと。塔本体内部には一時期古い、ひとまわり小さい頭塔があること、などである。本講演ではこれらの成果に基づく頭塔の復原案を紹介し、頭塔が一種の層塔であることを明らかにした。その結果、頭塔のルーツはこれまで言われてきたような、インドの塔を直接の起源とする考え方や、インドネシアのボロブドゥールの影響を受けたとする考えではなく、中国、朝鮮半島で発展した層塔の一形態であり、それを我が国においてさらに特殊な形態に発展させたものと考えた。また発掘成果を基にした復原整備の考え方と、実際の復原手法を紹介した。 (高瀬要一)

空中写真撮影の歴史 日本における本格的な空中写真撮影は、大正8年に来日した、フランス陸軍航空教育団による日本陸軍飛行隊への教育から始まった。フルリエ少佐の指導を受けた下志津飛行学校は、大正12年関東大震災後の復興計画のために東京市全域を撮影した。この成果により空中写真が都市計画に不可欠な情報源であるという認識が高まり、翌年には名古屋、京阪神地区などの大都市圏の撮影がおこなわれた。昭和に入ると伊勢神宮のある宇治山田市、橿原神宮周辺の神都計画などの国家事業のほかに、都市計画法の適用を受けた一般都市のために、空中写真の撮影が行われた。大正期から昭和初期は、撮影は、陸軍偵察飛行隊が演習の名目で民生協力した。昭和10年代からは、軍の偵察機の払下げを受け、空中写真の撮影を請負う会社が出現した。昭和12年軍機保護法が施行されてからは、空中写真は、軍の機密になり大阪市以外資料は、現在も秘匿されたままである。 (木全敬蔵)

イースター島・モアイの発掘 1995年、ユネスコ世界文化遺産にチリ国イースター島が決定した。

その指定申告書に「遺跡の調査、整備に日本の協力があった。」とあった。1992年から4年間、民間資金のメセナに協力し、多数の所員が参加した。島最大の遺跡・アフ・トンガリキは、1960年、チリ大地震の津波によって消失した。この祭壇のアフの上に座る15体のモアイの発掘、修復、再建のドキュメントを述べた。

(猪熊兼勝)



研究集会

-保存科学研究集会-

昨年度に引き続き、埋蔵文化財センター主催による保存科学研究集会を1996年2月9日、平城宮跡資料館講堂で開催した。今年度は「保存・修復をとりまく諸問題」を大テーマとして、出土金属器に焦点を絞り、現状と問題点について講演と討議をおこなった。

田辺昭三教授（京都造形芸術大学）の特別講演「保存科学に望むもの」では、自然科学分野と人文科学系の分野との連係の深化が、研究成果の質量をきめる重要な鍵となることが強調された。同時に、文化遺産を保護するという観点から、「遺物の保存科学」から脱皮して「保存科学を遺跡の修景・保存へ」と積極的に挑戦すべきことを提言された。引き続き、「鉄さびの構造」「海外における防錆処理」「江差町開陽丸遺跡出土の鉄製造物」「脱塩処理の現状」「出土鉄製品の脱塩処理」「金属遺物の脱塩処理」「日本における含浸樹脂の現状と課題」「新しい素材」「金属遺物の保存環境」「新しい遺物環境コントロール剤」の各テーマで10名の講演者により最近の研究成果が発表された。講演終了後にパネルディスカッションが行われ、各々のテーマについて活発な討論がなされた。なお今回の研究集会には約150名の参加者があり、保存科学に対する関心の深さを示していた。 （肥塚隆保・村上隆・高妻洋成）

-官営工房研究会-

1995年12月9日、第4回官営工房研究会を奈良国立文化財研究所本館小会議室において開催した。発表は宇野隆夫教授（富山大学）による「北陸における律令制的生産システム」と、渡辺晃宏による「官営工房の賃金支給システム」の2本で、15名の参加を得た。

これまでの研究会は、百萬塔工房、宮都付属瓦工房、写経所など、中央の手工業の各分野ごとに、個別実証的な分析を進めてきた。今回はやや視点を変え、地方工房と中央工房の一例としての造東大寺司工房とを総合的に対比することを意図した。しかし、宇野報告では、北陸の各種手工業の検討だけでなく、それを支えたシステムを集落遺跡との関連でとらえる新視角が提起され、渡辺報告では、これまで問題になった賃金支給方式についての新見解が提起された。そのため両報告を総合化・対比する当初計画は捨て、提起された新見地を中心にしてそれぞれ討論を深めた。当研究会も個別実証をふまえて、全体を通して総合化へと飛躍しようとしている。今回はその第1ステップである。なお、今回の集会の記録は『官営工房研究会会報4』(1996年12月)として公刊済である。 （上原真人）

-完新世における北方モンゴロイドの展開-

從来、伝播論的パラダイムの中で、考古資料・植物民族学の資料から、日本の基層文化における北方系要素の存在が指摘されることが多い。しかし、具体的に先史時代の北アジアの動向をふまえた上の論の展開は少ない。そこで、特にテーマを完新世以降に絞り、考古学と関連分野の成果を合わせ、北アジア先史社会について議論する研究集会を開催した。関連分野では風間伸次郎（言語学）が北アジアに広く分布するツングース諸語の音韻対応からの考察、石田肇（人類学）が頭骨の形態小変異に基づく北アジアの古人骨の概要、佐藤孝雄（動物考古学）がオホーツク海沿岸部の先史文化におけるイヌの2類型について報告した。考古学では、小畠弘己が埋葬から見た東シベリア新石器時代社会の考察、白石典之が北アジア新石器時代の年代上の問題点を報告した。報告をふまえ、言語学・人類学の集團の形成・移動仮説と考古資料との対応、北・東アジアの新石器時代編年の問題点について討議を行った。 （白井 熊）

-現生人類起源仮説を石器から考える-

本研究集会は新人アフリカ起源説の検討を目的として、1996年2月16・17日に行った。まず形質人類学の百々幸雄（東北大）が現生人類起源仮説の現状と問題点について報告した。これを中期旧石器の分布と変遷から検討するため、考古学の西秋良宏（東京大）が西アジア、森本晋がヨーロッパ、白石典之（新潟大）がシベリア、加藤真二が華北地方、柳田俊雄（郡山女子大）が日本列島の事例について報告した。さらに討論を経て、以下の成果を得た。①ヨーロッパにおける入れ替わり説は極端であり、縄文人と波来系弥生人との間のようなソフトな混血を考える方がよい。②新人アフリカ起源説は東・南アジアには当てはまらず、地域内進化と考えるのが妥当である。③ムスチエ文化のルバロア技法はモンゴルまで拡散したが、さらに南や東へは直接浸透しなかった。その主体者がネアンデルタール人か、現代型新人かは不明である。④ミトコンドリアDNAによる起源研究は、他分野の研究によってクロスチェックされるべきである。

（佐川正敏）

-生物高分子考古学研究会-

1996年2月9日、奈良国立文化財研究所本館小会議室において、考古資料に残る脂質（脂肪酸）分析、DNA分析の研究会を開催した。参加者は23名で、中野益男（帯広畜産大）、小林正史（北陸女子短期大）、藤田邦雄（金沢市教育委員会）、小山陽造（八戸工業高等専門学校）、石黒直隆（帯広畜産大）、杉山洋らの発表に基づいて討議を行った。討議では新しい分析によって従来の常識を覆される考古学の側の生半可な知識に基づく反論が印象に残った。近年、考古学における自然科学の応用が盛んで、新しい成果が次々と得られ、従来の説に反する場合が多くあるが、どのようにその齟齬を検証するか、互いの研究の姿勢が問われることを実感した。

（松井 章）

-遺跡の建造物復原方法の研究—意義と課題の検討-

近年、発掘された建築遺構から建造物が復原される例が増えている。建造物復原は遺跡を理解する方法として有効な手段ではあるが、まだ歴史が浅いこともあって、安易な復原や、意義・目的意識が明確でないものが少なくない。本研究は、建造物の遺跡の整備はどうあるべきかを、これまでの事例調査等を行うことによって、問題点、課題を整理し、今後の復原整備事業のあり方の方法をさぐるものである。本中真（文化庁記念物課）、江面嗣人（文化庁建造物課）、吉岡泰英（福井県立朝倉氏遺跡資料館）の諸氏にも研究に参加していただいた。本年度は3カ年計画の第1年次で、復原整備の実態調査を行った。事業主体、行政、設計監理、学術研究の各立場の担当者から現況をきく研究集会を1回開催するとともに、秋田県の城輪柵等10ヶ所の復原現場を調査した。

（村田健一）



保存科学研究集会



「竪穴住居の系譜」シンポジウム

-古代都城制研究集会 第1回「古代都城の儀礼空間と構造」-

古代都城の発掘成果は、ここ10年で膨大な蓄積があり、これまでの都城に関する知見を大幅にかえ、次の段階へ踏み出すための総括と、理論化にむけた模索が必要となっている。その準備段階として、調査担当者が、各都城に関する最新の成果を共通認識として持ち、問題点を整理する必要があると思う。こうした観点から、所内外の協力を得て都城制研究集会を企画した。

都城制の研究は問題点多岐にわたるので、焦点がぼやけないよう課題ごとに検討する必要がある。この会は第1回目として、古代政治史を再構成する上に重要な宮中枢部を取り上げ、これまでの調査成果のまとめと、その意味を考えることにした。日時は1996年1月20日(土)・21日(日)。会場は平城宮跡資料館講堂。集会の報告集として、『古代都城の儀礼空間と構造』を刊行した。(金子裕之)

-日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウムⅠ「竪穴住居の系譜」-

1995年の11月30日～12月1日の両日にわたり、表記のシンポジウムを開催した。会場は平城宮跡資料館講堂で、約30名の専門家のみによるクローズド・セッション形式のシンポジウムとした。発表者と内容は以下の通りである。

SESSION 1 日本の竪穴住居

報告1 宮本長二郎(東京国立文化財研究所)「竪穴住居の類型と変遷」

報告2 大塚昌彦(渋川市教育委員会)「土屋根をもつ竪穴住居～焼失家屋の語るもの」

コメント 工楽普通・岡田英男(奈良大学)

SESSION 2 極東の竪穴住居

報告1 大貫静夫(東京大学)「考古資料からみた極東の竪穴住居」

報告2 佐藤浩司(国立歴史民族博物館)「民族誌からみた北東アジア・北アメリカの竪穴住居」

報告3 浅川滋男「黒龍江ナナイ族の竪穴住居」

コメント 佐々木史郎(国立歴史民族博物館)・佐川正敏

SESSION 3 中国・朝鮮半島の竪穴住居

報告1 田中 淡(京都大学)「中国の穴居～類型と展開」

報告2 西谷 正(九州大学)「松菊里型住居の分布とその意味」

コメント 岡村秀典(京都大学)・都出比呂志(大阪大学)

総合討論

1996年度は、ひきつづき「平地住居と高床建物～掘立柱建物をめぐる諸問題」と題するシンポジウムを開催する予定である。(浅川滋男)

-東南アジア考古学の現状と課題-

当研究所においても、アンコール文化遺産保護共同研究事業や、特別研究南アジア仏教遺跡の研究などの進展に伴い、東南アジア各国の歴史や文化財の現状に対する基本的な知識が必要とされるようになってきた。こうした問題意識のもと、表記の研究会を1996年1月21日、奈良国立文化財研究所本館小会議室において開催した。

まず菊池誠一宇都宮大学講師がベトナム考古学の現状を紹介し、ベトナム考古学の時期区分と、各時期の概要の説明、ベトナムを代表する代表的な遺跡・遺物の紹介をスライドを用いて行った。次にタイ建築史について、成田剛早稲田大学助手がタイ各地における古建築の様式と変遷の概略に関する報告を行い、あわせてタイ芸術局による遺跡の修復と整備事業の現状を紹介した。(杉山 洋)

調査研究彙報

南都諸寺社所蔵典籍文書の調査研究 東大の史料編纂所と共同で継続して行っている薬師寺調査は、第25函～第27函の調書作成と第20函の写真撮影を行った（95年7月）。80年間以上の分の修二月会壇供支配状が連券として連綿として貼り継がれたものや富くじ関係資料など江戸時代の薬師寺の実態を示す興味深い資料がみられる。また法隆寺文書を継続して調査し、「興福寺典籍文書目録第2巻」を刊行した。その他西大寺一切経の調査に参加した。また、調査成果のDB化（薬師寺と京都仁和寺分）を継続して行っている。

（歴史研究室）

その他の典籍文書の調査研究 醍醐寺文書の写真撮影（95年8月）を行い、第18函分を完了した。文化庁所蔵品の「内家／私印」のある瑜伽師地論等の撮影（96年3月）も実施した。また、石山寺聖教典籍・永源寺文書（滋賀）、興聖寺一切経（京都）などの調査に参加協力し、文化庁美工の指定関連調査（醍醐寺文書、井伊家文書、冷泉家典籍、東大寺修二月会資料）に協力した。

（歴史研究室）

桂離宮の発掘調査 桂離宮（京都市西京区）の庭園基本整備工事にともなう発掘調査を、宮内庁京都事務所の委嘱により、平成6年度から実施している。平成7年度は、神仙島の護岸石組・笑意軒前の2基の階段・賞花亭下の織部灯籠など、修理予定箇所に小トレンチを設定して調査をおこなった。このうち、笑意軒前の2基の階段については、最下段の踏み石がほとんど磨耗しておらず、築造後間もない時期に埋没したものと推定できた。また、織部灯籠は、竿に彫刻された人物像の全貌が明らかになり、そのほかの特徴とも併せて、1640年代前後の制作と推定できた。これは智忠親王による第二期造営工事の時期と一致する。

（小野健吉・小澤毅）

文化遺産の地域特性 文化遺産の地域特性に関する第一回の研究会を「琉球の文化遺産の保存と整備」をテーマに平成7年10月19日、奈良国立文化財研究所小会議室において開催した。沖縄から参加された当真嗣一（沖縄県立博物館課長）・上原静（沖縄県文化課係長）・福島駿介（琉球大学工学部教授）・末吉栄三（設計事務所主宰）・山口洋子（あい造園沖縄事務所長）各氏の話題提供をもとに討論を行った。沖縄は、グスク・ムイ・ウタキ・カーなどの文化遺産がかなりの部分日常生活のなかに生きており、今後の都市整備や地域整備・道跡整備に際してそれらの文化遺産と市民の日常的関わりの関係を断ち切らないようにすることを確認した。

（加藤允彦）

名勝旧大乗院庭園の整備 諸日本ナショナルトラストが国庫補助を受けて実施する名勝旧大乗院庭園の整備は今年度から、大乗院庭園の本格的な発掘調査を年次計画にしたがって実施し、調査成果に則って主として江戸時代の庭園遺構の整備を順次実施することになった。今年度の発掘調査は池の南岸部と東岸南部の一部約600m²を調査した。平成7年度の整備対象範囲は園池の南岸部（東西53m、約600m²）である。指定地南部の敷地境界は、西半部は民家の堀、東半部は大乗院庭園文化館となつており、調査で確認された汀線からそれぞれの境界までは数mしか離れていない。特に大乗院庭園文化館は大乗院庭園の活用を目的に建設された施設である。そこで整備の汀線の平面形状は、西半部は遺構を保護する分だけ汀線を北に約2m寄せ、東半部は大乗院庭園文化館の活用上必要最小限の広さを確保するため6m汀線を北に寄せ、西半部と東半部のすりつけは検出汀線が北へ少々屈曲するところを利用して違和感のないように東西の汀線を連続させることとした。また、汀線護岸部の施工仕様は次のとおりである。まず、汀線の範囲約2m幅で粘土を叩き締め、計画水位高で地盤のずれと浸食の防止を兼ねた杭丸太を打ち込む。次に、粘土上面に径15cm程の石を撒いて軽く叩き込み、その上に径3～5cm程の石を撒き小石による渕浜状の化粧とした。そのほか地被は野芝とし、移植仮植えの松や梅・カエデなどの植栽により若干の修景を行なった。

（加藤允彦）

奈良国立文化財研究所要綱

I. 事業概要

1. 研究普及事業

公開講演会

- (1) 1995年5月27日 第76回公開講演会
 「白寿をむかえた文化財建造物の保存」 村田健一
 「須塔の発掘と復原」 高瀬要一
- (2) 1995年8月26日 水落道跡に関する講演会
 「飛鳥・藤原宮跡発掘調査部」
 「飛鳥の水時計」 猪熊兼勝
 「水時計の発掘」 西口壽生
- (3) 1995年10月28日 第77回公開講演会
 「イースター島・モアイの発掘」 猪熊兼勝
 退官記念講演会
 「空中写真撮影の歴史」 木全敬藏

現地説明会等

- (1) 1995年5月5日～7日 朱雀門建設現場特別公開
 (2) 1995年6月3日 平城宮跡第250次(造酒司)

白井 燕

- (3) 1995年6月17日 藤原宮跡第78次(東方官衙地区)
 松村忠司
 (4) 1995年8月26日 水落道跡第8次 畿淳一郎
 (5) 1995年9月9日 平城宮跡第259次(造酒司) 加藤真二
 (6) 1995年11月3～5日 朱雀門建設現場特別公開
 (7) 1995年11月30日・12月1日 平城宮跡第261次
 (朝堂院第六堂) 玉田芳英
 (8) 1995年12月9日 平城宮跡第263次(菜師寺講堂) 寺崎保広
 (9) 1996年3月23日 本薬師寺西塔跡 千田剛道
 (10) 1996年3月30日 平城宮跡第265次(第二次朝堂院
 南門) 渡邊晃宏

平城宮跡資料館・遺構展示館(見学者数)

区分	資料館	遺構展示館	計
1995年	62,922	66,555	129,477
累計	1,417,936	1,760,981	3,178,917

資料館は1970年度、遺構展示館は1963年度以降の累計

2. 1995年文部省科学研究費補助金による研究

新規	種 目	研 究 課 題	研究代表者	交付額(千円)
新	重点領域(I)	遺跡探査法の総合的開発研究	西村 康	16,800
新	重点領域(2)	集落・埋納遺跡の探査	西村 康	9,600
新	"	航空写真情報データベース(NARS)新検索法の開発研究	伊東 太作	2,300
新	"	石器属性の数量化	森本 晋	1,800
新	一般研究(A)	トレイ遺構の総合的研究	黒崎 直	9,900
新	一般研究(B)	當時微動測定による古建築の構造安定性に関する研究	内田 昭人	1,300
新	一般研究(C)	和鏡の生産と流通—出土鏡・鋳造遺跡からみた考古学的考察—	杉山 洋	500
新	"	古代度量衡の系譜	西口 壽生	600
新	"	古代の地方末端における官衙道跡の研究	山中 敏史	300
新	"	弥生時代と古墳時代の祭祀の比較研究	岩永省三	500
新	"	画家による近代和風庭園の系譜	小野 健吉	600
新	"	古代東アジアにおける冠位制度の考古学的研究	毛利光俊彦	1,200
新	"	北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究	浅川滋男	1,200
新	"	古代の金製および銀製金工品の材質と製作技法に関する材料科学的研究	村上 隆	600
新	"	東アジアにおける古代ガラスの材質変遷からみた交易・流通システム	肥塚 隆保	1,100
新	"	DNA鑑定を用いた出土埋没樹幹の樹種同定によるメタセコイアの古生態に関する研究	光谷 拓実	1,600
新	奨励研究(A)	日本古代情報伝達メディアの研究	渡邊晃宏	1,000
新	"	律令制都城における建物配置の規格性の研究	小澤 耕	900
新	"	古墳時代土師器にみられる地域間交流に関する基礎的研究	次山 淳	900
新	研究成果公開促進費	二条大路木簡データベース	町田 章	5,900
新	国際学術研究	日本都城と中国都城との出土文物による比較研究	田中 琢	9,100
計				67,700

重点領域(1)	(新規)	1件	一般研究(B)	(継続)	1件	奨励研究(A)	(新規)	3件
重点領域(2)	(新規)	3件	一般研究(C)	(継続)	7件	研究成果公開促進費	(新規)	1件
一般研究(A)	(新規)	1件	一般研究(C)	(新規)	3件	国際学術研究	(新規)	1件
						計		21件

3. 飛鳥資料館の運営

展示

第一展示室
常設展示

特別展示等

特別展示室

春期特別展示「古代の形」—飛鳥・藤原の文様を追う—

1995.3.29～5.21 (54日間)

秋期特別展示「蘇我三代」

1995.10.7～11.26 (51日間)

特別講演会

1995年4月15日

「渡来龍紋の変遷」

町田 章

1995年5月13日

「シルクロードと飛鳥の文様」

山本忠尚

1995年10月21日

「蘇我馬子と彼をめぐる人たち」

門脇慎二

1995年11月11日

4. 埋蔵文化財センターの研修・指導

研修

埋蔵文化財の保護に資することを目的として主に地

「蘇我氏の墓」

普及

インフォメーションルームにおいて観覧者の質問に応じている。特別展示の刊行物として「古代の形—飛鳥・藤原の文様を追う—」及び「蘇我三代」を刊行した。

猪熊兼勝

入館者数 (1995.4.1～1996.3.31 開館日数319日)

区分	個人観覧	団体観覧	有料	無料	合計
一般	30,324	10,428			
高・大生	3,875	10,845			
小・中生	7,328	23,685	86,485	6,927	93,412
計	41,527	44,958			

陳列品購入

石舞台古墳復原模型

人頭石模刻

方共公団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

区分	課程	内 容	担 当 室	実施期日	研修日数	修了者数
一般研修	一般課程	遺跡の発掘調査に関する基本的な知識と技術の研修	研究指導部	7月4日～8月9日	37	37
専門研修	遺跡探査課程	遺物の探査に必要な専門的知識と技術の研修	測量研究室	5月9日～5月18日	10	14
	文化財写真課程	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	情報資料室	8月17日～9月13日	28	20
	遺跡測量課程	遺跡の測量に関して必要な専門的知識と技術の研修	発掘技術研究室	9月20日～10月18日	29	16
	保存科学基礎課程	遺物の保存に関する保存科学的な基礎知識と技術の研修	遺物処理研究室	11月7日～11月17日	11	16
	環境考古課程	環境考古復原研究のために必要な専門的知識と技術の研修	考古計画研究室	11月28日～12月15日	18	20
	寺院官衙遺跡調査過程	古代寺院・官衙遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	集落遺跡研究室	1月10日～1月25日	16	30
	保存科学応用課程	遺物の保存に関する保存科学的な応用知識と技術の研修	遺物処理研究室	1月31日～2月7日	8	16
	遺跡保存整備課程	遺跡の整備に関して必要な専門的知識と技術の研修	保存工学研究室	2月14日～3月8日	24	16
特別研修	埋蔵文化財基礎課程	埋蔵文化財行政を担当するうえで必要な遺跡・遺物に関する基礎的知識の研修	保存工学研究室	6月13日～6月21日	9	35
	人骨調査課程	遺跡から出土した人骨の調査に関して必要な基礎的知識の研修	研究指導部	3月14日～3月22日	9	20
	外国人研修	日本の文化財と日本の特色ある調査・研究方法の知識の研修	研究指導部	6月1日～6月5日	6	14

外国研究者等招聘・受入一覧

氏名	所属・職	招聘・受入期間	研究・研修内容
Per Hoffmann	ドイツ国立海洋博物館 保存科学部長	1995.4.4～1995.4.13	保存科学研究（国際交流基金）
H. P. Blankholm	ノルウェー トロムソ大学 講師	1995.4.9～1995.4.15	考古学研究（日本学術振興会）
韓炳三	大韓民国文化財委員	1995.5.10～1995.5.13	南アジア仏教遺跡特別研究
在外外国人研究者	カナダ、他	1995.6.1～1995.6.5	外国人対象日本考古学研修
姜大一	大韓民国文化財研究所 専門委員	1995.7.14～1995.9.25	保存科学研究
Armin Schmit	イギリス ブラッドフォード大学 教授	1995.9.26～1995.10.16	考古学研究
U Myint Soe Aung	ミャンマー文化省考古学局 助手	1995.10.1～1995.11.21	南アジア仏教遺跡特別研究
U Naing Win	ミャンマー文化省考古学局 助手	1995.10.1～1995.11.21	南アジア仏教遺跡特別研究
Prak Sonnara	カンボジア 王立芸術大学 学生	1995.10.1～1995.12.29	アンコールワット遺跡共同研究
Ea Darith	カンボジア 王立芸術大学 学生	1995.10.1～1995.12.29	アンコールワット遺跡共同研究
John Kwest Addai	ガーナ ガーナ遺跡博物館	1995.11.1～1996.1.15	国際交流基金
鄭起正	大韓民国文化財研究所 研究員	1995.11.1～1995.12.28	博物館における保存科学
龐在恩	大韓民国文化財研究所 学芸研究士	1995.11.6～1995.11.14	保存科学研究
L.S. Marsadorov	ロシア エルミタージュ博物館 研究員	1995.11.7～1995.11.27	共同研究
朴智善	大韓民国 端斎文化財保存研究所 研究員	1995.11.21～1995.11.27	保存科学研究
V.L. Yanin	ロシア モスクワ大学 教授	1995.11.23～1995.12.7	考古学・歴史学研究
L.A. Ryvina	ロシア モスクワ大学 教授	1995.11.23～1995.12.7	考古学・歴史学研究
任式楠	中国社会科学院考古研究所 所長	1995.11.24～1995.12.14	都城遺跡研究
金容民	大韓民国 慶州文化財研究所 研究員	1995.11.24～1995.11.27	考古学研究
張正男	大韓民国 慶州文化財研究所 研究員	1995.11.24～1995.11.27	考古学研究
外国人研修者	ラオス、タイ他	1995.11.27～1995.12.1	博物館学研修
李容喜	大韓民国國立中央博物館 研究員	1995.12.4～1995.12.18	保存科学研究
Ashley Tompson	カンボジア王立芸術大学 講師	1995.12.6～1995.12.18	アンコールワット遺跡共同研究
姜大一	大韓民国文化財研究所 専門委員	1995.12.25～1995.12.29	文化財保存管理研究
安榮喜	大韓民国文化財研究所 司書主事補	1995.12.25～1995.12.29	文化財保存管理研究
李蘭英	大韓民国文化財研究所 学芸研究士	1995.12.25～1995.12.29	文化財保存管理研究
安覩濬	大韓民国文化財研究所 研究員	1995.12.25～1995.12.29	文化財保存管理研究
Gregory N. Tsokas	ギリシャ テッサロニキ大学 講師	1996.1.27～1996.2.2	考古遺跡探査研究
V.A. Deryugin	ロシア文部省 考古学担当主任研究官	1996.1.29～1996.2.9	考古学研究
Y.N. Nikitin	ロシア科学アカデミー極東支部 研究員	1996.1.29～1996.2.19	考古学研究
Peter J. Reynolds	イギリス パツツアー古代実験農場 所長	1996.3.4～1996.3.16	実験考古学研究
張慶浩	大韓民国文化財研究所 所長	1996.3.25～1996.3.29	建築史学研究

発掘調査・保存整備等指導

北海道 ピリカ遺跡 手宮洞窟 常呂遺跡 福山城
 青森 三内丸山遺跡 高屋敷遺跡
 岩手 御所野遺跡
 宮城 多賀城跡 赤井遺跡
 秋田 私田櫻跡 秋田城跡
 福島 慧日寺跡 二本松城跡 根岸遺跡
 茨城 平沢官衙遺跡
 栃木 郡須官衙関連遺跡 法界寺跡 飛山城跡
 神奈川 永福寺跡
 新潟 長ヶ原原遺跡

富山 北代遺跡
 石川 七尾城跡調査 須曾坂夷穴古墳 横江莊遺跡
 岐阜 丹波大塚古墳 江馬氏館跡 杉崎庵寺 弥勒寺跡
 寺跡 高山城跡 市内遺跡
 静岡 遠江国分寺 横須賀城跡 片山庵寺跡 大知波岬寺跡 時間田城跡
 愛知 三河国分寺跡 稲沢市内遺跡 市道遺跡
 三重 長者屋敷遺跡 城之越遺跡 赤木城跡 田平子崎刑場跡
 滋賀 大岩山古墳 安土城跡 木村古墳群 内野遺跡
 諸兵主神庭園 穴太庵寺跡 南滋賀遺跡

- 近江国府調査 大波峰廃寺跡 坂本里坊庭園
 京都 物集女車塚古墳 高台寺庭園 麗苑寺庭園
 平等院庭園 丹波国分寺
- 大阪 金山古墳 心合寺山古墳 難波宮跡
 兵庫 桃快道跡 篠山城跡 広渡庵寺跡 赤穂城
 西条古墳群 宮内遺跡 行者塚古墳 八反田
 遺跡 新宮東山古墳群 中谷四号窓跡 大市
 山遺跡
- 奈良 酒船石遺跡 大乘院庭園 頭塔
 鳥取 梶山古墳 不入岡遺跡 尾高朝山遺跡 上淀
 麗苑寺跡 伯耆國守跡 富繁渡り上りがり遺跡
- 島根 後田谷V遺跡
 岡山 岡山城跡 鬼城山第一城門 松山城跡
- 広島 吉元春館 中世城館遺跡 草戸千軒町
- 山口 長登銅山跡 陶窯跡群 大内氏遺跡 仁馬山古墳
- 香川 讀岐國分寺跡 有岡古墳群 弘福寺領讀岐國
 山田郡園 丸亀城跡
- 愛媛 葦佐池古墳 三河国府跡 来庵寺跡
- 高知 比江廃寺跡
- 福岡 大野城跡 鴻臚館跡 平塚川添遺跡 仙道古墳
- 佐賀 名護屋城
- 長崎 鷹島海底遺跡 原城跡調査 原の注遺跡
- 熊本 柳町遺跡
- 大分 亀塚古墳 下郡遺跡 カワラガマ遺跡 中津
 地区遺跡群 安岡寺集落遺跡 沖代条里跡
 関連遺跡
- 長崎 国衙・都衙・古寺跡範囲確認調査
- 鹿児島 国分市上野原遺跡
- 沖縄 念城城跡 識名園 仲原遺跡 今帰仁城跡
 フルスト原遺跡
- 埋蔵文化財ニュース刊行**
- 第79号 1991年度 埋蔵文化財関係統計資料
- 第80号 あからくもうすぐ1年 阪神・淡路大震災と
 埋蔵文化財
- 第81号 古代地方官衙移籍関係文献目録
- 5. その他**
- 委員会等**
- 第22回飛鳥資料館運営協議会
 1995年5月17日 於：飛鳥資料館
 平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会
 1995年6月8・9日 於：平城宮跡資料館講堂
- 国外出張**
- 沢田正昭 出土漆製品の保存科学的共同研究の打ち合
 わせのため、大韓民国へ出張
 1995年4月18日～1995年4月23日
- 松井 章 「低湿地国際研究集会」出席及び調査研究
 のため、カナダへ出張
 1995年4月26日～1995年5月10日
- 小野健吉 交河故城保存修復及び中国庭園に関する研
 究のため、中華人民共和国へ出張
 1995年5月20日～1995年6月4日
- 猪熊兼勝 バジリク文化古墳群に関する共同研究のた
 め、大韓民国へ出張
- 1995年5月23日～1995年5月26日
 村上 隆 「鍍金された金属文化財に関するシンポジ
 ュム」出席のため、アメリカ合衆国へ出張
 1995年6月2日～1995年6月11日
 猪熊兼勝 「イースター島アフトンガリキ遺跡調査整
 備会議」出席のため、チリ共和国へ出張
 1995年6月21日～1995年6月29日
 工楽普通 新昌洞遺跡に関する調査研究のため、大韓
 民国へ出張
 1995年7月4日～1995年7月7日
 西村 康 アンコールワット文化遺産保護共同研究の
 ため、カンボジアへ出張
 1995年7月3日～1995年7月15日
 杉山 洋 アンコールワット文化遺産保護共同研究の
 ため、カンボジアへ出張
 1995年7月3日～1995年7月15日
 沢田正昭 バジリク文化古墳群に関する共同研究のた
 め、ロシアへ出張
 1995年7月10日～1995年7月19日
 肥塚隆保 バジリク文化古墳群に関する共同研究のた
 め、ロシアへ出張
 1995年7月10日～1995年7月19日
 白井 勤 中国古代北方遊牧民族文化に関する調査研
 究のため、中華人民共和国へ出張
 1995年7月15日～1995年7月25日
 町田 章 1995年度日中共同研究予備調査のため、中
 華人民共和国へ出張
 1995年7月20日～1995年7月25日
 浅川温男 黒龍江流域におけるツングース系諸民族住
 居に関する調査研究のため、中華人民共和国へ出張
 1995年7月20日～1995年7月29日
 佃 幹雄 韓国主要遺跡踏査と埋蔵文化財に関する意
 見交換及び遺跡・遺物の撮影法についての講演のた
 め、大韓民国へ出張
 1995年7月23日～1995年7月29日
 花谷 清 アンコールワット文化遺産保護共同研究の
 ため、カンボジアへ出張
 1995年7月30日～1995年8月17日
 工楽普通 初期稲作遺跡出土品及び漆製品に関する調
 査研究、漆製品の材質技法に関する調査研究のため、
 台湾へ出張
 1995年8月21日～1995年8月24日
 沢田正昭 初期稲作遺跡出土品及び漆製品に関する調
 査研究、漆製品の材質技法に関する調査研究のため、
 台湾へ出張
 1995年8月21日～1995年8月24日
 村田健一 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、
 中華人民共和国へ出張
 1995年8月24日～1995年9月7日
 浅川温男 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、
 中華人民共和国へ出張
 1995年8月24日～1995年9月7日
 猪熊兼勝 韓国文化財の修理と展示法に関する調査研
 究のため、大韓民国へ出張
 1995年8月27日～1995年8月30日
 松井 章 国際会議「縄文文化からスターカーへ」出

- 庶及び調査研究のため、イギリスへ出張
1995年8月28日～1995年9月13日
- 西村 康 「国際考古探査学会」出席及び調査研究のため、イギリスへ出張
1995年8月31日～1995年9月18日
- 猪熊兼勝 「韓・日地方文化シンポジウム」出席及び調査研究のため、大韓民国へ出張
1995年9月20日～1995年9月26日
- 沢田正昭 唐代壁画の保存修復に関する共同研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月3日～1995年10月10日
- 村上 隆 唐代壁画の保存修復に関する共同研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月3日～1995年10月8日
- 町田 章 「西安大明宮含元殿発掘事業会議」出席のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月5日～1995年10月10日
- 肥塚隆保 「国際ガラス学会第17回大会」出席のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月9日～1995年10月15日
- 木村 勉 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月16日～1995年10月26日
- 松村恵司 「伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月16日～1995年10月26日
- 立木 修 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月16日～1995年10月26日
- 岩永省三 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月16日～1995年10月26日
- 内田和伸 「伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月16日～1995年10月26日
- 長尾 光 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月16日～1995年10月26日
- 加藤真二 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年10月16日～1995年11月9日
- 松井 章 国際会議「前近代日本の社会史」出席及び調査研究のため、アメリカ合衆国へ出張
1995年10月23日～1995年11月5日
- 佐川正敏 日本都城と中国都城との出土文物による比較研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年11月2日～1995年11月16日
- 井上直夫 日本都城と中国都城との出土文物による比較研究のため、中華人民共和国へ出張
1995年11月2日～1995年11月16日
- 西村 康 大韓民国慶州地域遺跡探査共同研究のため、大韓民国へ出張
1995年11月5日～1995年11月10日
- 山崎信二 エジプト・エーゲ文明の研究のため、エジプト・トルコ・ギリシャへ出張
1995年11月5日～1996年1月25日
- 町田 章 国際会議「加耶諸國の王權」出席及び研究調査のため、大韓民国へ出張
1995年11月9日～1995年11月14日
- 島田敏男 ICCROM国際建築修復コース参加及び研究調査のため、イギリス・イタリア・スウェーデン・オランダ・ベルギー・フランス・スペイン・ギリシャ・トルコへ出張
1995年11月17日～1996年6月4日
- 山中敏史 パジリク文化古墳群に関する共同研究のため、大韓民国へ出張
1995年11月27日～1995年12月7日
- 肥塚隆保 考古遺物の保存科学的研究の技術交流のため、大韓民国へ出張
1995年11月30日～1995年12月2日
- 工業普通 韓国出土木製品の調査研究のため、大韓民国へ出張
1995年12月3日～1995年12月8日
- 黒崎 直 韓国出土木製品の調査研究のため、大韓民国へ出張
1995年12月3日～1995年12月8日
- 肥塚隆保 タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存対策に関する現地調査のため、タイへ出張
1995年12月5日～1995年12月15日
- 西村 康 草鞋山遺跡の現地調査のため中華人民共和国へ出張
1995年12月11日～1995年12月20日
- 猪熊兼勝 南アジア仏教遺跡に関する調査研究のため、ミャンマーへ出張
1996年1月13日～1996年1月26日
- 高瀬要一 南アジア仏教遺跡に関する調査研究のため、ミャンマーへ出張
1996年1月13日～1996年1月26日
- 上原真人 南アジア仏教遺跡に関する調査研究のため、ミャンマーへ出張
1996年1月13日～1996年1月26日
- 森本 晋 南アジア仏教遺跡に関する調査研究のため、ミャンマーへ出張
1996年1月13日～1996年1月26日
- 猪熊兼勝 古代韓日衣服の比較研究のため、大韓民国へ出張
1996年2月12日～1996年2月15日
- 花谷 清 アンコールワット文化遺産保護共同研究のため、カンボジアへ出張
1996年3月1日～1996年3月11日
- 町田 章 日本都城と中国都城との出土文物による比較研究のため、中華人民共和国へ出張
1996年3月5日～1996年3月12日
- 佐川正敏 日本都城と中国都城との出土文物による比較研究のため、中華人民共和国へ出張
1996年3月5日～1996年3月12日
- 沢田正昭 唐代壁画の保存修復に関する共同研究のため、中華人民共和国へ出張
1996年3月5日～1996年3月12日
- 肥塚隆保 唐代壁画の保存修復に関する共同研究のため、中華人民共和国へ出張
1996年3月5日～1996年3月12日

玉田芳英 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、
中華人民共和国へ出張

1996年3月5日～1996年3月23日

小澤 純 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、
中華人民共和国へ出張

1996年3月5日～1996年3月23日

牛嶋 茂 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、
中華人民共和国へ出張

1996年3月5日～1996年3月23日

西村 康 アンコールワット文化遺産保護共同研究の
ため、カンボジアへ出張

1996年3月9日～1996年3月23日

杉山 洋 アンコールワット文化遺産保護共同研究の
ため、カンボジアへ出張

1996年3月9日～1996年3月18日

森本 晋 石器分析法の研究のため、フランスへ出張

1996年3月18日～1996年6月17日

金子裕之 バシリク文化古墳群に関する共同研究のた
め、大韓民国へ出張

1996年3月25日～1996年3月28日

協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収事務を担当しているが、1995年度の状況は下記のとおりである。

区分	面積	金額
1995年度	5,835.00	279,998,924
国有地合計	355,044.86	25,529,144,998

Ⅰ. 図書及び資料

図書 158、532冊 (1996.3.31)

区分	種別	購入	寄贈	計
1995年度	和漢書	1,974	5,264	7,238
	洋書	77	77	154
累計	和漢書	56,770	93,906	150,676
	洋書	5,944	1,912	7,856

写真 559,422 (1995年度末)

Ⅲ. 研究成果刊行物

1. 1995年度刊行物

名 称	
史 料	第42冊 平城宮木簡五
	第43冊 曽谷貝塚資料—山内清男考古史料7—
	第44冊 興福寺典籍文書目録第二卷
報告書等	1994年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報
	飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報25
	平城宮発掘調査出土木簡概報30
	平城宮発掘調査出土木簡概報31
	橋津の蓄蔵調査報告書
国 錄	第28冊 藤原三代
	平城宮跡資料館図録

2. 前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名 称
1954	第1冊 仏師蓮慶の研究
	第2冊 修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊 文化史論叢
1956	第4冊 奈良時代僧房の研究
1957	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊 中世庭園文化史
	第7冊 兴福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊 文化史論叢 I
	第9冊 川原寺発掘調査報告
1960	第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発 掘調査報告
1961	第11冊 院の御所と御堂—院家建築の研究—
1962	巧匠阿弥陀仏快慶
	第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察
	第14冊 唐招提寺藏「レース」と「金龟舍利塔」 に関する研究
	第15冊 平城宮発掘調査報告 II
	官衙地域の調査
1963	第16冊 平城宮発掘調査報告 III
	内裏地域の調査
1965	第17冊 平城宮発掘調査報告 IV
	官衙地域の調査
	第18冊 小堀遠州の作事
1967	第19冊 藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊 名物製の成立
1971	第21冊 研究論集 I
1973	第22冊 研究論集 II
1974	第23冊 平城宮発掘調査報告 VI
	平城京左京一条三坊の調査
	第24冊 高山一町並調査報告一
1975	第25冊 平城京左京三条二坊
	第26冊 平城宮発掘調査報告 VII
	第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I
	第28冊 研究論集 III
	第29冊 本曾奈良井一町並調査の記録一
1976	第30冊 五條一町並調査の記録一
1977	第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II
	第32冊 研究論集 IV
	第33冊 イタリア中部の一山岳集落における 民家調査報告
	第34冊 平城宮発掘調査報告 IX
1978	第35冊 研究論集 V
	第36冊 平城宮整備調査報告 I
1979	第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III
	第38冊 研究論集 VI
1980	第39冊 平城宮発掘調査報告 X
1981	第40冊 平城宮発掘調査報告 XI
1984	第41冊 研究論集 VII
	第42冊 平城宮発掘調査報告 XIII
	第43冊 日本における近世民家（農家）の系 統的發展
1985	第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報

	告
1986	第45冊 薬師寺発掘調査報告
1988	第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書
	第47冊 研究論集Ⅶ
1990	第48冊 年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—
	第49冊 研究論集Ⅸ
	第50冊 平城宮跡発掘調査報告書X III
1992	第51冊 平城宮跡発掘調査報告書X IV
	第52冊 西隆寺発掘調査報告書
1993	第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究
1994	第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊一長星王邸・藤原麻呂邸—発掘調査報告
	第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV—飛鳥水落遺跡の調査—

奈良国立文化財研究所史料

年度	名 称
1954	第1冊 南無阿弥陀仏作善集(複製)
1955	第2冊 西大寺叡尊伝記集成
1963	第3冊 仁和寺史料 寺誌編I
1964	第4冊 俊坊重源史料集成
1966	第5冊 平城宮木簡 I 國版
1967	第6冊 仁和寺史料 寺誌編II
1969	第5冊 平城宮木簡 I 解説(別冊)
1970	第7冊 唐招提寺史料 I
1974	第8冊 平城宮木簡 II 國版・解説 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録I
1975	第10冊 日本美術院彫刻等修理記録II
1976	第11冊 日本美術院彫刻等修理記録III
1977	第12冊 藤原宮木簡 I 國版・解説 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録IV
1978	第14冊 日本美術院彫刻等修理記録V 第15冊 東大寺文書目録第1卷
1979	第16冊 日本美術院彫刻等修理記録VI 第17冊 平城宮木簡 III 國版・解説 第18冊 藤原宮木簡 II 國版・解説 第19冊 東大寺文書目録第2卷
1980	第20冊 日本美術院彫刻等修理記録VII 第21冊 東大寺文書目録第3卷
1981	第22冊 七大寺巡礼私記 第23冊 東大寺文書目録第4卷
1982	第24冊 東大寺文書目録第5卷 第25冊 平城宮出土墨書き土器集成 I
1983	第26冊 東大寺文書目録第6卷
1984	第27冊 木器集成図録—近畿古代編—
1985	第28冊 平城宮木簡 IV 國版・解説 第29冊 兴福寺典籍文書目録第1卷
1988	第30冊 山内清男考古資料1 真福寺貝塚資料他 第31冊 平城宮出土墨書き土器集成 II
1989	第32冊 山内清男考古資料2
1991	第33冊 山内清男考古資料3 第34冊 山内清男考古資料4

第35冊	山内清男考古資料5
1992	第36冊 木器集成図録—近畿原始編—
	第37冊 梵鐘実測図集成 (上)
1993	第38冊 梵鐘実測図集成 (下)
	第39冊 山内清男考古資料6
1994	第40冊 山田寺出土建築部材集成
	第41冊 平城京木簡—

奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名 称
1973	第1冊 瓦編 I 解説
1974	第2冊 瓦編 II 解説
1975	第3冊 瓦編 III
1976	第4冊 瓦編 IV
	第5冊 瓦編 V
1978	第6冊 瓦編 VI
1979	第7冊 瓦編 VII
1980	第8冊 瓦編 VIII
1983	第9冊 瓦編 IX

飛鳥資料館図録

年度	名 称
1976	第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏
	第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇
1977	第3冊 日本古代の墓誌
1978	第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇
	第5冊 古代の誕生仏
1979	第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—
1980	第7冊 日本古代の鶴尾
1981	第8冊 山田寺展
1982	第9冊 高松塚拾年
1983	第10冊 渡来人の寺—桧隈寺と坂田寺—
	第11冊 飛鳥の水時計
	第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—
1984	第13冊 藤原—半世紀にわたる調査と研究—
1985	第14冊 日本と韓国との塑像
	第15冊 飛鳥寺
1986	第16冊 飛鳥の石造物
1987	第17冊 萬葉乃衣食住
	第18冊 王巾の乱
1988	第19冊 古墳を科学する
	第20冊 聖徳太子の世界
1989	第21冊 仏舍利埋納
	第22冊 法隆寺金堂壁画飛天
1990	第23冊 日本書紀を掘る
1991	第24冊 飛鳥時代の埋藏文化財に関する一考察
	第25冊 飛鳥の源流
1992	第26冊 飛鳥の工房
1994	第27冊 古代の形

W. 定 員

区 分	指定職	行政職(-)	行政職(○)	研究職	計
1995年度	1	22	1	62	86
1996年度	1	22	1	61	85

V. 予 算 (1995年度)

人件費	691,448千円
運営費	1,321,679
事業管理	7,476
一般研究	63,216
特別研究	325,763
発掘調査	554,901
宮跡整備管理	73,296
飛鳥資料館運営	52,326
埋蔵文化財センター運営	73,369
本庁舎維持管理等経費	147,328
飛鳥藤原宮跡発掘調査部運営	24,004
施設費	1,374,678
平城宮跡等整備費	1,366,753
各所修繕費	7,925
計	3,387,805

平城宮跡東院正殿復原等工事	303,850
平城宮跡東院復原平成7年度工事	117,729
平城宮跡宮内省築地等復原工事	82,400
平城宮跡東方官衙地区整備平成7年度工事	56,753
藤原宮跡環境整備平成7年度工事	11,330
(2) 施設整備費	
平城資料館会議室等改修工事	93,472
本庁舎電源改修工事	52,221
研修棟空調改修工事	48,410
平城宮跡東院南門害根復旧等工事	26,162
(3) その他 (各所修繕、国有文化財保存整備費)	
特別史跡山田寺跡整備平成7年度工事	83,430
平城宮跡第3叢蔵庫木器整理室他排水改修工事	1,184

*は建設省支出委任工事

VI. 施 設 (会計課)

土 地

奈良国立文化財研究所所管	47,890m ²
本庁舎	8,860m ²
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	20,515m ²
飛鳥資料館	17,092m ²
郡山宿舎(一)	80m ²
飛鳥資料館宿舎	1,343m ²
文化庁所管(関係分)	1,451,058m ²
平城宮跡地区	1,085,675m ²
藤原宮跡地区	360,342m ²
飛鳥穂瀬宮殿跡地区	5,041m ²

建 物

1. 庁舎	35,994m ²
1. 庁舎	35,556m ²

区 分	本庁舎 平 城 藤 原 飛 島 資 料 館						計
	m ²	m ²	m ²	m ²	m ²	m ²	
事務室	646	176	197	108			1,127
研究・整理室	1,417	2,465	1,205	125			5,212
資料・図書室	1,021		383	131			1,535
会議室	338		129	49			516
講堂		538	210	132			880
展示室		864	254	1,361			2,479
写真室		411	149	78			638
復原建物		834					834
遺構展示室		1,563					1,563
車庫	84	608	352	94			1,138
倉庫・収蔵庫	133	7,409	3,114	696			11,352
研修棟	1,416						1,416
その他の	1,666	2,052	1,506	1,606	36	6,866	
計	6,721	16,920	7,499	4,380	36	35,556	

2. 宿舎等

重要文化財旧米谷家住宅	438m ²
飛鳥資料館宿舎	225m ²

主要工事

(1) 平城宮跡地等整備費	千円
平城宮跡朱雀門復原平成7年度工事	782,285

VII. 人事異動 (1995.4.1 ~ 1996.3.31)

4月1日 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に配置換

猪熊 勝勝	
埋蔵文化財センター長に昇任	工業 普通
埋蔵文化財センター研究指導部長に昇任	沢田 正昭
庶務部庶務課長に昇任	清水 功
庶務部会計課長補佐に昇任	緒谷 優
庶務部会計課用度係長に昇任	中嶋 昌士
飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室長に昇任	巽 淳一郎
飛鳥資料館学芸室長に昇任	岩本 圭輔
埋蔵文化財センター研究指導部発掘技術研究室長に昇任	光谷 拓実
埋蔵文化財センター研究指導部遺物処理研究室長に昇任	肥塚 隆保
庶務部会計課経理係長に配置換	市原 稔三
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室長に配置換	松村 恵司
埋蔵文化財センター研究指導部測量研究室長に配置換	西村 康
埋蔵文化財センター研究指導部考古計画研究室長に配置換	金子 晃之
平城宮跡発掘調査部主任研究官に配置換	立木 修
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換	千田 朗道
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換	村上 隆
飛鳥資料館主任研究官に配置換	杉山 洋
飛鳥資料館学芸室に配置換	次山 淳
庶務部会計課専門職員(施設係)に転任	笠松 保
庶務部庶務課庶務係に転任	八木 清隆
文部技官(建造物研究室長)に採用	木村 勉
文部技官(平城宮跡発掘調査部遺構調査室)に採用	箱崎 和久
文部技官(平城宮跡発掘調査部史料調査室)に採用	古尾谷知浩

文部技官（平城宮跡発掘調査部計測修景調査室）に採用 平澤 裕
 事務補佐員（庶務部庶務課）に採用 中風呂恭代
 事務補佐員（庶務部会計課）に採用 山口 由佳
 研究補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用 近藤 大典
 千葉大学文学部教授に転任 河原 純之
 文部省生涯学習局婦人教育課ボランティア推進専門官に配置換 馬場祐次朗
 京都大学経理部経理課長補佐に転任 福田 八郎
 大阪大学医学部用度掛長に転任 年悔 錠
 和歌山大学施設課企画係長に転任 坂上 定敬
 京都大学庶務部庶務課庶務掛に転任 桑原 隆佳
 文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官に転任 小池 伸彦
 7月1日 庶務部会計課施設係施設主任に昇任 松井 敏夫
 10月1日 山口大学人文学部助教授に転任 橋本 義則
 12月1日 文部技官（埋蔵文化財センター研究指導部遺物処理研究室）に採用 高妻 洋成
 1月1日 飛鳥藤原宮跡発掘調査部研究官に配置換 寺崎 保広
 文部技官（平城宮跡発掘調査部史料調査室）に採用 山下信一郎
 文部技官（埋蔵文化財センター情報資料室）に採用 奥村小百合
 2月9日 辞職 小林 玉美
 3月1日 事務補佐員（庶務部会計課）に採用 井野由宜子
 3月31日 退職 本中 宣代
 退職 近藤 大典
 退職 福井 敏子

VII 組織規定

文部省組織令（抜粋）

昭和59年6月28日 政令第227号

第2章 文化庁

第3節 施設等機関 (施設等機関)

- 第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。
 2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。
 (中略)
 国立文化財研究所
 (国立文化財研究所)
 第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。
 2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
 3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は文部省令で定める。

文部省設置法施行規則（抜粋）

昭和28年1月13日 文部省令第2号

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

(名称及び位置)
 第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都 台 東 区
奈良国立文化財研究所	奈 良 県 奈 良 市

第2款 奈良国立文化財研究所

(所長)

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に、飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

(庶務部の分課及び事務)

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

一 庶務課

二 会計課

2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

一 職員の人事に関する事務を処理すること。

二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の受取及び公印の管守その他庶務に関する事務。

四 この研究所の所掌事務に關し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に關すること。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3 会計課においては、次の事務をつかさどる。

一 予算に関する事務を処理すること。

二 経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四 宮舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。

五 宮内の取締りに關すること。

第126条 削除

(建造物研究室等の事務)

第127条 建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

2 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)

- 第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。
- 2 前項の各室においては、平城宮跡に關し、次項から第6項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。
- 3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 6 資料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務）

- 第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室及び史料調査室を置く。
- 2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に關し、次項から第5項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。
- 3 考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 5 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥資料館）

- 第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に關し、國民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の觀覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。

（飛鳥資料館の館長）

- 第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。

- 2 館長は、館務を掌理する。

（飛鳥資料館の二室及び事務）

- 第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。

- 2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。

- 3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。

一 飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行うこと。

- 二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。

- 三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

（埋蔵文化財センター）

- 第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。

- 一 埋蔵文化財に關し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。
- 二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的な研修を行うこと。
- 三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。
- 四 埋蔵文化財に関する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。

（埋蔵文化財センターの長）

- 第134条 埋蔵文化財センターに長を置く。

- 2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

（埋蔵文化財センターの内部組織）

- 第135条 埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。

（教務室の事務）

- 第136条 教務室においては、研修の実施に關する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に關する事務をつかさどる。

（研究指導部の六室及び事務）

- 第137条 研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。

- 2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に屬するものを除く。）をつかさどる。

- 3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に屬するものを除く。）をつかさどる。

- 4 発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

- 5 遺物処理研究室においては、遺物の処理に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

- 6 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

- 7 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

（情報資料室の事務）

- 第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

（客員研究員）

- 第139条 泰良国立文化財研究所に客員研究員を置く

ことができる。

2. 客員研究員は、所長の命を受け、奈良国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3. 客員研究員は、非常勤とする。

改 正	昭和43年 6月15日	文部省令第20号
	昭和45年 4月17日	文部省令第11号
	昭和48年 4月12日	文部省令第 6号
	昭和49年 4月11日	文部省令第10号
	昭和50年 4月 2日	文部省令第13号
	昭和51年 5月10日	文部省令第16号
	昭和52年 4月18日	文部省令第10号

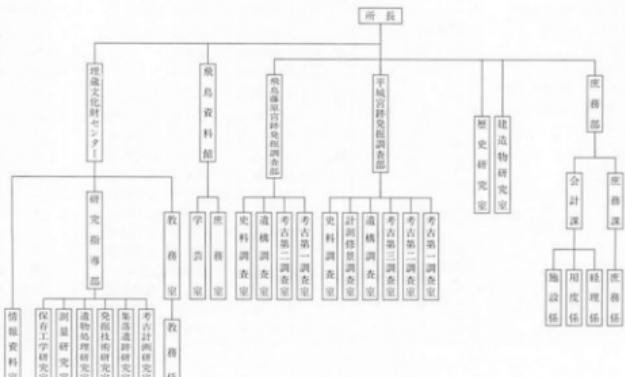
昭和53年 4月 5日	文部省令第19号
昭和53年 9月 9日	文部省令第33号
昭和55年 4月 5日	文部省令第14号
昭和55年 6月25日	文部省令第23号
昭和58年10月 1日	文部省令第25号
昭和59年 6月30日	文部省令第37号
昭和63年 4月 8日	文部省令第12号

職 員 (1996年 7月 1日現在)

所 属	氏 名	官 職	職 級	担 当
田 中 球	文部技官 所 長			
板垣義信	文部事務官 部 長			
清 水 功	文部事務官 課 長			
野 木 正 博	文部事務官 課長補佐			
西 田 建 三	文部事務官 専門職員			平成事務
大 川 春 和	文部事務官 座席係長			
八 木 清 隆	文部事務官			庶務人事
大 西 和 子	事務補佐員			庶 務
福 本 良 子	事務補佐員			庶 務
新 宮 忠 子	事務補佐員			庶 務
中 亂 吾 代	事務補佐員			庶 務
桜 谷 英	事務補佐員			庶 務
中 田 か よ	事務補佐員			圖書資料科
中 坂 雄 美	事務補佐員			圖書資料科
伊 藤 久 美	事務補佐員			圖書資料科
石 川 久 孝	研究補佐員			公 開
岸 村 功	技能補佐員			保 守
金 橋 伸 雄	文部事務官 課 長			
稲 佐 俊 也	文部事務官 課長補佐			
渡 達 康 史	文部技官 課長補佐			
今 西 康 益	文部技官 専門職員			施 設
横 井 雅 三	文部事務官 専門職員			藤原事務
市 原 忠 三	文部事務官 経理係長			
北 田 博 之	文部事務官 経理主任			
港 晃 子	事務補佐員			経 理
森 本 は ぎ や	事務補佐員			経 理
井 野 由 宜 子	事務補佐員			経 理
中 鳴 昌 士	文部事務官 用度係長			
小 野 敦	文部事務官 用度主任			
乾 田 信 男	文部技官 車庫長			自動車運転
上 村 敏 子	事務補佐員			用 度
幸 田 忠 理 子	事務補佐員			用 度
今 西 康 益	文部技官 施設係長 (兼任)			
横 井 敏 夫	文部技官 施設主任			施 設
上 堀 内 茂 树	文部技官			施 設
水 井 和 代	事務補佐員			施 設
山 口 由 佳	事務補佐員			施 設
中 堅 博	技術補佐員			施 設
木 村 勉	文部技官 室 長			建 設
村 田 勉	文部技官 主任研究官			基 础
浅 田 信 男	文部技官 (併任)			基 础
小 野 健 吉	文部技官 (併任)			道 路 庭 園
田 岩 俊 男	文部技官 (併任)			建 設
藤 田 豊 児	文部技官 (併任)			基 础
長 尾 充	文部技官 (併任)			基 础

所 属	氏 名	官 職	職 級	担 当
歴 史 研 究 室	綾 村 宏	文部技官 室 長		歴 史
寺崎保広	文部技官 (併任)			歴 史
岩 本 有 三	文部技官 (併任)			考 古
森 本 譲	文部技官 (併任)			考 古
深 澤 万 叶	文部技官 (併任)			古 古
渡 道 晃 宏	文部技官 (併任)			歴 史
町 田 章	文部技官 部 長			
小 林 謙 一	文部技官 室 長			古 古
加 藤 真 二	文部技官			古 古
白 井 熊	文部技官 (併任)			古 古
高 麻 洋 成	文部技官 (併任)			保存科学
川 越 優 一	文部技官 室 長			古 古
金 田 明 大	文部技官			古 古
立 木 修	文部技官 (併任)			古 古
玉 田 芳 英	文部技官 (併任)			古 古
山 崎 信 二	文部技官 室 長			古 古
清 野 孝 二	文部技官			古 古
井 上 和 人	文部技官 (併任)			古 古
岩 本 有 三	文部技官 (併任)			古 古
町 田 章	文部技官 室長 (事務取扱)			建 基
大 野 伸 一	文部技官			建 基
長 久 照 久	文部技官			建 基
西 山 和 宏	文部技官			建 基
浅 田 伸 男	文部技官 (併任)			建 基
高 濵 要 一	文部技官 室 長			道 路 庭 園
内 田 和 伸	文部技官			道 路 庭 園
平 澤 稔	文部技官			道 路 庭 園
小 野 健 吉	文部技官 (併任)			道 路 庭 園
館 野 和 一	文部技官 室 長			歴 史
古 尾 爽 知 浩	文部技官			歴 史
山 下 信 一 郎	文部技官			歴 史
渡 道 晃 宏	文部技官 (併任)			歴 史
井 上 和 人	文部技官			考 古
立 木 修	文部技官			考 古
岩 本 有 三	文部技官			考 古
小 野 健 吉	文部技官 (併任)			考 古
浅 田 伸 男	文部技官			考 古
内 田 和 伸	文部技官			考 古
平 澤 稔	文部技官			考 古
小 野 健 吉	文部技官 (併任)			考 古
館 野 和 一	文部技官 室 長			歴 史
古 尾 爽 知 浩	文部技官			歴 史
山 下 信 一 郎	文部技官			歴 史
渡 道 晃 宏	文部技官 (併任)			歴 史
井 上 和 人	文部技官			考 古
立 木 修	文部技官			考 古
岩 本 有 三	文部技官			考 古
小 野 健 吉	文部技官 (併任)			考 古
浅 田 伸 男	文部技官			考 古
玉 田 芳 英	文部技官			考 古
渡 道 晃 宏	文部技官			考 古
白 井 熊	文部技官			考 古
西 田 健 三	文部事務官 (併任)			事 著
個 々 領 旗	文部技官 専門職員			事 著
井 上 真 一	文部技官			真 真
牛 鳴 茂	文部技官			真 真

所属	氏名	官職	担当	所属	氏名	官職	担当
飛鳥	猪瀬 兼勝	文部技官 部長	古	資料室	藤本 清	事務補佐員	備事務
	黒崎 直	文部技官 室長	古		森井恵美子	事務補佐員	務事務
	深澤 芳樹	文部技官 (併任)	古		米川まち子	事務補佐員	古事務
	花谷 浩	文部技官 (併任)	古		岩本圭輔	文部技官 室長	古事務
	井上直夫	文部技官 (併任)	真		杉山 譲	文部技官 主任研究官	古事務
	松村 恵司	文部技官 室長	古		次山 哲	文部技官	古事務
	千田 利道	文部技官 (併任)	古		大谷照子	事務補佐員	古事務
	西口 寿生	文部技官 (併任)	古		工楽 普通	文部技官 センター長	事務
	西口 隆	文部技官 (併任)	古		西影憲二	文部事務官 室長	務事務
	異淳一郎	文部技官 室長	古		高畠孝雄	文部事務官 教務係長	古事務
原宮	島田 敏男	文部技官 (併任)	古		宍戸雅子	事務補佐員	事務
	藤田 盟見	文部技官 (併任)	古		牛嶋 茂	文部技官 (併任)	務事務
	毛利光俊彦	文部技官 室長	古		沢田 正昭	文部技官 部長	事務
	寺崎 保 庄	文部技官 (併任)	古		金子裕之	文部技官 室長	古事務
	佐川 正敏	文部技官 (併任)	古		山中敏史	文部技官 室長	古事務
時発	小澤 穀	文部技官 (併任)	古	教務室	光谷拓実	文部技官 室長	事務
	千田 周道	文部技官 主任研究官	古		松井 章	文部技官 (併任)	古事務
	西口 寿生	文部技官 主任研究官	古		肥塚 隆保	文部技官 室長	保存科学
	深澤 芳樹	文部技官 主任研究官	古		高妻洋成	文部技官	保存科学
	寺崎 保 庄	文部技官 主任研究官	古		西村 康	文部技官 室長	古事務
	佐川 正敏	文部技官 主任研究官	古		松井 昭	文部技官 (併任)	古事務
	花谷 浩	文部技官 主任研究官	古		加藤 光彦	文部技官 室長	事務
	小澤 穀	文部技官 主任研究官	古		内田昭人	文部技官 (併任)	古事務
	村上 隆	文部技官 主任研究官	古		内田昭人	文部技官 主任研究官	事務
	島田 敏男	文部技官 主任研究官	古		松井 章	文部技官 主任研究官	古事務
振査	藤田 盟見	文部技官 主任研究官	古		森本 普	文部技官 主任研究官	事務
	櫻井 雅樹	文部事務官 事務秘括(併任)	務		岩永 恵子	事務補佐員	事務
	吉岡佐和子	事務補佐員	務		伊東 作	文部技官 室長	古事務
	松本 誠	技能補佐員	守		奥村小百合	文部技官	古事務
	木寅貞子	技能補佐員	守		森本 普	文部技官 (併任)	古事務
	宮川 伴子	研究補佐員	自前選貢資料整理		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	事務
	荒木浩司	研究補佐員	古		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	古事務
	伊藤敬太郎	研究補佐員	古		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	事務
	羽鳥 幸一	研究補佐員	古		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	古事務
	水戸部秀樹	研究補佐員	古		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	事務
飛鳥	田中 珠	文部技官 館長 (事務取扱)	保	研究室	内藤 光彦	文部技官 主任研究官	事務
	左右田 進	文部事務官 室長	守		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	古事務
	中西 建夫	文部事務官 庶務主任	守		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	古事務
	乾 春雄	技能補佐員	守		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	古事務
			守		内藤 光彦	文部技官 主任研究官	事務





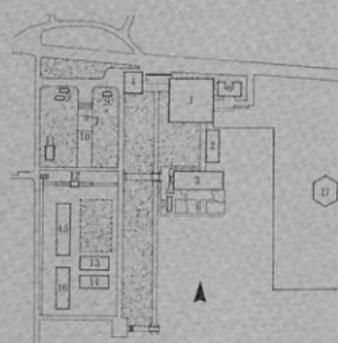
本館配置図

- 1 本館
- 1階 底座部及び図書資料室
- 2 階 所長室及び平城宮跡発掘調査部
- 3 階 塔跡研究室、歴史研究室及び埋蔵文化財センター
- 2 埋蔵文化財センター研修棟
- 4 燃油棟
- 5 車庫
- 6 自転車置場
- 7 正門
- 8 通用門
- 9 非常口



平城宮跡資料館配置図

- 1 平城宮跡資料館
 - (1) 展示室 (3) 準備室
 - (2) 講堂 (4) 小講堂
- 2 第1収蔵庫
- 3 第2収蔵庫
- 4 第3収蔵庫
- 5 第4収蔵庫
- 6 第5収蔵庫
- 7 大型遺物処理棟
- 8 遺物解析処理棟
- 9 便所
- 10 整理棟
- 11 資材保管加工棟
- 12 収蔵庫
- 13 佐伯門跡



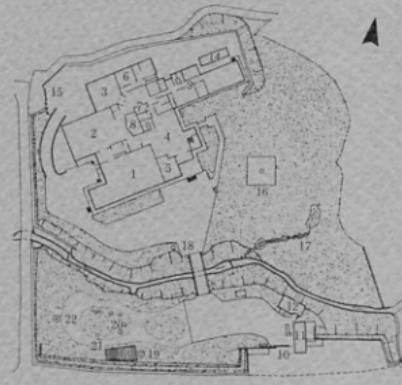
平城宮跡遺構展示館配置図

- 1 遺構展示館
- 2 展示館
- 3 遺構展示小屋
- 4 管理棟
- 5 塔跡復原室
- 6 塔基基礎復原
- 7 東大講復原
- 8 便所
- 9 パーゴラ
- 10 宮内広場
- 11 防災設備室
- 12 宮内省北門・墓地跡復原
- 13 宮内省復原建物（南殿）
- 14 宮内省復原建物（南殿第2棟）
- 15 宮内省復原建物（西北殿）
- 16 宮内省復原建物（西南殿）
- 17 造酒司井戸の再現展示



飛鳥藤原宮跡発掘調査部配置図

- 1 整理研究棟
- 2 管理棟
- 3 展示室
- 4 講堂
- 5 入口
- 6 収蔵庫棟
- 7 保存科学棟
- 8 車両庫
- 9 六条通間跡
- 10 建物跡
- 11 東三坊坊間跡



飛鳥資料館配置

- 1 第1展示室
- 2 第2展示室
- 3 講堂
- 4 ロビー
- 5 講習室・売店
- 6 会議室
- 7 便所
- 8 光庭
- 9 管理棟
- 10 正門
- 11 光礼所
- 12 屋外展示解説室
- 13 パーゴラ
- 14 機械室
- 15 通用門
- 16 須弥山石
- 17 游船石
- 18 石人像
- 19 山田寺塔心礎
- 20 旗石
- 21 入頭石
- 22 法輪寺塔心礎

ANNUAL BULLETIN
OF
THE NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE
1996

Table of Contents

	Page
Excavations in the Asuka Area	1
Excavations of the Fujiwara Palace and Capital Sites	5
Excavations of the Nara Palace and Capital Sites	12
Making Method of the Flat Eaves Tiles of the Yamada-dera Temple in the Foundation Time	24
Width of the Sixth Street in Fujiwara Capital Site	26
Building Materials Found at Motoyakushi-ji Temple	28
Copper, Bronze and Gilt Bronze Artifacts Excavated in Asuka Fujiwara Area	30
Wooden Tablets Excavated in the Nara Palace and Capital Sites during 1995	32
Piece of Paper Bearing Ink Characters Permeated with Lacquer Excavated from Nara Palace and Capital Sites	34
Investigation of Metal Vessels Owned by Horyu-ji Temple(3)	36
New-pottery with Strange Comb Patterns	38
Description of the Divine Deer in the Documents Owned by Kofuku-ji Temple	39
Basic Plan and Design for Reconstruction of the Early Imperial Audience Hall	43
Architectural Studies on the Early Modern Buddhist Temples and Shinto Shrines in Okayama City(2)	44
Chamfering Materials of the Ancient Construction	46
Research on the Dwellings and Settlement Pattern of the Korean Minority People in Heilong Jiang, China	48
Survey of the Vernacular Houses in Shiga Prefecture(1)	50
Special Exhibitions at the Asuka Historical Museum	51
Dendrochronology(13)	52
Analysis of Faunal Remains(12)	53
Identification of the Archaeological Objects by Fourier Transform Infrared (FT-IR) Spectrometry	54
Relationship between Deterioration and Shrinking Behavior of Archaeological Water-logged Woods	55
Identification of the Geologic Origins of Stone Artifacts(2)	56
Site Surveying by Underground Radar(2)	58
Improvement of the Information System	60
Restoration of the Nara Palace Sites	62
Cooperative Research on the Conservation Science of the Artifacts from PAZYRYK Mounded Tomb in Russia	66
Collaboration in the Restoration of Angkor Cultural Heritage	67
Brief Reports on Research Tours Abroad	68
International Architectural Conservation Course in ICCROM	69
Miscellaneous International Research News	70
Public Lectures in 1995	72
Intra-institute Advanced Seminars	73
Miscellaneous Research News	76
Miscellaneous Activities of the Institute/Organization of the Institute	77

Published by

Nara National Cultural Properties Research Institute

Nara, 1997.3.